



Miracles! Episode 7

- 43 -

神経質そうだけど
オマセでカンコ委員長。
クラブなスピードDF。

2ND

美原
はるか
HARUKA

天真爛漫食いはかな
ナチュラル・ガール。
超攻撃的バフレイベロ。

天道
蘭
RAN

無口ながら
存在感あいの
超絶美少女。
実はお茶目。
フィジカル系
バフ-FW。

堺愛
LOVE
AI

和泉流
RYU
RIN

長居美緒
MIO

難波
NANA
NANA

センス抜群
セキキキキキキ
あんたかんだい いちこもよく
ズイイ奴。先達サイドアタッカー。

強く優しく頼もすぎる。
我が大黒柱。
パーフェクトボランチ、キャプテン。

空想サッカー小娘
美浪花主婦。
盛り上げ上手な
テクニカル司令塔。

ヒロイン
本日の主役

- ラズマ だいり
・ 上野大地 (2年) ... サッカー戦術と乙女心掌握の天才。2-4 (監督)。
- からぼり さとる
・ 空想三六 (2年) ... 軽い足腰と無駄に豊富なアイデア。
4-6、プロデューサー。

- ヒカヤカ かつる
・ 高安和輝 (2年) ... 放送部。テニスが得意な有名。

登場人物
ご紹介

日廻ハートの元ファイター。
スベーター。物腰柔らか。
微笑みと絶やさぬ。
中盤の動きが。
ハニーボー。

ボーイッシュ&元気一番。
ムードメーカー。
FW兼任の超反応GK。

1ST

平野
エレナ
ELENA
DF

吹田千里
CHEETAH
GK

西条
明葉
DF



佐吉古都
COTTON
Manager

天王寺ありす
ALICE
DF

此花可憐
KALLEN
FW

見た目派手でも
線の下のカ持ち。
気配が大好き
マネージャー。

一見ミューガバイズ、
実は底の知れない
天才少女。
ファンタジスタ。

トランプ純ただどこか
カワイイ裏もん坊。
ユース代表の逸材。
エース・ストライカー。

天下無敵のバケ倒せあせつこま。
敵も味方も大混乱。
鉄壁の右サイドバック。

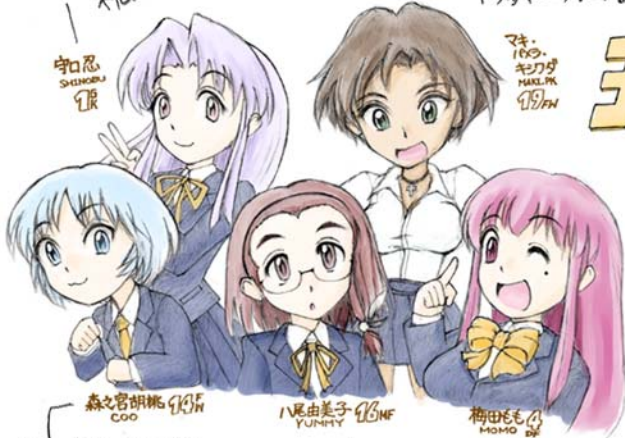
時にカジャル時に武人、
霞に見え目に騙されては
いやな。
不屈の守護神。

日系4世ブラジリアン。
誰にも止められないダンジリサウバ。
トリッキーウイング。

宇和忍
SHIMORI
DF

マキ。
160。
キナダ
MAKINA
FW/MF

3RD



森宮明桃
COO

八尾由美子
YUMMY

梅田もも
MOMO
DF

クールと捉えどこのない。
どき時に何も考えてない
ネコ娘。
高次元戦闘爆撃
センターFW。

努力家の頼れる姉貴。
ガリと肝玉は
天下一品!
MF/DF自備職人。

B3桁のダイトボデーで
バキを喰い回す食神。
フェアレ・DFリーダー。

★あらすじ？

「ミラクルズ」はとある街の女子サッカークラブチーム。
昔の名前は「どきどき・サッカー・クラブ」。
創設者は難波鳴海、愛称ナナ。
今回はその、いつも陽気な浪花の弾丸娘のお話。
新人も入った、コーチも得た、さあこれから！
というところで、彼女はちいさな小径に迷います。
そこから引っ張りだすのは、あるいは一緒に迷うのは、
口も軽けりや腰も軽い、我らが空堀三十六クン。
はてさて、どんな騒動が巻き起こりますことやら……

★もくじ！

■第一幕

- 一場 独白三十六
- 二場 独白七
- 三場 アオリ
- 四場 ラーメン『山嵐』
- 五場 革命

■第二幕

- 一場 迷子
- 二場 シンパシー

■第三幕

- 一場 リカちゃん電話
- 二場 西九条家
- 三場 いつもの

■第四幕

- 一場 準備
- 二場 迷い・困り・怒る
- 三場 ハーフタイム
- 四場 エンジン始動
- 五場 締められる
- 六場 ウチは浪花の

■第五幕

- 一場 宴

■ 第一幕

● 一場 独白三十六

俺の名前は空堀三十六（からぼり・さとる）。高校二年生。見ての通りのナイ・スガイ。趣味は読書と、まあ書きモンをちよちよいと。

部活はその文藝部と、部員じゃないんだけど演劇部のおてつたい。根っから&子供の頃からのインドア派

ツス。暑い嫌い・寒い嫌い・動く嫌い・埃っぽいの大嫌い。

ところ・が。

そんなあたしがなんだかんだすったもんだで……え？　なんだその八〇年代くさい話の端折り方は？　読んでるもんが古いんですすいません。いいですよその頃の。読んでると、

「ああ、これでいいんだ」

とすっかり心ほだされます。

いいじゃないですかそんなことはどうでもすみません脱線多くて。

だつて青春ですからね。

まあ、そんな感じでぶらぶらフラフラして
おりましたところ。

人間、どこで何が起るかわかんないもんです。

友達がね？

いや正確には友達の友達から、その友達を自分たちの劇団に巻き込みたいと。その手伝いをして欲しい。こう言われました。

ぼく根がお人好しなのか、そういうこと言われちゃうと、自分のことよりよっぽどがんばっちゃう方なんです。で、わりと踏ん張っちゃいましたら、ホントに

彼は、その軍団にインしてくれはったわけですよ。

無事ね。

目標達成！

ところがすな。

なんかしらんですけど、僕も入っちゃってた。

「入っちゃってた」とか言つて、そりや自由意思つてもんが認められていることになってる現代日本ですから、まあ僕もまんざらではなく入ってるんですけどね、そのチームに。

あ、サッカー・チームなんです。そのゴロツキ集団。しかも女子。

「ナデシコ」とかなんとかかんとか言わはるでしよ
う？

とんでもない。

ラフレシアですわ。

いやラフレシア言うのと怒られるかな、見てくれはエ
エンスわ、わりあい。軍団は一六人ほど居て、マナー
ジャーの子入れて一七人なんですけど、まあそこそこ
のがズラーツと揃ってて、結構壮観ですよ。いやホン
マね、あんなユニフォームなんて色気無いの着せずに、
ハレハレのフリフリのリボンリボンのお洋服着せて、
「アイドルユニットでござい」言うて一山いくらで売

り出したいぐらいです。

書くよ詞。なんぼでも。書くっていうか、いろんなところからコピーしてつぎはぎするよ。

せやから、見てくれは綺麗で実は毒々しい……トリカブト？ いや毒じゃないんですよね、むしろ中毒……ケシ？ 痩せた土地、芝一本生えてない土のグラウンドで雄々しく……いやごめん一応女子なんでね、せやかて女々しく言うとかやうし……凛々しく。凛々しく咲き誇らんと背伸びをしている様が、まさに三角地帯のケシ畑！ もう金になるなる金になる。

“麻薬王” に!!! 俺はなるっ!!!!

ここだけの話ですよ？

ま、そんなような具合で、僕が巻き込まれてしまったサッカー・チーム、『ミラクルズ』のおはなしを、今日はひとつ。

たいしたお話やおまへん、どうぞ膝を崩してベルトを緩めて胸を開いて眦を下げて口角を上げて、ごゆるりとお聞きいただきとうございます。

では、一献。

●二場 独白七

ウチの名前は難波鳴海（なんば・なるみ）。高二。
ぴちぴちギヤルやで。

いやホンマのぴちぴちギヤルは自分のことをぴちぴちギヤルなんて言うわけ無い、てのはわかってまつせ。軽いくすぐりやがな。まず最初から印象づけていかんとね。第一印象がだいじやで人間。

通称は可愛い可愛いナナちゃん。名選手ディオン・ダブリン略して『DD』のように、苗字と名前から一

文字ずつとつていつのまにやら周りがそう呼んでくれてんねんけど、最近自分でも自分の名前が『ナナ』のような気がしてきて、いや『難波ナナ』どころか『ナナ』。こないだなんか、どつかの会員証の申込用紙に氏名欄『ナナ』て書いてもて、おはなに爆笑された。

あいつ人のミス笑う時爆笑しやがんの、悪いクセやでホンマに。

せやけどそんなもんやで、呼ばれてるとそうなたてくんねんペットの犬猫でもそやろ？

まそれはええとして。

趣味つちゅーか生活の中心はサッカー。

あ、えー、ま、あんまり大きな声で言いますと自慢話みたいになりますんでちいちゃい声で囁きますんですけど、いちおう、年代別代表にずっと選ばれてます。フッフ。

いや凄ない凄ない、ぜんぜん凄ない、わたしは、わたしの毎日やるべきことをひとつずつね、ひとつずつただただやってきただけ。

え？ 「年代別代表」がわからない？

あ、えー、まあその、日本代表てありますやろ。あれのね、若い版ていうのが下からジュニア、これがざっくり小学生、ジュニアユース、これ中学生、ほん

でユース、これが高校生、で一般、いわゆるフル代表が年齢制限無し。この四つに分けられてるんです。だもんでウチは、いまんところ下三つで順調に選ばれてる、ってことです。

あ、やつと「そこそこイケてる」ってことがおかわりいただけました？

でしょ、おんなは見ただ目やおまへんで。ハート、度胸、心持ち。そこにちよつと愛嬌のスパイスが振りかかっていればそれで十分やね。

まあまた詳しいお話することもあるか思いますが、

ウチは高校生に上がる時、強豪の高校からの誘いを蹴って、自分でチームを立ち上げる、というムチャに挑戦しました。

我ながらムチャやと思ってたんですけど、神様っていうのは案外、「こいつムチャしょんなあ」という人には甘いようです。幸運にも、そこそこやれる面子が集まって、ワイワイ楽しいやつてるうちに、そうそうみんな「サッカーに関しては」素直なんで、ウチの言うことよう聞いてくれました、なんと、これは自分でもビックリしたんですけど、地区予選を一位で突破しちゃいましたね。去年、全国行っただけですよ全国。

凄いでしょ？

まあ全国は初戦でコテンパンに熨されて、泣いて帰ってきたんですけど……

そんな感じで、楽しいやってました。

やってました。

ところがですね。

学年上がったことだし下に新入生取ってパーツと盛り上がっていいことや！と張り切ったはええものの、ほんで思いの外ええのが何人も奪れて「ヒヤッハー！」言

うてたのもつかの間、やつぱり人数増えて、みんなめざす方向がバラバラで、チームは空中分解……という
と大げさですけど、ギク・シヤクして機能不全みたい
になつたんです。

好事魔多し、ですなあ。

ウチはウチなりにがんばってましたし、キャプテン、
これがまたエエ女でしてね、頼りがいのある、いやあ
りすぎる、いやなんて言うたらええんやろう、柱？
ダイコクチュウ。ま彼女も頑張つて……

いや、だから「頑張る方向」てのがなんでもだいじ
でしてねえ。

あれホンマ、今にして思うと、ああいうところがこの人はキャプテンの器であり、ウチはそうやない、と痛感したのが、

助けを求めたんです。

これが、なかなかできん。

特にウチは、サッカーの事ならこのチームの中で誰よりも詳しい、という自負がありましたし、実際そうでもあったと思います、せやけど、サッカー・チームにとつて、「サッカーのこと」っていうのは、ほんのちよびーつとのことなんですなあ。

それ以外が9割。

電車で吊り広告見てると

「ナントカが9割！」

てよう書いておまつしやる。あれだす。

だいたいナントカがだいたい9割で、サッカーとか、一見だいじかな？と思われるようなことは1割ぐらいなんです。

ちなみにサッカーでも体力が9割。九〇分で一三キロインターバル走やれる体力あつたらプロにはたぶんなれる。メッシにはなれんかもしれんけど。

そんな簡単なもんか？

ほなやれますか。

やれませんか？

それをやったらええことあるとわかっててもやれないのが人間つてもんで、だからそれ以外のことをやろうと四苦八苦するんです。もちろんそこから創意工夫が生まれて進歩そして進化もするんですけど、基本はそうじゃない。特に、ウチらみたいに身体使うネタは、そう、そうそう革命的なことなんか起きません。

話ズレましたね。

ほんで助けを求めた先つてのがこれまた、イケメン。

なんかね、この人がね、ヌボーツとした薄らでかい、あんどこ見てるかわからん夢見がち瞳男子、っていうとエエように聞こえますけど、ホンマ普段何考えてるかわからん、なんかフワッフワした男でねえ。大ちゃん言うんですけど。

これがね、

いやあ人間ってホント迂闊やね。

ほんの近くに居る人のことでも、その人のことを積極的に知ろうと思わんと、なにも知らないし、知ることも無い、んです。

練習試合なんですけどね。

新入社員、いや社員じゃない、新入生も揃って新チーム初試合、これそこそこエエトコとやれることになつて、おうそれは齒ごたえあるな、コテンパンにされてもエエ経験や、ぐらいに思ってたんですけど、実際始まつてみたらアレですわ、ホンマにギューツと真綿で首を絞めるように身動き取れなくされてね、ぽんぽーんと点獲られました、あとはヘビにトグロで絡みつかれるガマガエル。グゲー、もうあかん、もう死ぬ、タンスの引き出しに通帳入ってるから七海、八太、ふたりで大事に使うて……あこの二人は娘と息子の予定なんですけど、そんなピンチ・オブ・ピンチにですね

え。

イケメンご登場ですよ。

びつくりしましたよ普段と全然違うの。

キリッ！ パリッ！ ピシッ！ パキッ！

ほんでから、

バシーン！ バシーン！ バシーン！

と、こう指示を出しまして。

え？ わからへん？

いやもうエエんです細かいことは。バシーン！指示が飛んでピシャーン！とその場に居た全員の背筋が伸びたところがだいじなことで。それが9割、いやすべ

て。あんた何聞いてますのん人の話。

で、逆転ショーリ。軽やかに。

はあゝ。

ため息出しましたでホンマ。

ウチのやってきたことはなんやろう、いやウチはなんやろう、って。

イケメンがパシーン！言うたらみんなピキーン！てなつて優勝ですわ。

そりや真理ですよ、真理かもしれないけど、ほな

ね、努力とか、計画とか、コツコツと毎日毎日練習は裏切らない……いやあ。

まあ、まあまあまあまあまあまあ、そうは言いましたも？ まあ、チームが強くなる、てのはもちろんいいことです。

それから、やっぱり女子の集団は一人男子入るとちやいますね。あ、もちろん男子もそやろと思うから女子マネが居るんでしょうけど、みんなこうね、パリツとする。あんまカッコ悪いことはできんなあ、てなもんでね。

流乃吉なんかあいつホンマダルがりで、練習飽いてきたら人目構わず

「あー たるー」

言うてプラプラプラ歩いてやがったのに、いや歩くの直ってへんねんけど、「たるー」とは言わんくなつた。あのそのへんのネコよりワガママな流乃でそうなんで、あとは雄蕊と雌蕊、いや違うななんて言いましたつけ、おして、おして、押して引いて？ プッシュ・プッシュ・プル・プッシュ？

ともかくみんなねえ、いやあ、そう話また逸れるん

ですけど、ホンマにシュツとした美男子でねえ。くど
いようやけど。あウチはなんともないんですよ、ああ
いうタイプの超カッコイイの。ウチ攻撃的ミッドフイ
ルダー、攻撃のタクトを振る役ですんで、人と違った
こと、人の見てないところを見んなあきません。そん
なこんなで、みんなが夢中、つてところはあえて見な
い。

みんながシャウトするヴォーカルの男の子に、ある
いはカッコよくギターを弾きまくる男の子に夢中な時
に、薄暗い後ろの方でしかめっ面でキーボードぽち
ぽちしてる人を見る。これです。

まだ同学年は接触する機会も多いんであれなんですけど、一年生とか三年生とか、もうポーツとなっちゃってねえ。も何でも言うこと聞きます、言うてください掃除でも洗濯でも、て勢いです。

……はあ。

ウチはもう要らんのかな、いや要らんいうと言い過ぎやね、ただのワンオブゼムでええんかな、と思いますとね、寂しいの半分、でも肩の荷が下りたのも事実。やつぱり餅は餅屋、指揮とか監督とかモチベーション

コントロールとか、そういうのはああいうなんて言いますかね、天才？ 才能？ 生まれ持ってそういう資質がある人に任せた方がええんかな、と思ったり思わなんんだり……

特性つてありますよ、やつぱり。得意不得意ね。自分じゃわからんこともある。ウチの友達でもいますよ、「アイドルめぎす」つて言うてて「そうかがんばれ」言うてたんですけど、なんか歌がイマイチアイドルじゃないんですよね。すんごい巧いんですけど、なんていうかこの、キラキラッ！ きゅぴきゅぴっ！てのが無くて。なんか落ち着いてるんですよ渋茶色に。ほん

でこないだ会ったら着物着てて、しかもこれが似お
てる。なんや言うたら「演歌歌手としてデビューす
る」と、こうですわ。

「あんた演歌好きやったん!? アイドルソングしか歌
てへんやないの」

言うたら

「演歌初めて歌うたんやけど、なんかプロデューサの
人が大喜びで……『演歌歌手やったらすぐデビューや。
アイドルやったら孤島でサバイバルから下積みや。ど
っち取る?』言わはるからほな演歌かな、思て……う
ち蚊とか苦手やからサファリとかケニアとか行かれへ

ん」

「それ恫喝やないか。ほんまかいなそれ。あれか、蠟燭の炎が揺れないように」

「それは民謡やんか。ほな歌うてみよか。

『男 岩木山』」

「青森の歌かいな。あんた関西人やろ」

「せやで。気持ちはブルー・フォレストや」

「いやあ……」

「B面は『女 十和田湖』」

「B面！ レコードデビュー!?」

「それとカセットテープ。知ってる？ カセットテープ

プ」

「話には、聞いたこと、ある」

「おもしろいんだよ、頭出しとかできないの」

「……まとにかく歌うてよ」

「♪」

これが巧いのなんの。CD、じゃないレコード買うの約束してしまいました。

いやまあ、そんな感じで、ふふ、それもおもしろいのが、じゃ「監督」任せますわ、言うたら僕は「コーチ」がいい、て。

はあ、あれかいな、欧州じゃ監督のことをコーチ言

うんで、それかいな、言うたら、それもあるけど、ええですかここからよう聞いてくださいよ。キリツとオットコマエな表情キメてね、

「みんなと一緒に、歩みたいから」

カーーッ！ ペッ！

どうですこのカツコよさ。しょうがないでしょう？ あかんわ。人間見た目が9割5分。イケメンは何を言うても許される。何をしてもセクハラにならん。

もうここまでされたらこの可愛い素敵なナナちゃん

もホールダップ、お手上げですわ。わかったやつてくれ全部やつてくれもう全部まかせますと。ウチが男やったら、

「もう、メチャクチャにして！」
つてところかなあ。

ん？

いや、メチャクチャにされたら困るんですけどね。
まあそんな感じで、チーム・ビルディングに着手中、
てのが現状ですわ。

いや、うかうかしてられませんか。代表だなんだ言うても、新しい監督いやコーチの元では横一線スター

トが基本。誰かにポジションを奪われることも十二分に考えられます。ここはひとつ、練習から全力で、エトコめいっばい、アピールしてかんと……

と、頭では思うてた、んですけどねえ。

いやあ……隙があつたんかなあ。

ま監督によつてはね、自分の権威付けのために中心選手を一旦外す、みたいことをやることもよくあるんですけど、あの人はそんな感じではないし……第一ウチ言うてもユース代表ですぜ？　それが、同じクラスのもの、ほらそれこそエンジェルスのリカとかね、そんなんと替われ言われたらそら考えます。そやけどポツと

出のね、いやポツと出にもならん、昨日今日サッカー始めたような文字通りの初心者に……

いやまあ、いや。

いや。

がんばらなあきません！

がんばらな……

いや。

また微妙なんがね、なんとなくそれを受け入れんでもない自分も居るんですよ。これが、自分としては、モヤモヤしてねえ……

〈いや、それはアリやな〉

とかすつごい他人事で聞いてもた。で、その自分に自己嫌悪、というか単純に驚いた。へえ、こんなウチもおるんや、て。

いやあ……

やっぱあの旦那……ウチらの大将、上町大地は、一種の天才やと思うね。

ウチ、こう見えても、また自分で言うのもアレやけど、百戦錬磨のヴェテランのハートにね、混乱を巻き起こす、緊張感を掻き立てる、これだけでも見事な手腕ですよ、うん……うん……

……

トツ……

……トツプ下やつたら、
ウチやろおお!!

●三場 アオリ

——その日の練習はみんな気合いが入っていた。

女子サッカークラブチーム「ミラクルズ」、放課後練習。

今日は練習終わりに新システムの発表があります、とまずコーチから宣言があつた。新システム、ということとはスタメン、スターティングメンバーがある程度固まる、ということ、それはおおごとだ。

去年まで一人ひとり回つてたところに、五人

の新人がやってきた。うち一人は即戦力、それに前回の試合でテスト起用されたそれ以外の三人もポテンシャルの高さを見せつけた。場合によっては、もう一人ぐらいはスタメンに採用されるかもしれない。となると、二人、いままで苦楽を共にした選手が、ベンチに下がることになる。

いつも和気あいあいで笑いの絶えない練習風景が、罵声や怒声こそ聞こえないものの、ちよつとピリツとした雰囲気終始する。

練習が終わった。

コーチは全員をねぎらいながら、伝える。

「……さて、システムの件なんだけど」

物腰あくまでやわらかく、しかし単刀直入で合理的。
上町大地は、ピッチの側に立つと人が変わる。

「サッカーの世界には、『勝ってるシステムはいじるな』という格言があります」

あーっ、とため息とも悲鳴ともつかないものが漏れた。もちろんそれと対照的な、希望に満ちた輝く瞳も。つまり前回のやり方を踏襲する、ということ……

「G K、忍。

D F 4 バック、右から、明日葉、蘭、もも、流乃」

明日葉、のところで何人かが目を剥いた。ルーキーだ。

「中盤底、美緒。基本ゲームキャプテン。

中盤左低め、美緒をサポートしつつ左インサイドを走ってもらうのに、エレーナ」

わあつ、と今度は声も出る。彼女も新人で、当の本人は口に手を当てて固まっている。

「中盤右高め、ウイングと言うかサイドハーフというか、に、ナナ。

トップ下、ありす」

〈いーっ!?!〉

という声を吐きそうになるのを、ナナはすんでこらえた。だが顔は完全にそうなっていたので、美緒がそれを横目で見て苦笑した。ありすの方はぽかーんとそのたいへんに可愛らしい微笑みを変えない。事情が呑み込めていないようだ。

「2トップ、センターで体を張るのに胡桃。その周り自由に動いて点をもぎ奪りに行くのが、可憐。

以上」

可憐がちいさくガッツポーズをするのが、濁った心には嫌味に見える。彼女こそユース代表で、さつき言った「即戦力」だ。たとえば脚一本骨折しててもスタメ

ン確約ぐらいの立ち位置に居るのだが、いつだって全力疾走が彼女の持ち味で、こんな時でも本気で喜ぶ。

「……ただし」

メモから顔を上げ、ちゃんとひとりひとり見回して、コーチは伝える。

「我々はひとつのシステムで、『自分たちのサッカー』を創りあげて、それを相手に押し付けて、力押しで勝てるような、そんな強豪じゃない。

みんなわかってると思うけど。

相手と調子によつて、まだ試合の流れの中で、僕もどんどん変えていくと思うし、みんなも試合をしなが

ら変わっていくと思う。

ということでこれを『スタメン』とか『レギュラー』とか、言いたくない。あくまでたくさんあるシステムの一つ、標準システムでのスターティングライナップ、ということ。それこそ次の試合で、ぜんぜん違うメンバーで始めるかもしれない」と、笑った。

とはいっても、区切りがひとつついたわけで、肩を落としたり、ホッとしたり、オロオロしたり、いろいろな姿が見られた。

空堀三十六は、マネージャーの住吉古都と一緒に、その様を眺めていた。彼はポジシヨン的には雑用係……というのが本人の謙遜だが、対外担当のマネージャーのような存在なので、基本サッカーそのものには触らない。だが人事とか、メンタルケアと言い換えれば、スタメン発表というのは彼にとっても重要なイベントである。ということで、こんなところで突っ立っている。

「……やつぱりレギュラーかどうか、てのはでかい問題なんやねえ」

「そうですね」

「俺あんまりこういう『椅子を争う』みたいな経験が無いんで、どうもピンとこんねんけど」

「ふふつ。空堀先輩はほんと無さそうですね。……わたしも無いなあ」

「こつとんも無さそうやなあ。うまーいこと避けてパツと『わたし、マネージャーやります！』みたいな」

「空堀先輩はアレですね、『オレはオレ！ 誰とも比べようがない！』みたいな」

「よーわかつとるやんけー」

「へっへっへー」

見るからにしょぼーんと肩を落としたのが、FWのマキ、マキ・パメラ・キシワダだった。右サイドを自慢のスピードとドリブルで切り裂き、本場ブラジル仕込み（と本人は言うが誰も過去を見たことないので若干怪しい）のテクニクで突破してクロスを送る。役割がハッキリしていて役にも立ってたつもりだったので、落とされると厳しい。

「あのー……落とされた理由、とか、聞いちやダメ？
なのカナ？ やっぱり？」

「ああ」

褐色の肌・エメラルドの瞳、日系ブラジル移民四世。見た目の派手な印象と裏腹に恐る恐る小さく手を挙げて問いかけるマキに、ごく普通の顔をして大地は答えた。

「いいよ、別に。」

えーつとマキはまず守備がヤバイ」

笑いが起きた。まずみんな知ってるツボを突く。

「エーッ、で、デモ」

「いや、正直言つて、これは激励を込めて言うんだけど、一六人で相当下の方、はつきり言ってしまうば最下位候補なんだ。いくら攻撃メイン、特にウイングと

いつても、それはちよつといくらなんでも、というレ
ベルで……去年は相当後ろががんばってた？」

大地、キャプテン、長居美緒に聞く。

「ナナちゃんがね」

「ウチよりも蘭かなあ。右はもうツーツーやったから
ボールロストしたらゴールラインまでほぼ一気なんで、
すぐ血相変えて蘭が走ってた」

「あはは」

天満蘭が口を開けて笑う。

「ランちゃんすぐ居なくなるから、クーちゃんに横に
来てもらって」

「前に出るとスイーパーが居なくなる。よく間を抜かれて、よく走らされた」

と、その近辺を守っていた梅田もも、森之宮胡桃が継いだ。つまりとても大変だった、と。

「マキちゃんには悪いけど、前回明日葉ちゃんが右サイドバックにベツタリ居てくれたでしょう？ あれホント楽だった」

「そうだね」

「エー……」

守備陣にそこまで言われては、もう反論する気力も無い。

「……というように、みんなひとりひとりいろんな得意と不得意があるさ。マキの攻撃力を活かす場面もきつとあるので、その時まで牙を研いててほしい。

あと守備の練習ももうちよい」

「ハアイ……」

「このシステムならこの一人の得意と不得意がうまく噛み合いそうだね、というパターンでしかないのです、それぞれ得意を伸ばし、不得意を誤魔化す練習をしてください。

とりあえず、様子を見てみよう」

「……あれよく海外のインタビューの翻訳とかで見る決まり文句なんやけど、原語でなんて言うてんねんやろ？」

「『stay tune』じゃないですか？」

「あーなるほど！ こつとん頭エエなあ！」

「英語ちよつと好きなんです。空堀先輩は日本語が得意でしたよね」

「なんかそういう言われ方すると若干寂しいけど。そやあ、実力テストの国語は入学以来ずっと学年一位やでえ」

「わお」

「ひやつひやつひやつ。他は平凡やねんけどなあ」

「またまたご謙遜を。知ってますよ張り出しにお名前が載ってらっしゃる事実を。また二〇番内外というあまり目立たずにしかし実力のほどもアピールできる絶妙のポジションを取っておられることを」

「えーっ、まだ今年実力テストやってへんやんか」

「わたしには秘密の情報網があります。サッ」

と、なんの変哲もない世界で一番売れてるスマホを見せる。色はピンク。

「やるな。ぼくにも秘密の連絡網があるんだ。サッ」

と、なんの変哲もない世界で一番売れてるスマホを

見せる。色はピンク。

「おそろい☆ですね☆」

「フツーに考えたらこれになるやろ。なんでこれ以外の買うねん」

「さあ……わたしはこれを買ってもらったので」

「騙されてるか、メーカーの関係者以外に、どんな理由や」

「さあ……宗教上の理由じゃないですか？」

「人間に理性なんて無いんとちやうか」

「また極端なことを言うー」

「理性で説明出来んことをする人が何割も居るんだか

ら、無いのと同じやろ。その場合、全員にあることを前提に物事組み立てて巧く行かへんわけやから」

「そりゃそうですけど千年ぐらいはそれでやってきて、次善三善でもまあなんとかこれで、と諦めてるわけですから。それよりホラ、お・そ・ろ、お・そ・ろ。ふつ、カップルみたい」

「うれしいわ」

「いま生まれてこの方これ以上無いぐらい感情の籠もってない『うれしいわ』を聞きました」

「こつとん厳しいなあ。モテんでそんなこつちや」

「一人いてこましゃいーんですよ、モテる必要なんか

ありません」

「マネージャー向きやなあ」

「空堀先輩ロマンチストっぽいですよね」

「っぽいってなんや。っぽいって。ロマンチストですよわたしや。プロポーズは森の見えるチャペルの丘で光と風に包まれながら愛の鐘を鳴らすの。ビーンボーン

……ビーンボーン……」

「イメージが湧きません」

「俺に湧いてないからな。」

「そんなことはいいんです」

「あとは……ナナさんですかね」

「えっ？　そうなの？」

ああ、と古都は思った。

この人モテないわ。というか、めっちゃモテても本人がまったく認識できないだろうから事象としてはモテてないことになる。

ああそういうや前回の試合の時も、文化系のクラブの女子の先輩一山籠に入れて持って来たじゃん。あれモテモテじゃんこの人。わりとすごい好感度高めだったし。

なんでわかんないかなー。

あれだな、『占い師は自分の占いはできない』てヤツだねきつと。

「……ナナさんがこのチーム作った張本人じゃないですか。それを、えー私もよく知らないんですけど、トップ下？　ていう攻撃の主役、ヒロインみたいなポジションがあるなら、やっぱりナナさんがやりたい、ですよね？」

「そりやそうやな……しかし名コーチの合理的判断によるポジショニングがあるのだから」

「それで納得できるのは男の人……いや、空堀先輩で

すよ」

「難波師匠もヴェテランかつプロフェツ・シヨナルやで」

「日の丸背負ったユース代表ならそうでしょう。でもここは、自分の家みたいなもんです」

「……」

と言われてみればそうだ。

この子賢いなあ、と思った。

難を言えば、自分が賢いと気づいてないので、賢さを無意識にブンブン振り回す。それは、日本では、摩

擦しか、起こさない。

でかいリボン付けたり、太い脚を隠そうともしない短いスカートを履いているのも（余談だがこのチームでは太い脚持ちがミニめを好んで履くのだが（さらに余談だがスカートは長さだけで四種類、他にスラックスやキュロットや半ズボン（としかいいようのないもの）もある。タイも数えきれないほどある。それではもはや「制服」ではない気もするのだが。ケツタイな学校だ）、なにか法律でもあるのだろうか？）、そのへんを無意識に隠そうとする所作かもしれない。

まそれはいいとして。

なんかこの人、めっちゃヤラしいにちやあ……て笑顔で俺を下から覗き込む。

「……三十六クンの、出番ですよ☆」

「はあ？」

「慰めれ慰めれ。話を聞くんです話を。」

『俺でよかったら。ま、なんの足しにもならんかもしれんけど』

とかなんとか言っちゃったりして、まったくもう！」

「はあ。……誰の？」

「あなたバカですか」

「あ、ああ、ナナさんのね。」

あーいや、えー僕ちよつとあの人苦手で」

「はあ!？」

「大きな声を出しなさんな。内緒やで？」

いややっぱなんかこう、真剣なんよねこのチームの話については。誰よりも」

「そりやそうでしょう」

「あんまりキーツてなってる人の相手しとうないねん

……」

「先輩文藝部ですよね」

「あ、はい」

「将来は小説家かなにか」

「いや小説は無理っぽいので、なんかグルメライターあたりができれば、と思っております。そういうとグルメライターさんに失礼ですけども」

「夢が必要以上にコンパクトなのはいいとして、あーた表現でメシを喰うというのは大量のキピーーッを相手にすることですよ」

「あ、はい、それはなんとなく……」

「この程度でびびってどうすんですか」

「いやあ……あと同じ関西ルーツの人間なんで、同族嫌悪とまで言うと言い過ぎですけどなんかこう変な意

識が」

……ははーん。

ちよつと気になつてゐるな？

最前までキレよくポンポンマシンガンだったのが今やフランス映画の俳優のようにシドロ・モドローだ。よしわかった。この愛の墮天使こつとんちゃん、ハピネス・キューピッツになつてさしあげちやつたりなんかしちやつたりなんかして、もう。

矢を、えい！

「グデグデ言つてないでお茶に誘つてきなさい」

「お茶……お茶て柄じゃないよね」

「……そうですね。でもスイーツは女子だいたい好きですよ」

「……ラーメンかなあ」

「人の話よく聞いてますねえ。確かにラーメン・タイプですが」

「……誘うの？」

「そう」

「俺が？」

「なにも『今晚どう？』とか言うわけじゃないんです

からいいじゃないですか同級生なんだしー！」

「いやまあそうなんやけど……いや……」

「この……いくじなし！」

「うわあん、シクシクシク」

「泣き真似の擬音発音するとすごくオタクっぽいですよ」

「……つうお、うお、うおっ……」

インドア派をまとめてオタク扱いするのはやめてい
たきたい！

趣味は文藝と街歩き！

休日は一日中パソコンの前かカメラ持ってウロウロ

する不審者！

これのどこがオタクやねん！」

「話逸れ気味ですよ」

「わあつたよ！　行くよ行けばいいんでしょう？」

「そうです」

「なんで一学年後輩のマネの子に罵倒されなあかんねや。俺がなんかしたか」

「なんもせんから悪いんです。」

そしてわたしはマネージャーだから！」

フーンツ、と鼻息荒くしてデカイ胸を張ってひとつ

叩いた。

そのゼスチャーもオタク臭いと思うんだけどなあ：

：

「うまいこと行ったらわたし、友人代表スピーチしますから」

「なんの話や。カウンセリングですよ、というか茶飲み話。てかラーメン。」

あ、一緒に来る？」

「殺しますよそろそろ」

「ジョーダンやがな……こつとん厳しいわ……マネ向

きやわ……」

「就任して自分の適性がここにあつた、と翼が広がる気分です」

「イイネ。ボクもそんな経験がしたい」

「わりと広げてらつしやる気もしますよ」

「いや……なんか今まで通りって感じ。三つめの同じようなジョブ」

「じゃ既に飛んでるんじゃないですか。

羨ましいです、人生しあわせで」

「……ん、まあ、不幸せではないで。若干不自由やけど」

「じゃお似合いですよ」

「誰と」

「不幸せでは無さそうで、若干不自由っぽい人と」

「……」

眼の奥を見せないニツコー笑いで手を振るおさげお化け。

チツ、このチームはなんでこんな梁山泊みたいになつてんだ。

もちろんそれは類友。日本最高の高校からの特待生

の誘いを断ったアホ娘の始めたチームに、世界の名門が行列をなして面会を乞いに来たのに誰にも会わなかったあんた諸葛亮か、というバカ旦那が加わったんだから、そりやもうその程度のやくざ者は山のように流れ着いてきますよ。

エツチなインフォメーションならボクにおまかせ、ナニからナニまで世界まる見えハウマツチ！なオタク・ボーイなくせして、というかそうだからこそ案の定、現実社会では奥手も奥手大奥手、フオーク・ダンスと聞くと前日からヤスリで爪を整える空堀三十六ク

ン、
に。後輩女子に煽られまくってお声がけに向かう羽目

●四場 ラーメン『山嵐』

「……難波さん」

「うん？ なに、空堀君」

「あ、えー……今日は、皆さんでお帰り？」

「あ、そうかな。うーん、なに？」

「いや、いい店知ってるんやけど、一緒に行かへん？
ラーメン屋やけど」

「おーラーメンええなあ。んー、ほなちよい聞いてきてええ？」

「もちろん」

着替え終わりに声をかけると、スタスタと二年溜まりに向かう。

チームに二年生は六人。この人難波鳴海さんに、キヤプテンがあのだーんと構えた重心の低い安産型タレ目タヌキ顔で、長居美緒殿。ほんでむこうの脚が身体の八割ぐらいある赤毛、あれ地毛（じみ）だそうです、和泉流乃さんで、ちよつと小柄で華奢だけど顔見るといかにもキツツそうでマニアにはたまらなそうなメガネおでこちゃん（おでこちゃん）が、美原はなこ女史。それからヤケクソに

ガタイのいい、いや「ナイスバディ」言うよりも「ガタイがいい」んです、が、天満蘭ちゃん。顔も濃いね。逆に還暦過ぎててもいつまでもお美しい、と褒められそうな女優さんっぽい美人が、堺愛さん。しかし改めて見ると綺麗やなホンマ。

あ、まあ僕と、それからコーチ・上町大地も二年生なんで、まあ八人とも言える。

ちよちよつ、と話すとすぐ来た。

なんですかそこ！ なにもないですよ！ なにその五人揃って生ぬるいニヘラ顔！ なんもないつちゅー

に！　ちよつと難波さん！　なんかツツコミ入れて！
と、背を向けてる難波さんには見えるはずもなく。

「……ほな行こ。なんかみんなはスイーツ探検隊やつて」

「あら。スイーツはお嫌いなの？」

「ううん。大好きやけど、ラーメンほどやないねえ」

「ラーメン、好きなんだ」

「具になりたいぐらい」

「そりや好都合」

ぬるい顔五つと、グラウンドを離れてぬぼー顔に戻った大ちゃんにちいさく手を振って別れる。あれ大ちゃんスィーツ行くんか。あの人も大変やな。歩き出す。

「……コーチ誘った方がよかったかなあ」

「なんで」

「いやあれたぶん慰め会なんで。愛吉と、おはなの」
「ああ」

残念ながら昨季センターフォワードの愛ちゃんは胡桃先輩、というか可憐ちゃんにポジションを奪われ、

昨季ストッパーだったらしいおはなさんはシステム変更によって弾き出された。

「……3バックっていうのはいろんな形があるんやけど、ウチらの使ってたのは三枚センターバックタイプを並べて、その後ろにさらにスイーパーを置くという超守備的なやり方やってんな。ほんでさすがにそれは、っていうことで今回4バック、これもやり方いろいろあんねんけど基本的に守備専は二人で、両サイドの二人は攻撃にも出る脚の速いのを使うから、今回で言う」と流乃と明日葉やね、ほんで去年三人居たうちの一人

が要らんようになんねん」

「なるほど」

聞いてるだけではさっぱわからん。帰ってウェブで復習しよう。えーつと3バックと4バック、と。

当方スポーツするのはあんまり興味ないんすけど観るのは大好きで、オリンピック期間なんかずーつと寝不足マンなんすけど、なんかどうもサッカーだけはなんだかタイミングを逸してほとんど観てないんです。

あれかなあ、ワールドカップという和日本中が盛り上がりまくるんで、そういうのに反発あつたんかもし

れませんね。

サッカーは嫌いじゃないんですけど、ある日突然サッカーで盛り上がる人が嫌いなんです。普段からサッカーが好きな、年間一〇回スタジアムに行くような人は好きですよ。大好きです。

あとどうも外人さんのプレーとかちよいちよい流れてくると、これまた奥が深そうなので、触るとエライことになりそうだ、という予感が自分で自分に制限掛けてたのかもしれないね。

僕クルマも好きなんですけど、あもちろんまだ乗れませんけど、いやああれも奥が深くてねえ。図書館行

くと一日中高級クルマ雑誌に見とれてられますねえ。
あんなんなってしもうたら人生が捗りませんやん。

「……まフオワードはしゃーないで。天下の此花可憐
やからな。ウチがワントップやつてたかて譲らなあか
ん相手や」

「またまたご謙遜を」

「謙遜なんかするかいな。あんたら知らんねや、協会
の強化部が一〇年に一度の天才をどんだけ腫れ物に触
るかのうちに大事に大事に扱ってるのかを」

「ホンマですか」

「ホンマやで。ウチらみたいに野原に放牧でシロツメクサとか野草喰って育ってるのと違う、ビールでお腹マッサージしてクラシック聞かせて育ててる松阪牛やで」

「へー」

「それをこんなところ来よってからに……」

半ば本当に怒っているようでもあり、半ば理解や共感があることに嬉しそうでもあり、半ば呆れ返って物も言えないようでもあり。あ、2分の3になつてもた。

「……まあ、あの皆さんだから大丈夫じゃないですか。堂々と『なんでやねん』と疑問をぶつけ、上町コーチも敢然と受けて立つ」

「……そうかもしれないね。あ、ここ？」

「そう。」

「……大将」

「おうらつしやい!!」

馴れ馴れしい呼びかけにニコヤカに応えてくれる短髪をツンツン立てた髭大将。店の名前は『山嵐』。店名と店主のイメージがピッタリ。

「なに常連さんなん？」

「うん、二回目」

「なんや」

「スポンサーになつてくれませんか、つて尋ねに来たら、利用頻度による、と返されたんで、こりや通うしかないな、と」

「なんじゃそりや。……へー、ウチ道こつちちゃうから知らんかったんやけど、きれいなお店やね。……美味しい？」

最後は小声で。

「まあ美味い。俺の舌を信用してくれるなら」
「へー……お手並み拝見。」

せやけどあれやな、スポンサー集めとかホンマにしてくれてんねんな」

「そらしまんがな。雑用はぜんぶおまかせあれ」

「いやあ……悪いわ。」

ユニも新しいすんねんやろ？ お金、だいじよぶなん？」

「ま・か・せ・て。」

それは大口のアテがあるさかい」

「マジかいな。あかで銀行強盗とかしたら」

「しますかいな。むしろストリート・アートやね」

「なに売んのん」

「字はがき」

「そらはがきには字い書いたあるやろ」

「筆ペンで書いてあんねんがな書が。書道の書が。」

『くだものだもの みつよ』

「怒られんで」

「誰に」

「みつ……よ」

「『人間がさき。著作権があと。』」

「ホンマにだいじょうぶかいなこの人……」

と、ようやくすこし笑ってくれた。

苦笑も笑いのうち、が僕のモットーです。

失笑とかね。

笑やいいんだよ笑や！　なんとかホルモンが出るんだよ！　健康になるヤツが！

「それよりメニュー。なにをする？」

「……お。ここはいろんなで攻めれるタイプやねんね」

「そうそう。基本は醤油とんこつなんやけど、魚介も塩も味噌も白い豚骨もいける」

「節操ないなあ……嫌いやないけど。」

どれがおすすめ？」

「二回めの客に聞きなな。大将に聞くとムツとして

『ぜんぶ』」

「……あの大将やつたらそれエエカッコで言うてんやなくてホンマつぽいな」

「……たぶんマジで決められへんねんで」

店内は小綺麗なファミレス風で、民芸調流行りのいまっぽい感じでもなく、通好みの古い中華屋つぽくもない。味はわりと本格派だと思うんだけど、ターゲツト客層はラーメン・マニアだけでなく普通のファミリ―も狙いたい。そんな迷いが見え隠れ。

「……んーじやあスタンダードな醤油とんこつの……
チャーシュー麺である？　てかわつかりづらいなこの
メニュー」

「大将に言うとかわ。てか俺が書くか」

「メニュー作れんの？」

「メニューを作れそうな人を知っている。美術部の岡
本さん」

「顔広いなあ。安うでやってくれんの？」

「修業だからタダで」

「迷惑かけたらアカンでホンマに……あ、これか。チ
ャーシューだけで三種類……迷いがあるなあ」

「あるね。これにしといたら？　豚バラチャーシュー

ー」

「なんでよりによつて一番コツテリしたのを選ぶんや」

「好きでしよう？」

「大好きです。これにしよ。大将ー！

あんた決めた？」

「あ、うんまあ適当に」

「……あ大将、ウチ豚バラチャーシューの大で」

「担々麺と、餃子と唐揚げ一つずつ」

「おつ？　サイド攻撃!?　あ、そんな技があるんか、

ウチも」

「シエアでよければ」

「あじやあいいです。それでー！

あちよつ、まつ、白ご飯、大！」

「大はない」

「あつ、じゃつ、二杯！」

「あの大將、ちよつと大目盛りで」

アイヨー、と苦笑いでとりかかる髭大將。

「……白ご飯おいてたら量はセレクトブルやろフツ。

チャーハンでも半チャーあんのに。この店には迷いしかないんか」

「許してくれ。青春やねん。ウチらにおうてると思わんか」

「いや！」

「……うーん、まあ……」

なんでもかんでも、つてところが。

「……ほんでなに？ ご用件は」

「いやなんとなく。お近づきになりたくて」

「嘘言いな。」

しよーもない顔してたから、氣い遣うてくれたんやろ？」

「いや」

「ふふん、ウチかてそこまでアレやないで」

「アレやないのはわかってるさ。しかし、アレでなくともアレなときもある。なぜならそれが青春だから」

「あんた青春好きやなあ」

「お嫌いですか」

「嫌いではないですが好きかと聞かれてもわかりませ
ん」

「それが青春ってことです」

「はあ」

我ながらアホそのものやな。

もうちよつと気の利いたセリフが吐けんか。

「じゃ逆に聞くけど、さつきはしょーもない顔したはりましたんか」

「……してた思うね」

「なにが、ですか。……って聞いていいですか」

「うん、まあ。あんまりペラペラしゃべらへんて約束する？」

「するする、する。」

あ、あのわたし素人なので、わかりやすーく話してくれるとわかりやすい」

「ふつ。」

……サッカーはある程度ポジションが決まってる、それはシステム、フォーメーションとかいろいろ呼び方はあるんやけど、これによっていろんなポジションがいろいろ発生するんやけど、基本的には攻撃、中盤、守備と大雑把に三つに分けられます」

「はい」

「ざっくり言うとな攻撃は点を奪う人、フォワード。守備は相手の攻撃を防ぐ人、ディフェンダー。そして中盤は攻撃と守備の中間でその両者を繋いだり、ボールを奪ったり、それを運んだりします。ミッドフィルダ

」

「はい」

「ウチは攻撃と中盤の間で、後方から任されたボールを運んで、アタッカーに最後のパスを出す役、これを攻撃的MF、オフエンシブ・ミッドフィールダーと呼ばれたりします」

「はい」

「細かく分けると攻撃的MFにもいろんなタイプがあるのですが、花形はフォワードのすぐ後ろに控えて、彼女らをパスで操りつつ、自分も点を奪りに行くタイプ。これです。これをトップ下と一般的にいます」

「ああ。」

それをポツと出のありすちゃんに奪われたのがムカつくと」

「ツツコミが早過ぎんねん！」

……ま、まあ、端的に言えばそう、なります」

「そりやムカつきますなあ。なんたつてユース代表のレギュラーですからなあ」

「あ、いやまあ」

「調べさせてもらいましたよ普段の大活躍を。ジュニアユースのアジア大会で直接フリーキックをぶち込む
勇姿を」

「あー……あれな。ま、まああれは、写真がエエねん写真が」

「見出しが

『ウチもおるでえ!』

他に誰が居るんですか」

「……ラーメン来た!」

「食べましょう!」

「うわまたこれゴツツイな!」

「嬉しそうですよ。ではいただきます」

「いただきますー

ズズッ、ズズズズズズー

……んまい！ では待望のチャーシューを。おつ、ホロツと崩れますねえ、これは期待大ですねえ……
……むまい！」

しあわせそうやな。

食い姿幸せそうな人は、本当に幸せそうで、たいへんよろしい。

俺も担々麺の肉味噌をちよつと崩してつまんでみる。

……うんイケる。ピリ辛過ぎず甘過ぎず味噌過ぎずネギの存在感あり過ぎず、いいバランスです。

「そつちちよつともろてええ？」

「早いな！　もうちよつとマイ・ラーメンを貪りなさ
……もうだいぶ無いんかいな！　早いで！　大は二玉
やで！」

「ラーメンは、飲みもんやで！」

「ウガンダ師匠ー！　帰ってきてー！
まあどうぞ、どうぞ」

「あい」

「……ちよつとなるみ師匠、普通こういう時はかえつ
こかえつここにしません？」

「あ、ああごめん」

「一人っ子か末っ子ですね!？」

「末っ子です。上兄二人。」

あ、餃子来た、唐揚げ来た、た、大将、ごはん、ご
はん忘れてへん!? わかつてるすぐ持つてくる? あ、
ギター! 山盛りやー! 昔話やー! これを、これ
を待つてたんや!」

「待つてませんで!!」

なにひとつ。

大将笑いすぎです。

人のオーダーを完全に自陣に取り込んでなんの遠慮

会釈もなくモツシヤモツシヤと貪りながら、難波師匠、顔だけマジメに話を戻す。

「……その誰か、は、清水リカという女や。コイツがなあ」

「あ、若干その時調べました。なんでもフル代表の経験もすでにある、日本の至宝と」

「調べてんなら話は早い。パワー・スピード・テクニク、そして元気・勇気・根気」

「隙がない！」

「隙がないよお。体格の良さに無限のスタミナに判断

の速さ、思い切りの良さ、そしてなにより鋼のメンタル。どこをどうとつても今すぐフル代表で10番張つてもおかしくない、逸材・オブ・逸材です」

「なぜそうしないんですか」

「長期計画があつて。いまのユースは割と才能のある選手が揃っているので、次の五輪を今のフル代表で戦つたあと、その後のワールドカップ予選からウチらの世代が華々しくまとめてデビュー」

「ほう、日本には珍しい長期ヴィジョンですね」

「サッカー協会は比較的マシやで。なんたつて世界戦があるんで、結果が誤魔化しようがないからな」

それはバスケでもフィギュアでも柔道でもテコンドーすらそうだと思うのだが。

それはさておき。

「まあ小学校ん時出会った瞬間衝撃ですわ。初めて代表候補っていうかジュニアの合宿みたいなと呼ばれて行ったら、エーリアンがおんねんエーリアンが。あこらあかんわ、と思った。巧さとか、ま、強さぐらいなら鍛えたらなんとかなりそうやけど、速さとかデカさとかどんなんやん。特にウチタツパないし」

確かに難波さんは、上背はあまりない。しかしそのボデイはまったくムチムチというかミチミチで、筋肉の塊という感じではある。こう、前後の厚みがすごいよね。よく見るとこの人、胸もそうとうでつかいんですけれど、それが目立たないぐらい、鎧をまとったような身体つき。

その難波選手が、「どんならん」という。

写真で見た清水選手は、手足の長い、ついでに黒いロングヘアがまるでその名の通りのお人形さんのようなスタイルなのだが。

「……ということでウチらの世代では攻撃的MFのフ
アーストチョイスは彼女です。だからウチは、リカの
できんことや、やらんことをやつて生き延びてきまし
た」

「なんとサバイバル。小学生中学生の頃から」

「具体的には長いパスとか、狭い局面を無理矢理突破
するとか。両方リカには必要無いねん。自分で持ち込
んだらええし、自分でシュートすりやええし」

「なるほど」

「ただしリカ・リカ・リカ・リカ・雨・リカ・リカで

は攻撃が読まれてしまいますので」

「野球好きですか」

「わりと。あんた関西弁を操るんやから関西にゆかりがあるんやろ？ もちろんタイガースやんな!？」

「ノー!」

「なにい!？ ま、まさかバファローズ!？」

「ノウ！ 俺の心の球団は、近鉄バファローズ!」

「バファローズやないか」

「ちつがー!ー!ー!! あんなもん近鉄やない!!」

「それはそやけど」

「野球の話は今止めましょう。ラーメンが涙で薄ま

ってしまおうので、ってもう完食ツスか！ な、なんか追加しますか」

「大将ー！ 替え玉二つとライスおかわり、またこれで！」

「炭水化物好きですね」

「お好みにごはんはアリやんな」

「もちろんですよ焼きそばにごはんもアリです」

「うどんにごはんは？」

「バカにしないでください、俺は大阪の男ですよ」

「同志!!」

手をギュツと握ってくれた。

ちよつと嬉しい。

「……みんなラーメン屋で白ご飯頼んだらおかしいとか言うねん。その方がおかしいやんな」

「そうです。ていうか人の食い方をおかしいとか言う権利は誰にもない」

「そうとおり！ チミは話がわかるねえ！」

「課長にしてももらえますか」

「考えておく」

「……それでは読まれるので、リカリカたまにナナ、

と」

「うい。」

でまあ、D S C……じゃない、えーウチのチームでは、逆にウチが頼りにされているわけだから」

「なるほど、逆にナナ、ナナ、ときてたまに、えーと」

「マキやんや流乃やね。C Fの愛ちゃんは昔から囧だったんで」

「しーえふ？ あ、セクターフォワードか」

「そうそう。」

それで楽しかったんやけど、まあ、これでまた、代

表と同じように、脇役かな、と思うと……」

「ハッ」

思わず変な笑いが出た。

この人は、自己評価が低すぎる。

「んなわけないでしょう。脇役なんて。ありすちゃん
は新人のド素人ですよ？ あれはそれこそ賑やか
しにすぎんと思いますね。」

「やっぱり、攻撃の主役は、ナナさんしか居ません
よ」

「……」

顔をふにやふにやとさせた。

喜んでるのか怒っているのか、わからない。

「こんど大地はんに聞いてきましょか？ このやり方の真意を」

「いやそれはやめて。ウチが聞かせたみたいやんか」

「そこはバレんようにやりますて」

「いや。いい。」

真意とかやのうて、うーん……いや、そりやウチの

ワガママやったな。ちよつとやりたいこととやらなあかんことにズレが出たんで、エーッ？て思うただけや。やりまんがな右サイド」

意外に氣い遣いいでもある。

このへんがユースでも便利に使われる所以なのだろう。

うーん。生き方として否定はせんが、もつたいない氣もする。

ほんとに大ちゃんに、こんど聞いてみよう。

「……ナナさんは、どんな選手になりたいんですか？」

「え？　ウチか？」

ウチは……ウチのような選手！」

「そんな心にもないこと言うてもダメですよ。誰か居たはるでしょ心のアイドルが」

「ははっ。」

まあ、そりや居ますよ。ありきたりやけど、やつぱり、ウチらのポジションやと、マラドーナやねえ……

……」

「マラドーナか。いまはおもしろ丸っこいおじさんで

すけど、現役の時は凄かったと聞きますが」

「凄いなんでもんやないよ。一人で試合を決めてしまう。『マラドーナ二世』と呼ばれる選手はメッシに至るまで世界中で何人も出てきたけど、メッシも含めて誰ひとりとしてその域には達してない」

「リカさんは？」

ちよつと挑発気味かもしれない。

しかし鳴海師匠はかぶりを振りながら、その前で手も大きく振った。

「うんにやーにやーにやーにやー！」

大阪のおばちゃんやな……大阪のおばちゃんやねん
けど……

長く離れていた故郷に帰ってきた時の気持ちって、
こんな感じなのかな。

停車場に　ふるさとの訛　聞きに行く

「そもそもタイプが違う。ヤツはどつちかというと試合を壊す。強いていえば全盛期のリヴァウドかなあ。
ごちやごちや言うてんと実物観たらええんや。あん

た持ってんねんやろ、すごいスマホを」

「いや普通のヤツですけど。ああ、マラドーナの動画ね」

「そうそう」

検索した。たっくさん出てくる。

「どれを」

「八六年メキシコワールドカップ、対イングランド戦」

それだけでもたくさん出てくる。

「ちよつと見せて。NHKの中継がええねん。……んー、えーと、あ、これかな」

一応ラーメン屋といえど飲食店、イヤホンを出して、
ひとつずつ耳に入れる。再生。

画面の中でマラドーナが鳩胸を張って躍動する。

パスが入り、ドリブルをする。

敵が寄ってくる、かわす、かわす、かわす、かわす、
そして、かわして、ゴールする。

「……すばらしい」

「せやろ？ あんたこれ見たことない？」

「あるけどこんなしつかり見たことはなかった。サッ

カー、ちよつと観てると、このプレーがウルトラプレーだつていうのが、よくわかるね」

「そお。」

世界中の攻撃的MFやFWが……いや、世界中のサッカー選手が、これがやりたくてサッカーをやつていると言つても過言やない。いや過言。でもチャンスさえあればこんなすごいのを、やりたい」

「わかる」

「歴代ベストシュート集、みたいなアンケート取つてもいつでも不動の一位やからなあ。二位以下はいろんな意見があつても、一番はこれ。」

ああ、それを更新できるような、スーパープレーが、やりたいねえ……」

「やれるさ」

「またそんな適当な。」

あんたホンマ適当やなあ」

「いや、やりたいと思う人はきつといつかできるもんだよ。」

やれるかやれないかには、それがだいじ。

むしろそれ以外はどうにでもなる」

「そうかなあ。」

これ大変やねんで、見てるよりも」

「難波鳴海なら、やれる」

「フッ」

呆れたようだ。

「ウチそういう、根拠のないことを相手の歓心ひこうとしてペラペラ言う人、めっちゃ嫌いやねん」

「そらすまんかった。」

じゃあ撤回する。難波鳴海には、こんなことは一切
できん！」

「人の話マジメに聞いてる？」

できん断言されたら氣い悪いやないの。ウチかて条件が整えばできますよこれぐらい」

「せやからできる言うたってんのに嫌いやとか言うから」

「それは……乙女心がわかってないなあ」

「よく言われます」

「誰に。あれか、あの前の試合ん時にズラズラ連れて来たファンクラブ御一同か」

「ファンクラブなんかとちやいまんがなこつちが頭下げて普段から付き合ひあるからあんなところへ来てくれるんであつて……ははーん、妬いてる？」

「なにを妬くねん。

餅か」

「ポイントカードはお餅ですか？」

「安倍川も磯辺もええけど、極めつきは砂糖醤油やね」

「オンリー・ザ・醤油生一本やろ。

なんで糖質の塊である餅にまだ糖を掛けるか」

「やつぱりあんたエセ関西人やな。

糖質・オン・糖質の喜びがわからんとは」

「道頓堀で産湯を使い、子守唄が枝雀師匠のこのワテが、エセ言われると堪えますな。

糖尿なんでそんなG I高い食い方してたら！」

「食事制限して長生きするぐらいなら、美味しいもんたらふく喰って早死したい！」

「そんな人間に限って長生きするから人生っておかしいな」

「せや。」

ストレスが無いからな。

人間はだいたいストレスで死ぬねん」

「難波さんは……それでは死にそうにないなあ……」

「なに言うてんのん、ウチストレスだらけやで。その解消を、こうしてグルメでやってるわけや」

「ポツと出のありすちゃんにトップ下奪われたしな」

「キツ、キエエエエエエエエエエエエ!!」

たっ、大将!!

ふつうのラーメンもう一杯!!」

「まだ喰うんか!」

「ライスつけようか?」

「もちろん!」

「シェー!」

「その擬音をしゃべんのやめ。オタクみたいやで」

「もうなんとでも言うてくれ」

「それとギャグめかしてズバズバ言うのみな。」

モテんで」

「モテる必要なんか無い。一人にウケればええんで」
「言うなあ。確かにその通りやけど。」

……あんた、おもしろいな」

「なるみ師匠ほどやおまへん」

「……ズバツと言われるのに慣れてなかったんかもしれん。」

せやな。ウチはまだまだ修業中。なにごと成してない身や。足らんとくろは指摘してもらって、ガンガン直していかなあかん」

「ですな」

「よし！ 大将、唐揚げも！」

「そこは足りとるやろ！」

あーん、こない出すハメになるとは……」

「へっ!? なに奢ってくれんの？ 割り勘やろ!？」

「サラッと詐欺を認めて強盗をごまかすようなやり口はやめてください。いや出しますよ俺が誘ったんだし」

「悪いやん、別にデートでもないし。」

あ！ これチーム経費で落ちへんの!？」

「その方が悪いわい」

「栄養費、栄養費」

「えーっ……えー……あ、アリかな？」

「アリやで、アリアリや。予算次第やけど」

「いやまあ、予算は、無いわけでは、無い。そやな、
栄養費言われたらそら確かにそや。よし」

「いやったー。大将、餃子もうひとつ」

「うおおおい」

「あんたの分やがな。ウチばーっかり食べて、あんた
あんまり食べてへんやろ？」

……そういえばそうやな。

サイドオーダーはもちろん、担々麺もほぼほぼ喰い

尽くされた。

「じゃあ湯麺にしようかなあ」

「お、ええね！ 湯麺と餃子ね！」

「いや餃子じゃなく、いや、まあ、いいや」

「あんたエエ人やな！」

「食いもんで釣られないでくださいな。タダ飯タダ酒
ほどあとで怖いものはありません」

「怖いん？」

「いやいまは怖かないけど。」

みんなには秘密ですよ。さすがに四六時中となると

足らんくなりそうや」

「もちろんですよ、二人だけのヒ・ミ・ツ」

「やれやれ」

ニコニコしてる。

たんじゅ……シンプルやなあ。

スポーツマンてのはそうでないといかんのかな。
ちよつと見習いたい。

「……もつかいマラドーナを観よう」

「あ、ウチもウチも。これなあ、実況がまたサイコー

やねんや」

「そやなあ。

これぞ実況て感じやなあ。

あ、そうだ実況ええな。実況アナウンサー、雇うか」

「ええっ!? そんな口もあんの!?!」

「ああ、放送部に高安てのが居て、ヤツはお祭りとか大好きだからたぶんやつてくれる。もちろんタダで」

「はー。すごいな、あんた」

「は? なにか」

「頼れる友達が多くて」

友達は友達同士持ちつ持たれつだろう。
困った時に頼れてこそ友達ではないか。
中国人なんか金借りる時まず友達に借りるんやで。

「難波さんにはチームがあるやないスカ。

頼れる仲間が」

「ハハッ。まあ、せやな。

いやあ、ユースの方はみんなライバルでもあるからね。そんな気軽に『やってー』『おつけー』みたいな間柄ではなくて」

「そらいかな。それではチームは強くならん」

「そうかなあ。緊張感あつた方がええことない？」

「Googleの研究で、いろんな働き方やチームの作り方と、そのチームの創造性との関連を研究したのがあつて、結果導き出されたのが、創造性のある、生産性の高いチームってのは、」

「仲の良いチーム？」

「そう」

「うーん……」

「あなたが実践してるではないですか、ド素人を一〇人集めて全国へ出たあなた自身が」

「いや、細かく言うとは素人つてわけでもないんやけど……」

「そうか。そやね」

「だからありすちゃんとも仲良くやってください」

「キエエエエエエ！」

「あんたホンマ底意地が悪いな！」

「んー？　そうかなー？」

「ま観ましょ観ましょ、マラドーナを」

「よし、あ、湯麺きた。いただきまーす」

「あれ？　それ僕の……」

「……ふえ？」

「いやいいです。」

……ああそうか八六年言うとフォークランド戦争の直後か。でイングラント対アルゼンチンというと本物の『因縁の対決』やな。こらあ熱狂するわ」

「ほれな、ほんでほの前のフレーがまたひゅーめーなフレーでな」

「食べてからしゃべりなさい」

「ぎょーぎ、はべへええで」

「はいありがたくいただきます。」

……おもしろいなサッカー」

「ほもしろい、つひゅーねん」

三十六はまだ知らないが、難波鳴海が自皿の料理を人に勧めることはまず無い。イヌかネコを想像して欲しい。順番を待つということはあるけれども、譲るとなる。と親子か夫婦の間柄になる。

つまりそういうようなことだが、三十六はまだ知らない。

もちろん、ナナもまだ知らない。

●五場 革命

「……ちよつと質問があるのですが、大コーチ」

「うん、なに？」

ちいさいなりとも三十六が見つけてきた部室である。以前「印刷室」としてガリ版印刷機が動いていた部屋で、片隅にはまだ動きそうなそれらがいくつもうず高く積みまれている。部屋サイズは六畳ほど。さすがに狭い。だからミーティングなんかはもちろん青空、着替

えは汎用の女子更衣室。しかしであるがゆえに、ここには大地と三十六の二人きり。うふ。

放課後である。

三十六は昨日の話どおり、大地に疑問をぶつけた。

「……素人の疑問なんで、複雑な理由があんねんやったらそれでええねんけど、えーつと、わたし昨日ちよつといろいろ調べまして」

「はい」

「トップ下、というのは攻撃の指揮をしつつ自分も点を取りに行く、重要な役割だと知りまして」

「ああ」

主旨がわかったらしくちよつと表情を和らげるが、続けた。

「なぜ、難波さんではなく『新人の』ありすちゃんなんですかね」

「いい質問です」

軽くイタズラっぽく微笑む。

うーん、こんな表情が似合うのはハリウッドスター

か上町大地か、って感じやな。

ぐるり、あたりを見回す大地。

「……内緒の話、したら誰にも言わない？」

「も、もちろん。墓場まで持って行く」

うわあ。

コイツあかんわ……こら女の子やバイですよこれ。

二人だけの秘密の共有。基本ですね。

「はは、墓場までは要らないと思うけど。」

えーつとね、まずサッカーのチーム作りには、おおまかに分けて二つの方向があるんだ」

「うん」

「それが『ポゼッション』と『カウンター』。

『ポゼッション』というのはできるだけボールを支配し、それを敵陣まで運び、ゴールを狙う。ボールを持っている限り点を獲られることは絶対に無いんだから、一〇〇%のボール支配率を達成できれば、必ず勝てる」

「そらそやな」

「対して『カウンター』というのは、まず相手にボー

ルを持たせて、攻めさせる。するとサッカーの場合は、相手選手が大勢こちらに上がってくるので、逆に相手陣に大きな隙ができる。ここを狙う。ギリギリでボールを奪回したら、大きく縦に運んで、一気にゴールへ」

「ふむふむ」

「もちろんどちらのチームもそれしかない、ってわけではなくて、状況に応じて逆の戦法も使うんだけど、基本ラインはどちらかに決めておく。なぜなら、戦術にあつた選手を起用しないといけないから」

「そうか。」

たとえばポゼッションなら、ボール扱いの巧い選手、とか？」

「そうそう。」

カウンターなら、特に前線に速い選手が欲しい。守備も、足元の巧さなんかより、とにかくタフで打たれ強い選手がいいね」

「ふむ。」

で、我らがミラクルズは」

「その前に、両方のデメリットを挙げておくと、まずポゼッションは、巧い選手、これは一般的には数が希少で、プロなら高価、を揃える必要があり、かつチー

ムとしてどんな時に誰がどう動いてどうパスを回していくか、来る日も来る日も練習して練度を高めておく必要がある」

「わかる。」

ボールをずっと持つてなあかんもんな」

「カウンターは、守備力がないとそもそも成立しないのと、速いフォワードが少なくとも一人必要なのと、それから、相手が出てこないと仕掛けられない戦法なので」

「そりや隙ができなきや突けんわな」

「先制点を奪われたり、相手がこちらを格上だと認識

していて最初から守る気満々で引かれたりすると、やりにくい」

「なるほど……」

「てことはやはり、カウンター」

「ご明察。」

「さすが三十六、話が早い」

「俺やのうてもすぐわかるて。そこそこ経験あるゴツいディフェンダーが居て、GKが良くて、そこに可憐ちゃんや。こらもうカウンターにおあつらえ向きやないか。名門校でも伝統あるクラブチームでもないから、相手も舐めて掛かって前に出てくるやろうし」

「そう。」

しかしそれでも、相手がカウンター・チームだとわかつてると、警戒される。特に強いチームになればなるほど、そういう『守って守ってカウンター』というチームとはよく当たっているので、対応の仕方が巧い。

そこで僕は

「はい」

「このチームが、カウンター・チームであるということを、隠します」

「おおお、なるほど！

敵を欺くにはまず味方から、か」

「そのとおり。」

うちはカウンター狙いだ、と思っていると、自然そういう動きになってしまう。それだと敵に警戒される。あくまで普通に、ボールをできれば支配して、前に運んで、点を獲りたいなあ、という感じで戦う。がつぷり四つ」

「しかし実際には、ここぞ、というところで本性の力ウンター・アタックが炸裂して」

「勝つ」

「うーん」

見事な机上の空論だ。

一般的に、戦略目的は末端に至るまで徹底されているべきで、それによつて現場で臨機応変に、「現在の目的に対して合理的な行動は何か」をその場その瞬間に創り上げていく……のが、理想的だとされる。

秘密作戦というのは、イメージほど効果的ではない。ましてウチには、

「……それ他のはともかく、可憐ちゃんとナナさんを騙せんのか」

「それさ。それが胡桃とありすの役目」

「む」

「誰がどう見たって普通、このラインナップだったら、此花可憐1トップで決まりだよ。ポゼッションとかカウンターとか関係ない。しかし、そうはなつてない。この14番の役目はなんだと」

14番は、胡桃の背番号。

「動き出すと、楔のボールを受けるポストプレーと、空中戦を中心に最前線に居る。なるほど、このチームはまずここに当てて、そこから展開していくチームなんです、つまりボールを繋げてじっくり攻め込んでいくチームですね、と」

「むむむむむ。

その流れで行くと、ありすちゃんがトップ下なのは」

「可憐―ナナと縦に並んでいると、まちがいなくこの二人で速攻仕掛けてくるってバレバレなので」

「離す、と」

「それが第一番目の理由」
「うーん」

そりや言えんな。

「二番目には、ありすは初心者だけどわりとやれそうなんだ。あんまり約束事に縛られないトップ下で経験を積みめば、あれは大化けしうる」

「まあ、あのシュートは凄かったな。あれはビギナーズ・ラックなんて範疇を越えてると俺も思う」

「でしょう。」

なかなか見られるものではない物を見たよね」

「うん」

前戦で放たれたマジカル・シュートは、脳裏に焼き付いて離れない。

スタメン発表時に攻撃の選手からでさえさほどの反発が起きなかったところを思い出すと、それはチーム全員の脳裏にある。

「で三番目に、ナナはトップ下、もちろんとても向いてると思うけど、サイドアタッカーやボランチでも、それと同じぐらいか、むしろそれ以上の力を発揮する、と思うんだ」

「ほう。それはなぜ」

「キックの質。フリーキックやコーナーキックを見ればわかるとおり、流れの中でもクロスの質は天下一品

だ。あれだけでご飯が何杯もイける」

「飯が食える」の方がいいな。

「フオワードの近くに置くと、そのチャンスが減る。それが、とてももつたいないんだ」

よし、こっちなら話せそうだ。

「どのぐらい？」

「デイビッド・ベツカムという選手が昔イングラント

に居てね」

「聞いたことある。ハリウッドスターばりの二枚目で」

「二枚目だから損をしてるんだ。やつかみなにかしらないけど、選手として明らかに過小評価されている。実はもの凄い選手なんだ」

「どんなふうによ？」

「ハーフウェーから向こうなら、どこからでもゴール前にボールを正確に供給できる、恐るべきクロスを持つ」

「おー、凄いなそりや。」

ほとんどチート（不正技）やな」

「ああ、やっぱり知らない人の方が凄さがわかってもらいやすい……」

そうなんだ。万全の状態でクロスを入れれば、FWは下で待つてるだけで得点チャンス」

「上飛んで行けば、地表のディフェンスとか全部関係ないしな」

「そう、そう、そう。」

僕がもしワールド・オールタイム・ベストイレブンを組ませてもらおうとしても、ベッカムはどこかでなんとかして、システムを変な形にしても使いたい」

「チートつちゅーか……空間を操る能力、テレポーテーションとかそのたぐいなので、特殊技って感じやね。

ああ、王さんが王シフト敷かれた時に、『ホームランなら関係ない』と言い放った故事成語を思い出す」

「王さんって、ホームラン王の？」

「そそそ」

「ホームランに似てるかどうかはわからないけど、要するにさっき言ったように、ウチは実は『速攻から一発』を決めたいチームなんだ。

ナナはその能力を活かして、できるだけ遠くから、ゴール前に、というか突っ走る可憐めがけて一気にボ

ールを放り込んでもらいたい」

「なるほどー。」

でもそれならそれで、そう伝えればエエやんか。それなら難波さんも納得するだろう」

「あれ、何か言ってた？」

「あいやなんにも。あ、違う、え、いや、ちよつと僕の想像で」

「なるべく長ーいのを遠ーいところから入れてくれ、と言うと、あんなヴェテランなら『あーはいはいカウンターですな』とバレちゃうよ」

苦笑する。

しかしそこまでせなあかんもんやろか。

可憐ちゃんはちよつと知らんが、難波さんなら意図を理解したうえで、適当にそう見えないうように誤魔化してくれそうな気がするが。

「それでも得点能力の高い人を、ゴールから遠いところに置くのも、これまたもつたいないんじゃないの？」

「いや、昨今の流行では、ウイング気味のサイドアタッカーは、クロスを上げるだけじゃなくて、自らいン

に斬り込んでどんどんシュートを、得点を狙うポジションだよ。トップ下に比べて攻撃的じゃない、なんてことはない」

「そうなんか」

「もちろん選手の得意不得意もあるし、向き不向きもあるけど、基本的に攻撃の選手はいつでもゴールを目指すわけだから、ポジションはどこでも一緒だよ。」

いや、サッカー選手たるもの、センターバックでもチャンスとあればロングシュートを撃ってもいいし、駆け上がってゴール前空中戦に参加してもいい」

「まあそれでも野球でもね、『四番バッター』には特

別な記号性が」

「チームの勝利より四番になりたいことを優先する選手は要らない。

すぐベンチ」

「ふええ」

躊躇いゼロ。このひとならユース代表でもベンチへ放り込むだろう。

しかし理屈はよくわかった。まずまず合理的でもある。

それとなく伝えて……伝え……いやあ俺のサッカー

ーの理解度ではヘタに何か喋らんほうが、ええかなあ
……

「あ、あと四番目として、ナナで無ければ右サイドはおそらくマキになるんだけど、昨日言ったとおり彼女は守備がかなりザルいので、後ろに控える明日葉に負担が掛かり過ぎる」

「あ、そこも聞きたい。」

前の試合観てて、可憐ちゃんとありすちゃんは採用理由がよくわかります。エレーナちゃんもよく頑張ってた感じがするし、なんといつても運動性能が高いの

で育てたい、そんな感じはわかります。しかし明日葉ちゃんはあるまり目立ってなかったと思うんですが」

「目立ってなかったでしょ？」

それが、デインフエンダーとして素晴らしい才能があるってことさ」

「はあ」

「敵が攻め込んでもなんでもなく処理する。

いや、攻め込みそうな時にその芽を摘む。

いやまず、攻め込もうと思わせない」

「ほほーう」

「右サイドバックは替えるまでなこだったんだけど、

確かに派手にやられたりはしなかったんだけど、なんだかがチャガチャしてて、落ち着かなかったんだ。相手のサイドの選手とずーつとのべつまくなし引っぱり合いやってて、ちよーつとキツいなあ、と。彼女は守備力そのものはかなりいいと思ったけどね。そういうサイドバックが必要なシステムや戦術の時は、使っていきたい。

対して明日葉を入れた瞬間、なににも起きなくなつた。もちろん攻める時間帯が長くなつたのもあるけど、これはなかなかいいぞ、と」

「ふーむ」

これひとりひとり聞いていくと、山のように答えが返ってくるのだろう。

……おまかせした方がええね。

「……しかしさすがコーチというか、すでに権謀術数
がスタートしているとは思いますが、よりませんでした。し
かも味方をも相手に。」

あつ、ひよつとしてボクもいま何か仕掛けられてま
すか」

「ははっ、そんなことないよ。」

むしろいま正直に話してて、僕の頭の中でも議論が整理できた」

「わしや黒幕の膝のペルシヤネコですか。

……しかし正直……おもしろい」

「でしよう」

ニヤリ、笑うと、にやり、笑い返される。

もっかい、カマ。

「いやあ僕やったら難波さんは彼女の好きなポジションで自由にやってもらいたい、と素直に思っちゃうけ

どなあゝ」

「いや。むしろ自由にやってもらうよ」

「そうなの？」

「これを見て」

ノートを広げると、おお、これは新システム。

背番号がピッチに並ぶ。

脳内で変換が忙しい。

7は……ああ、右サイドに。

「ここ全部、ナナの仕事場」

右上部分、つまりピッチの1／4を大きく指し示し

た。

「対してここがトップ下、あります。窮屈でしょう？」

「むむ」

「すぐに9（可憐）と14（胡桃）が居て、すぐ後ろに10（美緒）が控える。その脇に8（エレナ）まで居る。確かに、比較にならないぐらい狭いゾーンだ。」

「もちろんありますにはここに囚われず自由に動け、と指示するつもりだけど、どのぐらいやれるかはやってみないとわからない。対してナナなら、この広大なスペースを上手く使え、といえば、きつと上手く使ってくれる」

「なるほどね。」

いやあ、すみません差し出がましい口を聞いて。あれですね、齧りたてのニワカがプロがよく考えた結果に口出さん方がええですな」

「いや、プロも思考の迷宮に迷ってわけわからなくなることも多いよ。どんどん疑問はぶつけて。」

それより僕が気になるのは、むしろナナは、攻撃的MFとしてはちよつとまともすぎる気がするんだ」

「まとも？」

「教科書的というか……いや違うな、もつとエゴイスティックでいいと思う時でも、周りちゃんと見て、着

実にプレーを進める。

あれじゃボランチだよ。オフエンシブハーフってのは、もっと突撃小僧、いや小娘か、って感じでいいと思うんだけど。マキを見ればわかるでしょう、前に突っ込むことしか考えてないよね」

「うむー」

その理由のすくなくとも一部を知ってるが、これは伝えるべきだろうか？

……ペンディング。

「そりやまあ、去年はチームまるごと背負つてたわけですから。ハチャメチャはできません」

「……そうか。まあ、そうだよな。」

じゃあ今年は、前に可憐も居るし、美緒に後ろをまかせられるし、大暴れしてもらいたい、もんだね」

「うんうん、慣れてきたらきつと本性があらわになる
つて」

とりあえずそう言っておく。

本性か……代表でもずつと清水リカとやらの相方。
それは彼女の持つて生まれた「星」かもしれないが、

しかし、ボケとツツコミで言うならあきらかに彼女は
ボケ……いや？

「……ツツコミかもしれん」

「ん？」

「いや、そうやな。完全にツツコミやないか。ツツコ
ミの人間がボケになろうとしたらあかん」

「？」

「ということは、や。いや、そう、まわりにエエボケ
がおらなあかん。それこそがツツコミのツツコミ力を
引き出す一番簡単で効果的な方法！」

俺は自分をツツコミやと思うてたが……

……ふふ、この空堀三十六がボケをせなあかんようになるとはな……

「どうしたの、三十六」

「あ、ああこっちの話。」

いや、言ってから、『本性』なんてもんは、自分が一番よくわかってないなあ、と思つて」

「ははっ、そうだね。僕も、まさかコーチやるとは思わなかったし、こんなにおもしろいとは思わなかった

よ。向いてるかどうかは、わからないけど」

「オモロイと思うってことは向いてんねんで。板についてるでー」

「そう？　だったらいいけどね」

板につきすぎてて怖いぐらいや。

カマボコか。

「そらあしかしオモロイなあ。これで狙い通り、強豪をぶっ倒せればまた」

「もちろん。クイーンズカップでは優勝を狙う」

「おお！　言い切った！

部員一六人うち四人が新人さんの高校生チームが、
日本最大のオープン大会で優勝するて言い切った
で！」

「いや。

そんなもんじゃすまない。

ミラクルズは日本のサッカーに、『革命』を起こ
す」

「かくめい！

また激しい単語が！」

「革命を起こす」。

男子なら一生に一度は吐いてみたいセリフだ。たとえそれが「トイレの掃除ブラシ目立たず収納革命」であつても。

「……あはは、『革命』はちよつと言いすぎかな。

『一石を投じる』ぐらいで」

「いやいや、なんでも言い過ぎなぐらい、大袈裟なぐらいがええねんで。して、革命とはどのような」

「それはナイショ」

ウインク。

惚れるくくく。

「ちよつ、ちよつ、ヒント、ヒントだけでも」

「あはは、いや、もつたいぶるほどのことはなくて、つまりカウンターとポゼツションを融合したようなことをやりたいんだ」

「ほう」

「というか、さつきも言つたようにいいチームというのはどちらもシームレスにやれる。ポゼツションの総本山、バルセロナだって自陣深くで拾つて快速FWが

走ってれば躊躇なく縦一本を送り込むし、カウンターの強力なリアル・マドリーだつて、じっくり攻める時は急がずボールをくるくる回す。これをね、やる」

「やりたい、ではなく、やる」

「うん」

「高度すぎませんか」

「いや、むしろどちらかに方向性を決めることから話がややこしくなってる気がするんだ。ボールを、『ゴール方向に動かす』のと『いい状態の味方に渡す』とというのは、独立の事柄であつて、別に相反する要素ではない」

「しかし一致してることは珍しいですよね」

「もちろん。」

でも選手個々のワンプレーにまで分解すると、たぶんどちらかはやれる。逆に、方向性を決めちゃつてると、その方向性に沿わない場合、無駄なプレーになる」

「……ん？　ほな何かえ、ワンプレーごとに、極端に言うのと、ポゼッションとカウンターが切り替わる、つてこと」

「極端に言えばね」

「それ、は、無い、ん、ちやうかなあ……」

野球で言うたらビッグボールとスモールボールを混ぜるようなもんやろ？」

「？」

「ああ、えー……ノーアウト・ランナー一塁でバントしますか、ヒッティングしますか。混ぜたら戦略がブレるやろ」

「だからそこだよ、混ぜない方がおかしいんだって。バントしてくるとわかってたらそう対策されるし、打ってくる決められてるならそう対策される。『わかりきっている』アクションを『攻撃』とは呼ばない」「いやいやいやいやいや、そこはホレ、確率や能力・

技術の良し悪しがモノを言うのであつて」

「要塞があるとするよ、毎晩一二時に白兵夜襲、毎晩それやつてとれますか？ ある日は遠距離から大砲で撃つ、ある日は夜襲、『いつたい次はいつ何をやってくるんだ』と」

「いやそれは例え方が巧いだけぢやうかな……」

大ちゃんの言わんとすることはなんとなくわかるのだが、なんかこう、話のレイヤーがズレてる気がする。

「それは戦術のレベルでは有効だろうけど、戦略のレ

ベルではある程度方向性があつた方がやな」

「戦略のレベルでこそその瞬間の判断を基にした反応、変化が重要だよ。クリティカルと言つてもいい」

「う、うーん、まあ、たしかに」

ガダルカナルにインパール、着眼点の悪さと計画の杜撰さはもうしょうがないとして、一番良くないのは失敗を認めず戦略を転換せず、ズルズル引つ張つたことだ。スッパリ諦めた時に比べてダメージが三倍五倍一〇倍になる。

「……ま、まあでもお手柔らかにね。どんなシステムでも『両方』てのはね、これなかなかね、片方だけでも極めるのは難しいもんで」

「いや、むしろ両方やるのが前提なら、どちらも極まつて無くてもいいんじゃないかと」

「大谷翔平を御覧なさい！ あれは投手としても野手としても一〇年に一人クラスの逸材だったから二刀流なんてことができたんですよ！」

「ディディエ・デシャンは速くも巧くも強くもないけど、ワールドカップとユーロを連勝してついでにCLも獲ってる偉大なるキャプテンだよ」

「ああいえばこういう」

「……本当に強いチームっていうのは」

不意に眼が真剣になった。

やっぱりこつちの方が惚れるな。

「その瞬間その瞬間に最適な一手を繰り出し、相手の反応や結果によつて素早くそれに対応した次の一手を繰り出せるチームのことなんだ。最初からデザインされた『こうしなさい』を機械のように正確に精密に繰り返すことができるチームのことじゃない」

「……それは、よくわかる」

そして俺は詳しくないが、おそらく日本のチームに、特に強豪と呼ばれるようなチームには、そういうチームが多いであろうことも。

「そうやって新しい刺激に対して自分の力や技術、感覚を総動員して反応する、これがサッカーのいちばん楽しいところだよ。自分でも想像もしていなかったプレーができたりして、クリエイトとか、成長とか、そういうことまで実感できる」

「なるほどね。」

だからそうじゃないようなチームは」

「叩き潰す」

「おっかねー」

「……ウチからプロになるのはぶっちゃけ可憐とナナの二人だけだと思う。でも進学したり就職したりしてチームを離れても、『ああサッカーするの、楽しかったな』といつまでも思つて欲しい」

「突然学校の先生みたいになった」

「おんなじだよ、根はおなじ」

「……そう聞くと、確かにそうやねえ。」

しっかし、難しいこと考えるなあ」

「難しくなんかないよ。つまり、

『楽しくやろう』

ってことさ」

「で、楽しくなければ、やり方が間違ってる？」

「そうそう、そう。さっすが三十六、やっぱ話が早い」

「できますかね」

「する」

「もし全国へ行けても？」

「行っただけが本番です」

「ヒューカツコイ」

なんだこの当然だと言わんばかりの溢れまくる自信は。そりやまあ確かに「根拠の無い」とまでは言わんが、言い切るには高すぎる目標だぞ。

「……うーん、この、

『おれがやるって言ってたから、やれるっしょ』
みたいなところが、ぼくに無いところやねえ」

「無いところがあるから、コンビを組んだりチームを組んだりする意味があるんだよ」

「そりやそうだ。あそうそう、俺には『革命は二人で起こせる』という持論があつてやね」

「うん」

「創造者の天才と実務家の秀才がコンビを組めばいいんです。

そうすると一十一が二ではなくて、一〇とかになる。
本田宗一郎に藤沢武夫、盛田昭夫に井深大、毛沢東に周恩来」

「上町大地に空堀三十六」

「言うてて恥ずかしいわ！」

「あはは、恥ずかしいねえ。何様だつて」

「いやいや、革命家はそんなぐらゐの勢いでないと。

わたしのフェデルよ、このゲバラ、貴方と革命のためにならこの身を投げ出そう」

「キヤラ的に逆じゃない？」

「そうすると失敗するやないか。カッコイイ方やりた
いやん。男の子やもん」

「畳の上で死ねるよ」

「キューバに畳あんの？ てかまだ死んでへんし」

「まあとにかくそんな感じで、これは内緒」

「どっから？ 全部？」

「そう。隠れカウンターから」

「わはは、すぐバレんちゃうかな。可憐ちゃん鼻効きそうだし」

「可憐はあんまりそういうの興味なさそうからだいじようぶ。漏れるならナナかな」

「ナナさんなら……黙つといてくれ、巧いことやつてくれ、といえ、そうしてくれると思うよ」

「ふむ」

「というか、難波さんには『あなたは黒柱です』とハッキリ伝えたほうがええように思うね。あの人多分、そういうこと言われると実力以上に奮起するタイプ」

「いや、だからそういう風にみんなが扱うから、重荷

になつてて、それをやろう、それをやろうと無理をして
いるようにも、見える」

「……」

ううーむ。

俺にはサッカーのことはわからんが、ピッチの上で
はそういうにも見えるのだろう。それは、普段もそう
かもしれん。

まだよく、知らない。

知るには？

「……みんな遊びに行こか！」

「ん？ どこへ？」

「どこでもええねん、せやな、しゃつかてんでも行きますか」

「シャツカテン？ ああ、あの新しくできた大きな」

「そそ。我らがステーションに敢然と聳え立つ、商業ビルとしては日本一の」

「おのぼりさんだね」

「イエース」

「あれ、あれでも上がるのにお金要るんじゃないかな」
「つけかな」

「む。マジか。ちよつと調べるわ。要るようなら……
なんとかしよう」

「なんとかできるの？」

「世の中の物事にはだいたい裏口がある。大きなシステムほど抜け道やバグがある」

「ほほー。」

あれだね、でもユニフォームとかも頼んでるけど、
ホントにだいじょうぶ？ 無理しちやダメだよ」

「無理なんかしまつかいな。」

お金出すほうが泣いて喜んで出す。

これがスポンサードの王道」

「それはそうだろうけど……

ま、まかせるよ」

「まかせまかせ。泥船に乗った気分で」

「嫌だなあ」

「じゃノアの方舟」

「それも嫌だよ」

「世界が滅んで自分の家族しかおらんねんもんな……
どうするよ、ある日方舟に載せられてこのチームだけ
生き残るの」

ほわほわほわ……

想像中・妄想中・悶絶中・

ちーん

「「死ぬ」」

「どうしてこんなおそろしい想像をさせるの。三十六、僕になんか恨みがある？」

「無い。すまん。俺が悪かった。カラツカラになつてまう」

「僕には丸い何かを回してる絵が浮かんだよ」

「世界は滅ぼしたらあかな」

「うん。人類みな兄弟。みんな、なかよく」

「基本やわ……それが基本やわ……」

革命家も身内には弱い。

■第二幕

●一場 迷子

ということをやってきたのは日本一高いと噂のビル、『ハル・カナル』。百貨店つまり巨大デパートを中心に、ショッピングモールに映画館に美術館に巨大書店に家電量販店……つまりなんでもある。

二年生八人ご一行、試合のない休日は暇なもんで、

誘えば全員来た。とりあえず展望台でも昇ってお店でも冷やかして茶でも啜るか、と典型的な青春ノー・プラン。映画は各々の観たいものが笑えるほど一ミリもかぶらないので難しく、美術館は興味があるのが三十六とはなこだけという溢れ出る非文化性が素敵すぎる。

興味ありなしは別にして一応誰しもお世話になる、服のお店を覗くとそのはなこの独壇場。それぞれにあれやこれやと似合いそうな服を頼んでもないのに持つて来てくれる。またかなりセンスが良くて、その気に

させられてしまう。

三十六に黒白ボーダーのシャツを、押し付ける。

「いやシマシマなんか俺着たことないから」

「似合う！ イケる！」

「えーそおかなー」

確かに鏡を見ると、いけんこたない気もするが、若干胡散臭い気もする。芸術系文化人……に憧れてオサレカフェ巡りが趣味の意識高い男子で感じた。

……あまあ、否定はせんけど。

「このグラスを掛けて！」

丸くて黒い縁の……

スチャッ。

「こりや無理だ！」 「バツチリ！」

「ほらみんな笑ろてるやんか！ こんなもんシマの色
赤やったらウォーリーやろ！」

「そのぐらい似合ってるってことじゃない！」

「天満さん？ どっすかこれ？ ダメですよね！」

「だはは、う、ううん、ボク、このひと、テレビで観
たことある」

怪しい集団。

「まっ、漫才コンビ……夫婦漫才……」

「次代の林家ペー・パー……」

「体操のおねえさんと工作のおにいさん……」

「出オチすぎる……」

「……ひどい……」

「すぐ買ってこなきゃ！ それ一揃え！」

「さすが美原さんだなあ」

君らなあ。

難波さんに姿見の前まで引っ張っていかれて、二人

でポーズ。

彼女はあごを両手で支え、僕は両手をパツと広げて二人で営業スマイル・マキシマム。芸人名鑑に載るイメージで。

いや。

どわっはっはっはっはっはっは……

笑いすぎやて。

ちよつと。店内でフラッシュ撮影は止めなさい。

「……イケるなあ？」

「あかんで」

「ウチ、プロのサッカー選手になられへんかったら、モデルやろうかと思ってるんやけど」

「なんやその『パンが無ければお菓子を食べればいいじゃない』的な」

「漫才師もアリやな」

「だからあかんで」

「夫婦漫才の席は一つ半はある。もう大花が物理的に寿命やから、かつさゆの次に」

「大花あれあと二〇年はいきますよ。」

失礼やな君も！」

「コンビ名は『メガネ夫婦』」

「ひねれ少しは」

「『シマシマメガネ』」

「ひねれ、言うてるやろ」

諸君笑いすぎですて。

つまみ出され……っていうか店員ども笑うな。

あかん。

こんな笑いの沸点の低いリーグにおつたら、技術が錆びつく。

結局、騒がせ賃込みで僕がシマシマだけ買いました。
服あんまり興味ないもんで、こういう機会でもない
と攻めの服なんか買いませんもんで。

——ひと騒ぎしたあと、いよいよ展望台に登ろうか、
というのでチケット売り場の前。そこで、ちよつとし
た異変に気づいたのは、閃く野生の勘、天満さん。

「……あれ、あの子、迷子かな？」

五歳ぐらいだろうか、ちいさな女の子が、沈んだ表
情でひとりぼっちでたたずんでいる。しかしどうも

「ここで待ってなさい」と言われてる感じでもない。
どうしよう、と考える間もなく。

すつ、と難波さんが歩み寄った。俺も、慌てて駆け
寄る。

「……お嬢ちゃん、おひとり？」

「……」

首を縦にふるような横にふるような、微妙な動き。
伏し目は恥じらいではなく、なにかもつと重いもの
に耐えてるような感じ。

「おかあさん、待ってんのん？」

「……」

また同じ仕草だ。イエスともノーとも言えない。それは……

難波さんが顔を上げた。

「空堀君」

「サービスカウンターへ連れて行こう。念のため」

「……せやね。」

お嬢ちゃん、お名前は？」

「……まい」

「マイちゃんか。エエ名前や。おねえちゃんと一緒にゆつくり座れるところ行こか。おかあさんもきつとすぐ来てくれるで」

「……」

ほんとうにごくわずか、あごを引いた。難波さんが見たこともないエエ笑顔でにっこり笑って、手をつないだ。

俺は事情を説明に戻る。

「……さて、ほなみなさんは展望台の方へ。これチケツト。ウチらはあとから追っかけますわ。なかなか来えへんかったら、適当に遊びにいてください」

「迷子案内に連れて行くだけなら、みんなでいくよ」

「いや、まあ、たぶん、難波さんの性格からして親御さん出てくるまでついてる、って言うやろから」

「ああ。じゃなおのこと僕らも行つたほうがいい」

「いやいやいや、どんな部屋か場所かわからんけど、八人で押しかけたらおかしいやろ。二人で」

「賑やかな方が寂しくないんじゃないかな」

「大地君、ここは漫才夫婦におまかせしようよ。」

「……じゃあ、空堀君、よろしくお願いします」

「まかせてちよんまげ」

こういう時は長居さんがコントロールするんやなこ

の集団は。アクの強い五人が黙って従う。まるでピツチの中のように。

漫才夫婦てなんや。漫才夫婦て。

「……ウチ一人でもええでー」

「笑かすために漫才やれ言われましたんで、相方が必要でしょ」

「ウチはピンでも十二分のおもしろさや」

「一たす一は八以上」

「八て。中途半端やなあ。

……あ、ここやここや。マイちゃん、ちよつと待つ

ててな。お姉ちゃんとお話してくるさかい」

受付のキレイなお化粧のお姉さんは、すぐ立ち上がって我々をスタッフルームへと連れて行ってくれた。

最近はこういう事態に備えて、持ち物に名前住所を書いてあるケースが多いそうで、実際マイちゃんの小さいポシェットからは、プラスチックの板に小さな字で書かれたネームプレートが出てきた。

『米倉舞』

名前も米なら一生食い物には困らなそうだが、さすがに上から読んでも下から読んでも感が海苔すぎるか

ら自重されたのだろうか。

男性のスタッフが電話を掛けてくれている。

さきほどのお姉さんは、冷たいジュースを持って来てくれた。しかもちゃんと三人分だ。

「……まいちゃんジュースやでー一緒に飲もかー」

「……」

いくぶん表情もやわらぎ、しつかりうなずいてくれた。

難波さんはずっと膝を折って、目線を合わせて語り

かける。保母さんみたいやな。

やれやれこれで少し待てば……と思いきや。スタッ
フの人が来て、申し訳なさそうに言う。

「……あの、米倉様は一人で来られたようです
て」

「えつ、こんなちいさい子が？」

「はい。おばあさまがお迎えに来られるそうで、すこ
しお時間が掛かりそうです。よろしければ、わたくし
どもでお相手させていただけますので、お客様はどう
ぞお買い物にお戻りいただければ、と……」

「私達がついててあげてもいいですよね？」

難波さんの即答だった。顔を見合わせることにすらない。

「それはもちろんです。わたくしどもも助かりますが」

「じゃあ、そうします。」

「エエやんな？」

「愚問を」

「……まいちゃん、おばあちゃん来てくれるって。」

おばあちゃん来いはるまで、ウチらと一緒に遊んでよかー？」

「……」

まいちゃんはさつきよりはいくぶん力強く、うなずいた。

「あ、ていうか展望台行こや。来はったら携帯で呼んでもらえばエエんやし」

「あそれエエな。」

まいちゃん、ごつつ高つかいとこ昇りに行こかー。

見晴らしエエでー。キレイやでー」

「……えれべーたに、のるの？」

「そうそう。ものすごい乗る」

「……」

さらにキリツとうなずいた。顔は真剣だ。

どういうものか経験済みかな？

——スタッフさんにそう告げて、俺達はさっきのチケット売り場に戻った。

「……まいちゃんの分のチケット買わな」

「まだ予備がある」

「なんぼ持つて来たんや。てか切符あんたが用意してくれたん？」

「イエース。割引券なんかあったらいいなー、と思って金券屋覗いたらやつぱりあった。これサービス券、オープンの時バラ撒いたらしくて二束三文でさ。一〇枚一五〇〇円」

「えーっ、これ一枚一五〇〇円で書いたあんで。なんでそんな安いのか」

「見てこれ、『午前中専用』やねん。オープン一〇時

で二時間しか使われへん。使いにくいからやな」

「ケチやなー。なんぼサービス言うてもなあ」

「ケチりにケチったからこんなビルが建つんです」

しょうもないことを言っているうちに、高速エレベーターが来て、乗って、着いた。最近のエレベーターは加減速Gの気持ち悪さも無いし、ショックもない。つまらん。

エレベーターを出ると、そこは空中庭園。

花壇や緑がそこかしこを彩る、一見ちいさな公園のようである、見渡せば三六〇度空しか見えない。

なんだかファンタジー世界の空の城に居るようだ。
というか、そういうコンセプトで造ったんだろうけど。

そして俺はいままさに、自分が高所恐怖症であることを思い出した。

……なるべく真ん中に居よう。

「……おい」

「あ、いたいた」

六人と合流する。

さっそくみんなでまいちゃんをいじくりだす。長居

さんが話しかけ、天満さんがよく見えるようにと抱きかかえ、さらには肩車。堺さんがポーチからキャンデイを取り出して与える。

「……いちごミルクと、パイン。どっち？」

「……」

はにかみながら迷うまいちゃん。

「……じゃあ、両方」

ぎゅつと握らせてあげる。にこつ、と初めて笑った。

「愛吉ズッコイわ……飴ちゃんは卑怯やわ……」

「……点は獲ればいいの」

「くそう」

といつても、まいちゃん、もう片方の難波さんの手を離そうとはしない。

「はな、なんか得意芸で楽しませてあげなよ。あっちの方にアメリカが見えるよ、とかなんとか」

「ここで流乃が自慢の長い脚でラインダンス」

「ほんとに子供産んで育てられるの？ あたしたち」

「その前に相手いるかな」

「おるよふたりとも」

「また始まった空堀ちゃんのお調子が」

「いやいや、マジでマジで。おふたりとも人気あんで

すから」

「「えー」」

「いやほんと。二年生だとね、五位六位を争う」

「おもつきりBクラスじゃん」

「あいやあれよ？ チームじゃなくて二年オールだから一〇〇人中よ？ 六人中じゃなくて」

「なんかちよつとホツとした自分がきもしい」

「なんでそんなデータあんの」

「僕を誰だと思いですか。全文化部にコネクチオンのある空堀（ザ・コネクター）三十六ですよ」

「なんかそんな人気投票だか解析だかしてる部活あん

の？」

「それはぴみちゅ。

あ、いつそオフィシャルに総選挙やるのもいいか。
盛り上がりそう」

「ジェンダーなんちゃらかんちゃらでぶっ潰してやる」

「五、六が取れるのに!? 子供に自慢できるよ?」

「ダー　ダー　ダー、空堀ちゃん、カウちゃんおはながわかってない。このひとキューキョクに負けず嫌いだから。そーゆーのでも一番以外やなの」

「いやそれはわからんでもないですが愛さんおられま

すからねえ」

「ツラがいいだけじゃん」

「スタイルもいいですよスラッとし立ち姿美しく、まさにプリンス」

「ちなみに、聞くまでもないけど二、三、四は？」

「和泉たちは案外好きよねこういう話題。そこは団子で、大活躍有名人の難波さん、なんといつてもスタイル抜群の天満さん、そして、おかあさん」

「男ってなんでみんなマザコンなの」

「なるほど、あたしたち武器が無いのよねそーゆーね。あ、はなにはあるじゃん、歌と踊り」

「踊らないわよ」

「歌は否定しませんな」

「ヘタだけど好きよ」

「じゃあカラオケ行きましょかー」

「はな凄いのよ。採点で全国で一位とか取る。こないだ一〇〇点獲ったよね」

「マジで!？」

「いやマイナーな古い外国のポップス歌うのよ。歌ってるの全国で二〇人ぐらいだから」

「それでも凄いわ。そういう歌が好きなん？」

「いや。勝つために覚えた」

「凄い！」

「凄いよ。一〇〇点なのにぜんっぜん心に響かないの」

「るーのー。人くさしてないでたまには歌えー」

「あたし、人が歌ってるの聴いてるのがすき」

「二万パワーーそー」

勝つためにはなんだつてする美原さんと、勝てない勝負からは走って逃げる和泉さん。好対照だ。

子供あやし隊とアホ言いながら見守り隊にクツキリ分かれてしまいました。

まあ得手に帆を揚げて。

見てるとずいぶんまいちゃんにも笑顔も増えてきた。
よかった、よかった。

いま気づいたけど、それに応じて、難波さんもニコ
ニコしている。

よかった。

——と、そうこうしてるうちに、携帯が鳴った。俺
は難波さんとまいちゃんを呼んで、みんなと別れて先
ほどのスタッフルームに戻る。

●二場 シンパシー

——現れたのは白髪もお召し物もたいへんに上品な老婦人。おじぎまで優雅ながら、俺達に山のような感謝の言葉をくれた。少ないですけどお礼を、という封筒をきっぱり押しとどめて、代わりに聞いた。

「……まいちゃん、よほどのことがあつて一人でやつてきたんだと思うのですが、よかつたら思い当たる理由なんか教えていただけますか」

「空堀君、あんまりそういう」

「いえいえ、実は……」

むしろ事情を説明できてホッとした、という表情で語ってくれたところによると。

まいちゃんのお母さんは、遠く空気の良い山中の療養所に居るそうだ。病気なので、当然娘は残していくことになる。旅立つ前に最後に二人で訪れたのが、この展望台。

もちろん今はビデオ通話でやりとりもするのだが、やはりちいさな画面の中では会った気にはならない。

手触り・肌触り・そして同じ空気を吸う。コミュニケーションにはそれが大切。

「おお、それはさみしいな、まいちゃん」

「……」

何の話かわかっているんだろう。ずいぶん緩んでいた顔がまた、薄く曇る。と、難波さんが、膝を折って彼女の肩を両手で持つ。

「……まいちゃん。おかあさん元氣にする方法を、教

えたるか」

「……え？」

「まいちゃんが、元気になるんや」

それは、真理だろう。

「身体を動かして、友達と走り回って、泥だらけになつて、ごはんをおなかいっぱい食べて、ぐっすり寝て、また走り回る。」

これで元気になる。

そしてその姿を、おかあさんに見せたげるんや」

「……」

ぎくぎくとだが、まいちゃんの首が縦に動いた。

「お姉ちゃんな、サッカーやってんねん。サッカー知ってる？　球蹴り遊びな。知らんかったらおばあちゃんに教えてもらい。お姉ちゃん教えてやれること言うたらサッカーぐらいしか無いけど、よかったらいつでも教え上げるから、いつでもお姉ちゃんそこ遊びに来たらええよ。さっきいたお姉ちゃんたちや、このお兄ちゃんも、それからさっきのイケメンのお兄ちゃんも

おるで」

「わしゃノーイケメンか」

「細かいことで邪魔しいな。」

それより連絡先とかなんか持つてへんのかいな」

「ああそうだそうだ、えーと……名刺作つてある」

おばあちゃんにお渡しする。もちろんパソコンとプリンタで作ったものだが、こういう場合に自分の役職が「雑用係」というのはオタクくさい軽い自虐ネタで、若干恥ずかしい。作りなおそう。

「……えーと、あと学校がここで、あいや、次の練習試合がちょうど日曜日、丸珠公園第三球技場でありますので、よかつたら遊びに来てください」

「まあまあ……」

と、追加情報をペンで裏面に書き込む。国際化を目論んで裏に書いてた英文版が邪魔である。

「……行けますかどうか。まいは『おかあさんといっしょじゃなきや嫌だ』とどこへも行かないのです」

「おばあちゃんとあまり仲良くすると、おかあさんに

悪いような気がしているんでしょう。わりとあることですよ。どうぞ、いつでも」

「まいちゃん、来てくれるやんな？」

「……」

下を向いたまま、もじもじしている。

難波さんはその頭を優しく二回ほど撫でて、立った。

「行こか」

「うい。」

……じゃあ僕らは失礼します。まいちゃん、またね。

楽しかった」

「バイバイ。おおきに」

……ルームを出てエレベータを待つ。一階で待ち合
わせてケーキ屋さんにでも行こうかと。来た。シース
ルーから、さつきよりだいぶ大きな街並みが見える。

「……さみしいな」

「あの年頃はおかあさんが宇宙みたいなもんやから
な」

「……ウチも寂しかったん」

「そうなんか」

「知ってる思うけど、ウチのおとんサッカー選手やろ。おかんがまたおとんラヴな人でなあ。ちよつと長い遠征言うたら、世話焼きに飛んで行くねん」

「ええこつたね」

「せやけどそうなたら、兄ちゃんら二人共クラブの合宿所とか行つてまうし、ウチ一人や。ウチは父方母方ともじいちゃんばあちゃんところちよつと遠くて頻繁には行かれへんかつて」

「そら寂しいな」

「寂しいでえ、一人の家に帰んのは。せやから、ずー」

つとサッカーやってた。日が暮れるまで」

「それで上手くなつたんやな」

「最後の方はみんな帰ってまうから、一人でできることやってたなあ。F Kの練習とかな。自分で実況しながらP Kの練習とか」

「難波鳴海らしいよ」

「……サッカーに、助けてもらたよ。まいちゃんを、どれだけ助けられるかわからんけど、サッカーでなくてもええから、なんか助けってくれるのがあつたら、ええな。お絵描きとか、ピアノとか、なんでも」

「アニメでもゲームでもマンガでもええな」

「いやあの子はアウトドア派やで」

「そんなに見ただけでわかる？」

「せやないと一人で電車乗ってこんなところ来えへんや
ろ」

「まそりやそうだ」

「……おおきに、な」

「なにい」

「ずっと付き合ってくれて」

「乗りかかった船やからな」

「……まいちゃん、つよう生きるんやで……」

目が潤んでいるので、ハンカチを……ハンカ……うわあこういう時に限って無いんだよなあ……大慌てでリュックをひっくり返して、底から圧縮の効いたティッシュを発掘した。

「……ぺっちゃんこやんか」

「出てくるだけ男前やと思え」

「テレクラの宣伝やし。どこ歩いてんの」

「この無断転載のイラストが可愛いなあと思って」

「アホちやうか。ほらー、繊維力チカチカ過ぎて目えこすったら痛いてこれ」

「マジか。あホンマやなすまん、ドラッグストアかコ
ンビニで新しいの買お」

「そこまでせんでええて」

「代わりに俺の袖使う？」

「なんか伝染りそうやな」

「なんやとー」

……ティーン。

目の前に、六人。

「……あら。恋物語が進行してるわ」

「はやっ。もう痴話喧嘩」

「このひと女泣かせだと思ってたんよ案の定」

「ちよちよちよ待つて待つて」

「ホンマ酷いで、泣かされっぱなしや」

「なんばさーん」

「見てこれ、ウチ泣いたらこんな鼻紙投げてよこして」

「投げてなーい」

「デートDVだ、デートDV。釣った魚には餌やらないタイプだ」

「うおおい」

「あんた、酒も呑みなはれ。博打も打ちなはれ。うち
はあんたが日本一の、日本一の……なに？」

なんだろう？

「逆やろ。」

あんたが日本一のサッカー選手になるためやったら、
あてはどんな苦勞にも耐えてみせます」

「「おー」「おー」

「ちよ待つて待つて待つて待つてその『衆人環視の中
告った男子の勇氣に感心する群衆』みたいな歓声は止

めて。いまのは冗句。イツツ・ア・ジョーダン」

「手打つときなよ、ナナ。博打はやらなそうだよ。酒と女は怪しいけど」

「ぜんぶやりません」

「残念ながらタイプやないねえ」

ニヤツと笑って、残りのティッシュを突き返す。

「じゃ理想のタイプ、聞いてええ？」

「サッカーが上手くて、自分が好きで、自由に生きている人」

マラドーナか。

全部ダメだ。

「出直します」

「諦め。ウチみたいなヤクザな女、好きになったらあかん」

「いや……」

そこら。クツクツクツ笑わない。

ギャグやから。ネタやから！

「それでも好きでたまらへん言うねんやったら……」

地球の果てまで、付き合ってもらおか!!」

「難波さん、難波さん」

「ウチは……ウチは日本一の、いや世界一のサッカー選手になるんや。」

世界一やで？ わからんか三十六。

なんやその辛気臭い顔は！

サッカーやサッカーや、サッカーやんでえ!!」

「はい思う存分やつてください」

「サッカーのためならオトコも泣かす……それが……それが……どうしたというのだあ！ 文句があるかあ！」

「ありません」

耐え切れなくなつて爆笑する皆の者、なんだか脳内ワールドに逝つて帰つてこない難波さん、奇人集団を見る周りからの視線が軽く痛い。

わしどうしたらええの？

■ 第三幕

● 一場 リカちゃん電話

RRRRRRRR RRRRRRRR

「……お、リカちゃん電話や」

今晚も独り。

ただ、今日は夕食をみんなで食べたので、さほど寂しくはない。

やっぱり「メシをみんなで」というのは効くなあ。
おっと、相方からのでんわにでんわらなあかん。

……苦しい。

「……もすもす。あーまいどまいど」

清水リカは名門・聖愛学園の寄宿生だ。高校女子サッカー界のツートップ、そのもうひとつの西海女子学院が全寮制なのと違い、聖愛には遠方からの入学者用

のちいさな寮があつて、リカはそこで暮らす。ちいさな、といつても学年あたり二〇人は入つてゐるので、三学年で六〇名ほどの所帯であり、食事時などは賑やかだそうだ。食堂だろうか談話室だろうか、ワイワイ音が聞こえる。

ウチの前回試合後のピクニックを思い出す。二〇人前後であれだったから、あの三倍か。そりや姦しいな。

「……ほー、ほー、そらいキがエエな。エエなあそら。前線は何人おつてもエエからなあ」

話題は自然にサッカーになる。なんでも一年にいいのが入ってきたそうだ。もちろん聖愛学園のスカウト網に掛かるのだから優秀だろう。しかしユースに顔を出しているナナは一学年下のめばしいところを一通り知っており、知らない子ということは掘り出し物だ。さすがやなあ。

「しかしウチには天下の……」

え、なに、可憐元気かって？

もう元気元気、こないだ一緒にちーと試合やったんやけどな、ものごつついジャンピン・ヴォレーをこと

もなげに決めやがつて、やつぱモノが違うでモノが。
あんなん聖愛に入られてたらもうおしまいやった……
え、なに、いやなに言うてんねん、クイーンズカップ
であんたら叩きのめして優勝するんのは、このウチら
D……じゃない、ミラクルズや！

……え、なに、いい名前つて？

おうエエ名前やろ。カッコエエやろ。そつちも新チ
ームでフレッシュやろけど、ウチらも盛り上がつてき
てんでえ」

おそらく可憐の様子でも聞けとユース聖愛軍団にけ

しかけられのだろう。リカは、そのメチャクチャなフイジカル・モンスターっぷりと裏腹に、ふだんは控えめ、というか、どーんと構えて多少のことには動じない。あ、じゃ裏腹じゃないか、そのままか。まとにかくカチャカチャそういう細かいことを気にするタイプではない。

「……というのはまあ冗談としても、秋ぐらいには聖愛さんと練習試合組んでもらえるようなナイス・チームに仕上げたいと思ってまつせー。

……え？ 秋は選手権で忙しい？ 聖愛たいへんや

な。あの、高校のチームはクイーンズは勝ち上がりへんやろ、という日程はおかしいよな。わっはっは、その点ウチらは有利やでー」

逆に高校のチームだけが参加できる大会に、クラブチームであるミラクルズは参加できない。夏のインターハイと冬の選手権がそれだ。強豪は試合数をこなして強くなっていく。ただし高校のチームの場合、特に選手権が注目度が高いので、クイーンズカップには力を入れないチームも多い。

そこが狙い目である。

ナナはいつも不思議に思うのだが、日本人は「箱の中」で競争したがる。日本女子最強チームを決めるのは、誰がなんと言おうとオープン大会で強豪プロから企業ベースチームまで出てくるクイーンズカップに決まってる。男子と違い女子ならユース世代でも体格差・体力差はそんなにないので、大人を相手にしても箸にも棒にもかからないということはない。足りないのは経験値だけだ。それなら気合いでなんとかなる……と思うのに、そして実際去年は地区予選を突破してみせたのに、まだ高校生同士の戦いの方が重要だと言う。

わけがわからない。

高校などプロへの通り道に過ぎないと思っっているナナにとって、この一点だけとってみても「ああ聖愛学園のスカウトを断ってよかった」と心底思う。

ただし、聖愛学園はその中でもクイーンズカップで力を抜かない方で、というより抜くも抜かないも実力が高すぎて普通に勝ち上がる。昨年度は、準優勝である。

ナナはこれもいつも思う。

同じ高校生や。あそこまでは、イケる。

『……はぁーい、ナナちゃん、おげんきー？』

「あ、ジュリ姉。元氣も元氣、元氣だっせー。ジュリ姉もあいかわらずで」

『アハハ。なんか楽しそーな話してるから。うちもう可憐ちゃんの代わり見つけたからねー』

「へっへっへ、そう簡単にあれの代わりはいませんて。ウチがぴゅーとクロス入れたらすぐ1点ですわ。わーっはっはっはっはっはー」

『うちでもそうしてくれたら、かおりんかりカちゃん
が獲ってくれたのにー。ぶーぶー！』

葦崎樹里亜はギャルっぽい態度や風体に眉をひそめる大人も居るが（つけまつけ付けてピッチに出て叱られたこともある）、センターバックとしての技量は天下一品。スピード、対人、対空、フィード、ラインコントロール、どれをとっても文句なし。むろんユースではDFリーダーとしてライン中央に陣取る。

もう一年前の、聖愛をフツたことをまだ話題にくれる、実はいい人である。

「あれ、ジュリ姉居るってことは合宿ですか」
『そー。ホント合宿多くてやんなっちゃうよ。これば

っかりはナナちゃんが羨ましい』

「いーじゃないスカ、チームワークが深まつて」

合宿か。エエなあ。

ウチも一回ぐらいやりたいなあ。

『もーこれ以上深まんないつて。香織や智子の顔見飽きた』

後ろで笑いが起きてる。国見キャプテンや藤枝師匠も居るんだろう。

「ウチ来ますか。歓迎しまっせー」

『えナニ聞いたよ、ちよおクールな美男子がコーチやつてゐるって！』

「どっから知ったんですか！ まさかスカウティング!?」

『あ、これ内緒だった』

ホンマか。聖愛スゲエな。逃した魚（ウチと可憐）のチェックか、それともめばしいチームにはあまねくスカウターを送り込んでいるのか。

『まだ写真とか観てないけど、いい男だったらかんど紹介してよー』

「もうね。ちよう、オットコマエ」

『えー！ ホントにホントにー!? 会ってみたーい』

「うちのチームの宝物でつきかい、簡単には売れませんなあ。ダンディーな立飛監督でガマンしてください」

『おとーさんそーゆージョーダン全部スルーすんのよー』

「わはは。あいかわらず根っからの監督さんやねえ」

『リカ聞いた？　すごい美形だつて。……うわ興味なさそー。あんたねー、あんたもちよつと浮ついたところ見せないと、人気出ないよ？　あんたこれから国民的ヒロインになるにあたつてね』

「ちよつ、ちよつ、説教はそつちでやってくださいって」

苦笑い。樹里亜のDFらしさといえは見かけによらずおせっかい焼きなところで、それが説教あるいは小言という形になって現れたりもよくする。新しくユー

スにやってきた、特に守備系の子が最初に面食らうのがこの説教地獄だった。それもなんかヤケに長い。

しかしまあ、リカはアイドルになるだろう。やはりスポーツでは、身体能力がズバ抜けている選手は見るだけでワクワクするものだ。顔立ちもとても整っているし。

……いや。

「……ヒロインといえば、こっちにもひとり、エエのが入ったんですよ」

なぜそんなことを吹く気になったのか、自分でもわからない。

あまりに巨大な聖愛の組織力を前に、見栄や虚勢を張りたかったようでもあり、あるいは単純に、この目で見た驚きを、わかってもらえる相手に伝えたかっただけのようでもあり。

『えっ、可憐ちゃん以外に？』

「そうス」

『どんな？』

「それはまだ言えませんが、フヘヘヘヘ」

『いいわよ勝手に丸裸にするから』

最後はわずかにマジメが入った。あのクオリティなら、隙を突けば樹里亜率いるカテナチオ・ラインだつて突破できるかもしれぬ。

「あと去年CBやつてた先輩がトップにコンバートされたんで、高さで強さが補強されました。前線四枚はどこに出しても恥ずかしくない陣容ッス」

『言うわねー』

もうちよつと吹いた。ポテンシャルはそうかもしれないが、現実になんかそうなるのは、まだ先だ。

しかし待てよ、これでボランチにキャプテンが居て左に流乃が走って忍様が後ろを守って……ウチ、結構強いんじゃないかコレ。

「……ということで秋あたりには一度お手合わせお願いしたい、とさつきりかに言うてたんです」

『へー。や、アタシたちもやりたいたいと思ってたんだー。』

『ちようどいい練習』に』

「ええ、ええ。『胸を貸したげ』まつさー」

『へへッ、じやリカに代わるー』

「ういうい。

……ああ、相変わらず元気なお人やなあ。

……ん？ なんや？

……楽しそう？ そら楽しいよ、毎日充実してる。

は？ そうじゃない？ なにが。

へ？ 声が明るい？ ウチや昔から明るいですよ。

ほ？ 昔から知ってるけど知らんぐらい明るい？

そおかなあ。

ひ？ なにか変化があつたんか？ あ、そやから言

うてるやん、超男前のナイス・コーチが就任して、優

秀な新人がゴロゴロ入ってきて、『希望がある』てのは人を明るく……

ふ？ そうじゃなくて？ なにが言いたいのか。

……はあ。

はあ。

はあ。

……は？ か、彼氏？」

ア、アホなことを。

「そ、そんなんできてませんよ、そんなん。

えっ？　ど、動揺してる？　して、してへんて。

そもそもそんなな、ウチみたいな生活してたら出会いが無い出会いが。わかるやろ？

えっ、私達よりある？　いやそらそやけど意外に普通の共学の高校通ってたって無いもんは無いで？　いやホンマに。ウチのチームかてそのコーチとやな、え

ー」

いや。なぜ、隠したがるのか、わたしよ。

いや違う、いくらなんでも「雑用係」は悪いと思っただの。しかし「お手伝い」とか「サポーター」も変

だろう。「広報係」？ それもしてるが、それだけではない。「マネージャー」？ それに近いがそれはまた別にいる。

なんて言うんだろう、ああいう人を。

「えー、まあ、うん、

え？ 隠した？ 隠してへん隠してへんて！ いや、もひとりおんねんけど、ちよつとなんていうたらわからんくて、

は？ イケてるかって？ いや」

どうなんだろうアレ。確かにぶちやいくではないけど……まあそのもひとりの方と比べるのもこれもまた悪い。レアル・マドリーの10番と比べれば、ガンバ大阪の10番だって色褪せる。

そのぐらい？

「いやいやいや、待って待って、イケてるかどうかなんかないやん、ウチは」

『エーッ！ ナナボン彼氏できたのー!?』

あつ、うるさいの帰ってきた。

「いやちやいますちやいます、リカの誤解です」

『ナナならね、共学の高校行つてたらそりやあモテモテで毎朝靴箱にミッシリ手紙が入つてゐるかと思つてたのよ』

「そんなもん一通も貰つたことない。なんで一通たりとも貰えんのか。女の子からでもウェルカムや言うのに。」

いやちよつとホントに待つてくだいて、ちやうんですつて」

『そうっかー、引退かー。残念だなー』

「勝手に寿引退さすなー！　ウチやもし結婚できても引退はしませんでー！」

『あ、そこまで考えてるんだ。ひとことも言ってくれてなかったのに』

「待つてつてー。ちやうつてー」

『聞いて聞いてかおりん、ともー！　ナナちゃん結婚すんだって！』

「ちよつ・とおおおお!!」

さんざイジられた。

まあ、合宿サッカー漬けは電話やメール、メッセー

ジの交換ぐらいしか発散口が無いのは確かで。

ピッチではキリツとカツコよく、バレンタインなんかにはや日本中から（もちろん女の子から）貰ったチョコをダンボール箱で数える、ユース聖愛カルテット——国見香織、葦崎樹里亜、藤枝智子、そして清水リカ——だって、普段はフツ—の高2高3の女の子である。

——電話を切って、ベッドに寝転がった。

頬のあたりが痛い。顔が火照る。

メシン時もそうやったんやけど、なんでウチの周りの人間はアレと付きあわせたがるんだろうか。

ウチはそんなに危ういんやろか。ああいう細々したことが得意そうな、頼めば家事でもちゃんちゃんとやってくれそうな男子をくつつけといった方が良いという親心だろうか。

うーん。

わからん。

しつかり生きてるつもりやけどなあ。

それに、あの人の方かてウチみたいなのはノー・セ
ンキューやろ。モテそうやからな、というか、モテて
るからな。あん時もファンクラブぞろぞろぞろぞろ引
き連れて歩いてからに。カッコ悪いんだかカッコエエ

のんかわからへん。

『いやファンクラブとかちやうつて、持ちつ持たれつやつてー』

つて？

アホか。

そんなんでたまの日曜に埃っぽい野っ原の球技場で来て興味もないサッカーの試合見るかいな。ほんであのメシ喰うてた時のあのおたがいの牽制しあう距離感のビミョーさたるや。ホンマにあの人は乙女心つていうのが、わかってない！

第一なんやあのテレクラのティッシュ。ちゃんとし

たハンカチ持つとけ小学校で習うたやろ。まだ目の周
りほんのり痛いわ。はー、もー、ウチみたいな心の広
い女やから許せるけど、あんなもん彼女相手にやった
らフラれんで。

あかんあかんあかん、無し無し無し。

ウチは日本一のプレイヤーになるまでは、恋とか愛
とかそういうのとは、無縁です！

サッカーのためならオトコも泣かす。

だからオトコちやうつて。

『はい思う存分やつてください』

半笑いでそう言った顔が浮かんた。あの人いつも半笑いやねんて。それが氣に喰わん。もうちよつとマジメに人生生きなあかんやろ。ギャグの時、マジメな時、メリハリをつけていかなあかん。まああいう軽い人でないとそのー、なんだ、まだわからん、ああいう人なんていうんや、というような立場は、できんのかもしれんけど……

モヨモヨもよもよ考えているうちに、不思議にいろ

いろ緩んできて、
寝た。

●二場 西九条家

——学校の校門で待っていると、漆黒の大型ミニバン、というのも変な表現だが、が現れた。お、あれはアメリカのメジャー車種ですね。あれ、のご先祖が活躍する『突撃野郎Bチーム』というドラマが好きでさあ……

ガラガラ、と大きなスライドドアが開くと、顔を覗かせたのはやつぱり、西九条さんだ。

「こんばんわー」

「まいどです！ ホンマすんません休みの日に！」

「いゝえゝ。時間はありましたし、楽しみにしていました。どうぞ、中へ」

「失礼しまーす。そう言ってもらえると助かりますわー」。

……今日はいつもの長リムジンじゃないんツスね」
「オフとオンの区別は付けなさい、とお祖父様がおっしゃるので」

「区別」

中は豪勢な革張りキャプテンシートが二脚ズデー
ン・ズデーと置かれており、足を伸ばしてワイング
ラスでも片手にこのまま夜の街中観光としやれこみた
いところである。隣に美少女も居るし。いつものクル
マより豪勢ではないか。

「……漆原、出してください」

「ホンマすんませんねえ、そもそも西九条さんにわざ
わざ出てきてもらわんでも」

「大切な先輩をお迎えにあがらなければ、それこそ叱
られます」

「いやあ」

すると走り出す。想像より乗り心地がいい。椅子の革がヤケに柔らかくて心地よい。この椅子持つて帰りたい。

「冷たいものでもお飲みになりますか？」

「冷蔵庫あるんだ。あいや、おしっこ行きたくなったらアレですんで、ご遠慮」

「温かいものもありますよ」

「あ、どうぞお嬢様はどうぞ」

「お嬢様はやめてください、空堀先輩」

「あ、はい、明日葉様」

「先輩」

「冗談です、冗談。明日葉ちゃん」

「はい」

緊張で冗談にもキレがない。

いつもキレがないなんて言うなよ、悲しくなるだろ？

事は、スポンサーの件である。

クラブ活動にはカネが要る。特にミラクルズは学校の正規部活ではないので、金の出所がない。去年は持ち寄り持ち出しでなんとかしのいだ。特にナナはかなり多めに出したらしい。ノリはどう見てもシブチン浪花主婦だが、もちろん父親がプロ・サッカー選手なので、比較的裕福なのだろう。おうちの理解もありそうだし。

といて、今年も無理させるわけにはいかない。人数も増えたし、やりたいことも多い。ユニも新調したいし、練習試合の後には打ち上げもやりたい。

ならばスポンサーを募る、というのが定番で、実際

学校の周りをすこし駆け回ってはみたものの、感触こそまあまあだったがいかなせん額がちいさい。あたりまえの話で、個人商店主相手に知名度のない我々が、「ウチらをスポンサードしてください」と言っても、千円も出ればありがたい方だ。昔イタリアに修業に行ってた、だからカルチョには目がない、というイタリアンのオーナーシェフが一万円くれた時には、飛び上がって抱きついて「そんな趣味はない」と叱られた。

ということ、ラストリゾート、最終手段にとっておこうと思っていたが、早くも明日葉様の御実家、つ

まり西九条家に頼ることとなった。明日葉にとっては迷惑、というかなかなかお家の中でも言い出しづらい案件だろうに、快く引き合わせを承諾してくれた。

それにしても相手は天下の西九条家、平安朝から八百年続く伝統の名家であり、いくらそばに明日葉が居てくれているといっても緊張する。待ってる間、リュックの中のプレゼン書類を何度も確認して、段取りを空でシミュレートした。

長い長い漆喰の塀が尽きる頃、ふわっふわの乗り心地のミニバンは滑るように門扉に吸い込まれた。また

乗降場というか玄関口というか、までクルマで走るのが距離感がおかしい。ここは本当に日本か。

黒尽くめ三つ揃え&サングラスの漆原さんにドアを開けてもらって、降りる。SPにこんなことしてもらったの初めてだよ。

ばかでつかい玄関をくぐり、RPGのダンジョンのように長い廊下をくきくき九〇度曲がりながら歩いて、もはや独りではたぶん帰れなくなったあたりで、障子の前に明日葉ちゃんが座る。慌ててどうしたもんか中腰になって、明日葉ちゃんにそのままで、と手で示される。

「……お祖父様。明日葉帰りました。空堀先輩をお迎えしました」

「うむ」

明日葉ちゃんはスツ……と両手で障子を開ける。板についた所作がカッコイイ。育ちがいいってのは羨ましいなあ。促されて部屋に入る。一礼する。

「はじめまして！ 空堀三十六といいます！」
「おお。どうぞ、お座りください」

床の間を背に座るのは西九条家当主、お祖父様。

また絵に描いたような、白髪総髪に白い髭、渋くて遠目からでもイイモノ感バリツバリの和装がお似合いだ。横にお祖母様らしき方もおいでで、部屋真ん中の座布団をすすめられた。正座する。さっぱりシンプルに美しい和室はしかし、想像ほど歴史と伝統で黒光りがするほどではない。むしろ建てたてのような清らかさだ。

「……お話はお伺いしております。明日葉は居た方が

よろしいですか？」

「あつ、どちらでも……いえ。とりあえず、外していただいて」

「明日葉、そうしなさい」

「はい。では後ほど」

わあ後ほどてことは後でまた送ってくれるってことかな。

悪いなあ。

「単刀直入に申しますが」

「あつ、はい！」

さすがというか、俺が座るとすぐ本題だ。このへんのスピード感が、いまでも現役で財閥の一角を占める西九条家の家風なのかもしれない。プレゼン資料は無駄になる。

「……当家は財閥などと世間では言われていますが、企業経営は当家と各社と完全に分かれておりまして、ご想像ほどには経済的余裕はありません」

嘘をつけ嘘を。

思わず口をつきそうになって、すんでで堪えた。

主要株主リストに載ってる優良企業だけでも何十社もあるはずで、ということは配当だけで年に何十億入ってくるかわからない。ひよつとすると何百億かもしれない。

相手高校生だと思つて、バカにしとんのか。

「ということで金銭的な援助は難しい」

そこいらのイタメシ屋のマスターが一万出したて言

おか。

……ま、しかし、しょうがない。こういうものはやるかやらないかだ。額は問題ではない。やる気が無いなら、長居はご迷惑。

「そうですか……いえ、甘えていました。わざわざお時間、お手間とらせて申し訳ありませんでした。すみません。本日はありがとうございます。失礼します」

「まあまあ、そうお急ぎなさるな」

立ち上がりかけると、笑って制された。

「……とはいものの、当家も古い家柄。つながり、コネクションは多少ありまするゆえ、現物支給やサービスでなら、お力をお貸しできるでしょう」

「現物……」

あ、ありがとうございます！　それは助かります！

たとえばユニフォームを、関連企業の宣伝費か何かで落してもらえれば、それだけでもう現金にして三

○万四〇万、いやセカンドまで作ればその倍のスポンサードになる。それは、現金より嬉しいかもしれない。まったく人が悪い。最初にそう言えばいいではないか。

落として・上げる。

人心操縦の基本か。

「ええと、それでしたら早速、あの、たとえばユニフォームなのですか」

「その前に」

「あ、はい」

声色が変わった。

硬く鋭く、刺すようにというよりは、金槌のように、
神経を叩いてくる。

「……つかぬことをお伺いしますが、この援助をして
当家には、どのような利益がありますかな？」

来た。

想定していた質問だ。

だが、頭の中にある用意してた答えは、どれもこの

状況に耐えられそうにない。

普通の企業なら、「広告になります」とか「地域への還元です」とか「若者を大切にするメッセージは有望な人材を惹きつけます」とか言える。

しかし見よ。西九条家にはすでになんでもある。

利益……メリット……意味……やりがい……

喉が乾く。

考えろ三十六。いや感じる三十六。いや……いや。

……いや？

「……あのう、西九条家には、なにもありません」

「ほう」

こういう、ときは、基本に、返って、ですね。

「西九条家にはありませんが、お祖父様にはあります」

「それは？」

人間は、自分のことしか、考えられないんです。

「可愛い孫娘が、もつと可愛くなります」

にこつ、と笑われた。

ああなにかようやくこの瞬間、「西九条家当主」が
「明日葉のおじいちゃん」になった。気がする。

「……では、西九条家としてではなく、わたしが個人的にスポンサーしましょう。ポケットマネーで。はっはっは」

空気が一気に緩む。
肩の力が、抜ける。

「なんだかその方が悪いような気がするのですが：

…」

「なに、どの社の広報宣伝を通しましても、小うるさい審査や調査などがありましたな。わたしの小遣いからなら、誰気兼ねなくすぐ使えますから」

「それはそうかもしれませんが……あいや、そこらの年金生活じいちゃんばあちゃんと一緒にすると失礼ですわね、すいません」

「いやいや。では早速、そのお手元の」

「あ、これユニフォームの資料なんです。あそうだ明

日葉ちゃん、明日葉様もぜひ一緒に」

「そうですね。呼んできなさい」

「はい」

明日葉ちゃんが来て、ユニの説明をした。ショップ
経由で注文しようと思っていたら、そのユニフォーム
の会社ならコネがあるという。

スゲー。いやむしろ大企業同士ならその方が自然か。
と思う間もなく、執事みたいな人を呼んで、指示を
出す。

スゲー。やっぱり金持ちスピードあるなー。

金持つてると心に余裕があるから決断早いし頻繁にチャレンジつまり投資できるんだよね。ほんでまたそこからリターンがバンバン返ってくる。持てば持つほど豊かになる勝者総取り方式。

資本主義間違うとる！

と、どっぷり浸かりながら思うのであります。

明日葉ちゃんは目をキラキラさせて「楽しみです」を繰り返す。それを見ておじいちゃんおばあちゃんも相好を崩す。ふふんもちろんユニのサンプル画像は、

「ASUHA 17」

だ。資料を覗いて、明日葉ちゃんが言った。

「難波先輩は、鳴海ではなくて、ナナなんですね」

「NANA」。

「うん。ユースでもこれで通してるらしいし」

「ニックネームだと、可愛らしくていいですねー」

「そうだね。西九条さんもなにかあつたら、それにするよ」

「うーん……あんまりそういうの、ありませんー」

他に言うと、胡桃先輩は愛称が「くー」なので

「COO 14」、そして吹田ちゃんが「CHEETAH

20」。千里って名前から「チー太」と呼ばれたりする

のだが、さすがに「チー太」そのままは女の子にどうなの、と思ったので。

と、おばあさまが思い出したように。

「……明日葉ちゃんは昔子供の頃、『はっぱちゃん』って呼ばれたりしてましたね」

「ふふつ。そうですね。いまでも京都に行くときそう呼ばれたりしますね」

「『はっぱちゃん』かあ」

でも「HAPPA」はちよつとなあ……はっぱ、はっぱ

……

「TAIMA」

無理。じゃ、

「DYNAMITE」

いやダイナマイトやけどなあ。

ちよつと考えよう。

——珈琲党の俺もひっくり返る美味しい紅茶が出て、
なんか食べたこともないぐらい旨くて可愛い和菓子が
出て、メシは喰うか酒は飲むかと勧められ、食べてき
ましたすいませんと断るのが非常に悔しかった。無理
して喰って途中でギブるの絶対よくないそういうのも

見られてる、と思つて涙を呑んだ。

たぶんのたうち回るぐらい美味しい寿司とか、水みたいでいくらでもガブ飲みできる日本酒とか出たはずなんだ。悔しいなあ。

小話で盛り上がつてゐるうちにご当主文学が大好きと知り、それなら多少心得あるのでパーパーパー適当なこと吹いたらまた乗つてきてこられて。

「漱石は近代の息苦しさを初めて描いた人なんです、だから近代国家の重さに気づき始めた明治人から、その重さに耐え切れなくなりつつある現代人特にサラリ

ーマンまで、たくさんの方の心を打つんです！」

とか言うのと膝打ってらした。もちろん最近読んだ『ジヤパン・イズ・バック』って本からの受け売りだ。

なんでもご当主、昔は文学青年で、小説家になりたかったんだとか。実際、大学生時分には地方紙だが新聞に連載小説を書いたこともあるそうで、特に日本の近代文学には詳しい。というか、ご自身がそのただ中におられたわけで。ノーベル賞作家を「健三郎」呼ばわりですよ。

もう冷や汗しか出ない。

——なにやら予想外に楽しい時間があつという間に過ぎて、また明日葉ちゃんを送ってくれるというから固辞するもまた「叱られます」と大型ミニバンに乗り込む。その前におばあさまが、手土産に菓子折りのようなもの、

「これはお車代で」

と矛盾したことをおっしゃる。送り迎えさせてそれはない、とこれも固辞すると、いや学校まで来られたでしよう、とこう。集合場所が最寄り駅ではなくまたウチの家に来てくれるわけでもなく学校というのはそう

いう意味か、と歴史と伝統に積み重ねられた外交プロトコールの難しさを思い知りつつ、はあまあそうですか本当にすいません、と頭下げて貰った。

ぺらっ、としてるので千円……てこたないか、五千円かな。もし太っ腹に一万円入ってたら、みんなに奢ろう。

車中、ニコニコ嬉しそうな明日葉ちゃんに一年生の話をいろいろ聞いた。初めて行ったカラオケが夢のようによに愉しかった、という。

「じゃあカラオケこんどはみんなで行きましょう、美

原先輩なんか一位取れるらしいですよ全国で」

「一位！　すごいですー！」

「明日葉ちゃんは？　やってみなかった？」

「はいー。そういう機能があるって、知らなかったんですー」

「そおかあ。残念だね。今度やってみよう」

「はいー！　ぜひー！　一位、狙ってみたいです

ー！」

「はは。一年では誰がお上手？」

「そうですねー、みなさん個性的で、ステキでしたー。

……古都さんを、除いて」

明日葉ちゃんの顔が、不意に真顔になった。

「あらっ。こつとん音痴なの？　なんか器用に歌いそうだけど」

「いえ。音痴、ではなく。

……芸術、なのです……」

「はあ。」

お嬢様は、車窓から流れる街の光を眺めていた。

西九条さんのこんな表情初めて見た。こうしてると本当に美人だな。

「……空堀先輩。

世界って、広いですね」

「う、うん」

「負けないように、がんばります！」

「う、うん。がんばろう」

「はい！」

——学校前で降ろしてもらう。笑顔の明日葉ちゃんに手を振る。ずっと運転してくれた漆原さんに会釈する。敬礼が返ってきた。

さて、と歩き出そうとして、ちよつと胸騒ぎがした。手にした菓子折りの紙袋に突っ込んだ、お車代を取り出す。和紙の手触りのいい封筒だ。ぴっちり封を爪

先でピリピリ破って、取り出す。

あこれ現金じゃない、タクシー券か？

……じゃない。

やばい、小切手だ。

いち、じゅう、ひゃく、せん、あーやばい。

やばい。

なにがヤバイってね、カンマが三つあるの。

ほらね、一やばい、二やばい、三やばい。

三つあるでしょ？

人が悪いにも、ほどがある。

ここまで人をおちよくらんと、家て八百年続かのか。

さあ大変だ。

「どう使うか」が見られてる。

祖父さんひよつとして俺を婿にでも取るつもりか。金の使い方テストとかされてるんやなかろうな。むしろそう考えると数字書いててよかった。白紙だったらホントどうしようもない。その辺は若者への優しさか。いや待てよ、これまず受け取る／突っ返すってところからテスト・スタートなんかな。いやあ……こう

いうのなあ。

こういうの、なあ。

三十六は個人的には、こういうのは好きじゃなかった。

だがチームのことなら話は別だ。ありがたくて涙出る。

祖父さんは逆だ。仕事の話なら金は出せん。

だが孫娘のことなら話は別だ。なんぼでも出す。

世の中なかなか、ままならぬ。

いや、ピッタリいい巡り合わせ、とも言えるか。

それはいいとして。

これどう使おう……やっぱ大ちゃんに相談だよなあ

……

と、そのまえに。

「……ありがとう、ございまーーっス!!」

夜空に感謝を叫んでおいた。

夜更け、人通り少なくて、力一杯。

●三場　いつもの

「……今日は楽しかったねー、大地君」

「うん。」

久しぶりに、楽しかった」

「ふふ」

『ハル・カナル』から空堀君オススメの『山嵐』というラーメン屋さんでみんなで晩ごはんを食べて、帰り。ひと駅、二人で歩く。

一時はあんなに「生きる屍」という言葉そのものだ
った大地君が、こんなに普通の、いや普通より優しい
表情に戻ってくれて、いや戻ってくれるどころか、中
学からずっと横で見えて見て見たこともなかったほど温
和な顔で、本当に、うれしい。

「……空堀君は、本当にこういうのが上手だねえ。企
画というか、司会進行というか」

「うん。男友達でどこか行く時でも、たいてい幹事は
彼。そしてだいたい、おもしろおかしくうまく行く」

「だろうねえ。」

私としては、あんなに美味しいラーメン屋さんが、あんな学校の近くにあつたとは知らなかったよ。よくチエツクしてるつもりなんだけど……」

「はは。そんなこともあるさ。『猿も木から落ちる』」

「サルかあ。さるさるー」

「『医者の不養生』じゃないしね。美味しかったね」

「なんか店舗もメニューもコンセプトがバラバラなのよね。そしてああいうお店はだーいたい不味いもんで、迂闊だった。やつぱり、食べてみないと、わからないな

い」

「はは」

美緒は食事・食べ物・料理のことになると、本当にくるさい。まあ僕がサッカーのこと語りだすといつまでも語っているのと同じだけ。

「湯麺がおいしい、ってことは野菜がいいのよ。あれ結構いい野菜入ってる」

「まいちゃんも可愛かったね」

ほおっておくといつまでも「見逃した自分」を反省してそうなので、話を変えた。

「あ、うん。お母さんとの思い出をたよりに一人で電車に乗ってくるなんて、前途有望だよ」

「僕五歳の時そんなことできたかなあ」

「私は……包丁を握るので精一杯だったかな」

「それはそれですごいよ」

「料理しないと死ぬと思ったみたい。死ぬと思うと爆発力があるものよ、人間。特に子どもはね」

「まいちゃんにとってはそのぐらい真剣なことだった

んだろうな。子どもの頃の真剣な気持ちとか、どんどん忘れていくね」

「うん。まあでもとりあえず、無事に帰らせられて良かったよ。試合も見に来てくれるといいね」

「うん、ぜひ」

「さーてまいちゃんが、二人の恋のキューピッドに、なってくれるでしょうか」

「……二人の恋の？」

「……大地君それボケだよ。ボケと言つて」

「なんの？」

ダメだ。

よーーーーーく思い知ってるはずなんだけど、相
変わらずダメだ。

「ナナちゃんと、三十六くんの」

「……あ。ああ。あれ、マジメにそういうことだった
の？」

「みんなでさんざんいじくり回していたじゃない！」

「いや、それはだからギャグにして遊んでるもんだと
……」

「火のないところに煙は立たぬ、ちよつとでもそうい

う傾向がなきや、ネ夕にもなんないよ。見たでしよ席座る時。こっちの四人テーブルに、窓際ナナちゃん座って、三十六くんその横座って。躊躇いもなく」

「それは僕が居たからじゃないの？」

「ちーがーうー。」

それでメニュー見て、三十六くんが『これ？』ナナが『ん』。あれ絶対一回二人で来てる。こないだ二人でどっか行つたの、たぶんあそこ」

「えー、そうなの？　よく見てるねー」

「しかも、前に来てることを、私たちに言わないのよ。普段ナナそうじゃないでしょ？」

『はっはー、そこウチも行つたことあるでー！　めつちや美味いでー！』」

「それはそうだな……」

「でまたお料理がサーブされると二十六くんがササツ、ササツとナナちゃんの前に丼やお皿並べてあげてね」

「あれは、あいついつもああだから」

「そか。」

まあ、二人とも、まだ本格的に意識するという段階ではないようだけどね」

「なあんだあ。じゃあ、僕が気づかなくても問題ないじゃないか」

「んなことない。

大地君チームリーダーでしょ。細かいところまで気がつかなきや」

「サッカー以外のことまで無理だよお」

ちよつと甘え拗ねみたいな口調されると、弱い。

異様に可愛い。

くやしい。

「……そおかあ。うまくいくといいねえー」

「ふふっ。そうだね。

本人たちどう思ってるかわからないけど、めっちゃくちゃにお似合い、だよね」

「うんー。服屋さんで言ってたけどもうあのまま二人で舞台に出てそうだもん」

「しつくりくる、っていうのは、だいじだね」

「だいたいそういう時は、うまくいくね。なんに限らず。」

……女の子も、恋の力でパワーアップ、とかするのかな？」

あら、珍しいことを。

てか目の前にそのこれ以上ないサンプルが居るのに、
わかりませんかその答えが。

「そりやもちろん、するよ」

「じゃあいいね、ナナのコンディションがいいと、ウ
チの攻撃は捗るよ」

「またそんな言い方するー。サッカーと恋路、どっち
がだいじなの」

「僕にとってはサッカーだよ」

「いやそりやそうだけど。」

大地君、あんまり思ったことズバズバ言わない方が

いいわよ」

サッカーのことになると、スイッチが入っちゃうのよね、この人。

「……でもそうだね、ウチは、ナナに頼りきりのチームだから」

「うん。負担を軽減したくて、今度はああいうシステムを組んでみたんだけど」

「うーん」

「あそうだ美緒に聞こうと思ってたんだ」

「なに？」

「ナナってよく脚をケチるじゃない。あれ、なにか原因があるの？」

「ああ」

サボると言うと言い過ぎだが、攻撃で一仕事終わるとかなりさっさと歩いて戻る。繰り返すがナナは攻撃の司令塔であり、チームで一番巧い選手であり、可能性が低くともボールがオフプレーになるまでは走り回って欲しい。

「……トラウマ、っていうと言い過ぎかな、全国出た時にね」

「うん」

「点いっぱい取られて、こっち当然ゼロで、なんとか一矢報いたくて、ナナワントップ前残り、ロングボール放り込んで逆襲で1点でも獲ろう、って残って貰ったのよ。後半のもう後半、三〇分は超えてたかな……」

「去年の陣容なら、リーズナブルな決断だね。流乃やマキではフィニッシュが不安だし」

「そうそう。」

で、やっぱりチャンスが来たのよ。蘭ちゃんが炎のスライディングでボール獲って、私にすぐくれて、必殺のカウンター炸裂！」

「おお」

「ナナが得意のドリブルで運ぶ、運ぶ、運ぶ。GKと一対一、ナナなら外さない、やった、1点だ……と思ったその時」

「うむ」

「転けちゃって。GKをかわすフェイントを入れたところだ」

「あらら」

「吉本新喜劇だったよ。それ見て全員でコケた」

「そうなるねえ……」

「ナナには珍しいミスというか、要するにもう脚が残ってなかったのよ。最初からガツチガチにマークされて。去年のウチ、彼女だけ殺してしまえば何もできないチームだったから。それ外そうともがいてもがいてもがいて」

「そうか」

「頭ではそれはわかるんだけど、ガツクリはするのよ。そこまでは、縦一本ナナに通れば、1点ありうるぞ、というのを心の支えに戦ってたから」

「目の前で『それも無理です』と本人に身体張って証明されちゃね」

「そこでみんな折れた。私も手叩いて怒鳴ってたけど、実のところ折れてた」

「うん……」

なるほど、それで自分だけは、最後まで脚を残そうと」

「だと思う」

「むしろ今年こそ、どんどん売り切れてくれていいんだけどな。替えも居るし」

「ナナちゃんそれは嫌がるなあ」

「まあそうだけど。」

あるいは私達を信頼しろ、とキャプテンが後ろから
ケツを叩く」

「うーん。」

私より、コーチじゃないかな」

「うーん。」

心の壁は」

ふと、真面目な目になった。

自分のことを思い出しているのだろう。

「……自分で壊すしかないからね」

「……ノックする人は、居ていいと思う」

確かに。

それはしかしたぶん、キャプテンでもなければコーチでもない。

「……三十六か」

「でもまさか空堀君にずっとピッチサイドに居てもらうわけにもいかないしね」

「そうだねえ。漫才が始まりそうだしなあ」

「『走れー』」

『やかましいわー』」

「うわ、やりそう……ははははは」

「ふふふふ……」

空堀君みたいな人のことを、なんて呼べばいいんだろう。本人言ってるみたいに『雑用係』じゃかわいそうじゃない？ えーつと、『お世話係』じゃ変だし、

『スタッフ』じゃ曖昧すぎるし」

「『プロデューサー』じゃないの？」

「あ」

それだ。

なぜそんな便利な言葉を忘れていたのだろう。

「じゃこれから空堀P、略してカラPで」

「三十六それはさすがに嫌がるんじゃないかなあ……」

「カラPだよ？ ビールのおとも、って感じで、美味しそうじゃない？」

美緒はだいたい物事を美味しそうかそうでないかで二分しすぎる。

まあ、実のところそれが、彼女にとっては正確な分け方なのかも、しれないが。

「ざとP？ 36P？ わー、ねね、36Pチーズつて食べごたえありそうじゃない？」

「あはは、なにそれ。細くない？ 扇型が」

「ちがうの。一段6Pだから六段あるの。バウムクーヘンみたいに」

「そんな塊そんな切り方じゃなくていいじゃない」

「なにを言ってるの大地君、いまはチャーシューだつて切れてる時代なんだよ？ あ、やつぱチャーシュー

麵も食べておいた方がよかつたかな」

「また行けばいいじゃない」

「食べたいと思つた瞬間が、食べごろなんだよ！」

「いまから引つ返す？」

「……」

「考えなくていいだろ、おなかいっぱいだよ！　どんだけ食べたのさつき！　八人居たからつてラーメン屋さんで三万円はおかしいだろ!？」

「じょーだん、です」

目が笑つてない。

食い物のことに関しては何談に思えない。美緒だからな。

「……やっぱり一人二杯から、って最初の設定が甘かったんだよ、あれ三杯にしておけばこんなことには」

「最初からおかしいよ」

「大地君は身体動かしてないから」

「今日はサツカーしてない」

「したよ。」

心の中で」

「それカロリー使うの？」

「身体よりも」

「ほんとうかなあ……」

うんうんうん。

なんですかそのドヤ顔。

「あそうだ大地君、こんどカラPが言ってたケーキ屋さん行ってみようね、並んで入れないぐらいおいしいって」

「いまは食べ物の話はもうやめてー」

「『エスPOWER』にも負けないお店、ってなかなか

無いよ？　また私の知らないお店を知っている……空堀三十六、悔りがたし」

「恋のキューピッドか……」

僕にも来るのかな」

「来ない来ない、来ない。来ないね」

「えー、どうして？」

「どうして・も！」

「えー？　美緒、ひょつとして意地悪言ってる？」

「イジワルは大地君ですっ！」

「はあ。」

ここは、犬も喰わない。

■ 第四幕

● 一場 準備

へ……あー遅いなもーホンマなにやってんねんやろー
……

と、口に出しては言わない。どんなに焦っていてもイ
ラついていても、それを表に出してチームの動揺を誘

ってはいけない。プロデューサーはアイドルを心置きなくクリエイティブに専念できるようにするもの。

三十六は、あらかじめ仕込んだ「三つのモノ」を待っていた。

——丸珠公園第三球技場。

ミラクルズがミラクルズになった、思い出の、といつてもそれはついこないだのことなんだけど、のグラウンドである。ほぼ土で申し訳程度の芝生は、くたびれたサラリーマンの頭髪のように儂い。

ミラクルズ、としては初の練習試合である。

本日の相手は地元そこそこ強豪校をご用意した。なによりこの「そこそこ」というところが難しい。あまり強豪になると年度初めの新チームとはいえ昨年の主力が残っていて強くて話にならないし、といって一応こちら前年は全国に出たチームがベースになっており、そのへんの楽しくやつてる部活でもまた、話にならない。

しかし青春はよくしたもので、そこそこの高校チームにとってはミラクルズはたいへん都合のいい相手らしく、三十六がおそろおそろコンタクトを取ると即諾

してもらった。選手権やインターハイで当たたら「ない」というのも手の内を晒さなくてポイントが高いらしい。

集合は試合開始三〇分前、相手チームはすっかり準備万端、こういうグラウンドであるからユニフォームの上からジャージを着てきたもので、脱げばすぐアツプ開始。

おお、黒基調でなかなかワイルドではないか。

フフフ……敵役にピッタリだぜ。

さあ俺たちミラクルズの、正義の味方っぽいユニフ

オームを見よ！

……と言いたいところなだけで、ど。

まだ私服制服入り乱れ。

待ってるモノ一つ目は、ユニフォーム。

この日に新ユニフォームを無理矢理間に合わせようとして、当日朝できあがりの現地直接受け取り、などという無茶なスケジュールを組んでしまった。

試合開始予定一〇分前になると、住吉古都、マネージャーは気が気でない。相手の女性の顧問先生がちら

ちらこちらを見てるのも気になる。

「……あのう、空堀せんぱーい」

「はいなんでしょう辣腕マネージャーこつとん先生」
「万が一を考えて、旧ユニ着てもらいます?」

「いや、あー」

一応事故でも起きたことを考えて、各自に旧、というか現行ユニは持って来てもらってはいる、が……

「着替え大変だろうし、ギリまで待とう」

「もうギリですよ。着替えはまあ、女子はタオル一枚でなんとかする技術がありますので」

「いや、んー……」

正論である。

俺が逆の立場なら、そう言ってる。

しかし、新ユニはカッコよく華々しくお披露目した
いではないか。

「巖流島じゃあるまいし、待たせていいことないです
し」

「うん、そうなんやけど」

大地の方を見ると、指揮官は思案げにグラウンドの方向を向いている。いつもそうだが、特にピッチサイドでは何を考えているのか読めない。

その視線の先では、相手チームが柔軟やジョグに勤しんでいる。われわれといえ、たとえば可憐と千里はボール使ってじゃれており、タンクトップ姿の蘭は一人でラジオ体操をしてる。はなこに至っては文庫本を読んでいる。

定刻が迫るのに焦っているのがマネージャーだけ、

というのが、信頼の証というか、ノンビリしてるというか。

「ではわたくしがマネージャー権限で準備を」

「そんな権限あるの!？」

「あるかどうかコーチに聞いてみます」

「……あーごめんごめんごめん!! 遅れてすまん! ごめん!」

二つ目に待ってたモノが、先に来た。
スタジアム・アナウンサー。

飛び込むように走ってきたのは、放送部の高安和輝。三十六の友人で、今日のスタアナをお願いした。もちろん二つ返事である。もともとが「マイクの前でしゃべれば金を払ってもいい」という口から先に生まれた星人。

「アーム・ソーリー！」

「髭ソーリー。だいじょぶまだ始まってないから。今日はよろしく！」

「まかせて！　じゃあ早速！」

肩掛け鞆からやおら取り出す小型ビデオカメラ。

「さ！ 試合前ピッチリポートです、ピッチサイドの高安さーん！

はい高安です！」

さっそくレポートが始まった。バッ、とそのカメラを古都に向けると、

「マネージャーの住吉さんです！」

マネージャー！ 今日の抱負は！」

「えっ、私ですか!? あ、はい、力一杯サポートします！」

「具体的にはどのようなことを！」

「あ、えーと水分を用意したり、がんばれーと声援を

送ったり！」

「勝てますか！」

「勝ちます！」

勝つてくれると、信じています！」

「期待しています！ テレビ・ラジオの前の全国のみ
なさんに一言！」

「はい！」

強く！ 優しく！ 美しく！

カワイイ・イズ・ジャステイス！

めくるめくガールズ・アンド・フットボール、
ミラクルズに、貴方の清き一票を！」

「ありがとうございます！」

「こちらこそ！」

仕込んでないよ。ぼく仕込んでない。
この子もなかなかやりおるなあ……
無言でマイク突きつけるので指で×。俺は黒子。大
地を指す。飛んでいった。

「……あのー」

わ。相手の顧問先生だ。怪訝な顔で、
暇そうな俺を

捕まえる。

「そろそろ」

「あ、はい、あのですね、ちよつ、と準備に手間取りまして、あの、えー」

「わーっ、なんだありやー！」

吹田ちゃんの素っ頓狂な声が響いた。その方向を見れば、おお、待ちわびていた一つ目、そう新ユニフォームが。

……うわあ。

僕ね、マイクロバスもお願いしたんですよ。着替え場所兼用になるかなと思つて。そしたら来たのがスーパーハイデッカーの二階建て大型観光バス、ピカッピカの芸能人が深夜番組で東京観光に使うようなヤツ。またこれがロゴなど一切なしのグロスブラックでテカテカと仏壇のように輝いてるのが不気味というかド派手というか。

その巨体を球技場横にむりくり収めると、若い運転手さんが飛んで来るのと、俺が飛んで行くのが、途中でごつつんこ。

「……空堀三十六様ですか！」

「はいそうです、おつかれさまです！」

「遅くなつて申し訳ありません！　これ入れる入り口が公園に一つしか無くてですね」

「問題ありません、早速使わせてもらいます、こつとーん!!」

「はあい!!」

「ユニ中にある、着替え手伝つてー!!」

「はあい!!」

みなさーーーん！　ユニ来ましたあーーー!!　中

で、ダッシュで着替えお願いしまーす!!」

わーっ、と歓声を上げながら吸い込まれていくみんな。

肩の荷が下りた。ああ心臓に悪い。

顧問先生にあと一〇分待つてくれ、と告げるとポカインとしてた。大地は一瞥して表情を変えずにピッチに目をやる、が、敵陣もポカインとして動きが止まっている。運転手さんが汗を拭きながらまだ平身低頭。

「……いや本当にすみませんでした、申し訳ございま

せん」

「……西九条家の方ですか？」

「はい、叱られます……」

「言いませんよ。その代わりみんなにも内緒ですよ」

「はい、それは伺っております」

「どうぞ休んでください。ご苦労様でした」

「いえとんでもない。ビデオ撮ります」

手にしたゴツいボストンからでつかい業務用っぽい

黒いビデオカメラが。

「え？」

「お嬢様の勇姿を撮影してこいと」

「あー……三脚に置いて回しっぱ、ってできますか」

「叱られます」

「いや、それでおねがしたい。事情はこちらから伝えます」

「そうですか……」

私個人的にも楽しみにしてきたのですが。お嬢様の
「勇姿」

「僕のスマホ貸しましょうか」

「いえそれでしたら私もありますので」

「あんまりお嬢様ばかり狙うと、お嬢様に叱られますよ」

「ご褒美です」

さすが名家だ。使用人にも余裕と諧謔がある。
なんて言っているのかなあ……

——乗降ドアが開いて、真っ先に飛び出してきたのはやはり、可憐ちゃんだ。グラウンドへ駆けながら、

「空堀先輩！　ありがとうございます！」

「着心地どう!？」

「最高です！」

「がんばって！」

返事は強く握りしめるグー。

「KALLEN 9」

カモシカのような脚、跳ねるポニーテールがまったくもってカッコイイ。

新ユニは、ピンク。

シャツが鮮やかなピンクに、袖と襟に濃い目のピンクでアクセントが入っている。背番号と胸番号は白、グレーの縁取り。右胸に流れ星をかたどったエンブレム。特に今まで決まっていなかったので、勝手に作っ

た。きつちり目の折り立て襟が可愛い。

パンツは白。アクセントラインがシャツと同じ色で入る。右下の番号は逆にピンク。ソックスも基本白。太めのピンクのラインが入る。

シンプルすぎるかな、と思ったが色が派手なのもあって、想像よりはるかに華やかだ。

「……カラちゃんこれピンクすぎない？　だいじょうぶ？」

「るーちゃん意外に似合ってるよ！　大丈夫！」
「意外って。」

と言いつつ半袖を肩までまくる。流乃のは彼女のこの癖のために、ちよつと袖ぐりに余裕がある。金にかせて、全員サイズを計つての特注品だ。

「これ、あたしんでいーんだよね？」

「RENAULT 5」

「他誰が居ますか。バイク乗ったはると聞いてちよいと洒落利かせてみました。気に入らなきや換えるよ」

「いーよ。こだわりないし」

「ルノー5・ターボ全開って感じで」

「古いなー。むしろ無敵ウィリアムズ・ルノーのレッドファイブ？」

「ナイジェル・マンセルつか。

それも古い！　しかし速い！」

「ちよつと走ってくる」

「がんばってー！」

脚自慢の彼女用に、パンツは短め。ネコ科の猛獣のようなしなやかな白い脚が、目に見えないほどの速さで回り始めた。

「……空堀先輩ー」

「おう葉っぱちゃん。どう？」

「……どう？はこちらですー」

明日葉ちゃんは微笑んでくるり、と後ろ向き。細い背に、

「LEAF 17」

「イケてる！ 気に入った？」

「ありがとうございます」

深々とお辞儀をして、につこり。

ああ、天女だ。

そりゃあ西九条家の下僕共が命でも投げ出すわ。

「肩の力抜いて、がんばってね！」

「はいー！」

ツヤツツヤの目に痛い黒髪を風に流して、明日葉様は駆け出した。

——たとえユニといえども新しいお洋服。みんなわいわいきゃーきゃーはしゃぎながら次々に降りてきて、ピッチへ駆け出す。最後に、

「……あんた、これ高かったんちゃうん？　代表で使うてんのも同じモデルやろ？」

「まあねー。でも心配は要らんよ」

「ホンマかいな。」

「似合てる？」

「桜の花のようだよ」

「ええかいな。まーせやけどあれやな。サイズはぴつたりやけど、画竜点睛を欠くというやつやな」

「ん？」

「ウチはいつもな」

「ナナさーん！ これ！ 渡し忘れてましたー！」

こつとんが走ってきて、手渡す、白いリストバンド。

もちろん新品。

「ああなんや、用意してくれてたんか」

「もちろんですよトレードマークでしょう」

「汗かきやねん。目に入ると的確なパスが出せん」

ピシッと着けると、両頬を両手で二つ張った。

パンパンッ！

「おすもうさんみたい」

「『横綱』て呼んでええで」

「『大関』がええんちゃうか。伸びしろがあつて」

「そうしとつか。」

誰が小錦やねん」

「小錦関なら人気・実力・インテリジェンス、どれをとつてもゆうことなからう」

「ホンマ乙女心のわからんお人やで。

あれか。わざとか。好きになつた子をいじめる小学
生か」

「そや」

「……」

「……」

「……」

「……」

「せ、せやけどあれやなあ……」

ナナは、遠い目をしてアップにいそしむチームメー

トたちを見た。

みんな笑顔だ。そしてハゲハゲとはいえ緑の芝生に、狙い通り、ピンクが映える。春の草原に、咲き誇る花、一六輪。

「強そうか」と言われると正直微妙だ。

しかし、「楽しそうか」と問われれば、これ以上は望めまい。

「……夢みたいや」

ウチのやりたかったことは、作りたかったチームは、

全国へ行くチームではなく、こういう、チームやったんや。

しかしそんなファンタジックな気分を打ち砕く、乙女心のわからぬお人。

「なに第三者視点になつとるんですか。夢や無うて現実です。あなたが引つ張つていかねばならん、現実です」

「……言われいでもわかつとるわい。

みてみい、爆勝したるで」

「爆笑されないようにね」

「フン。

……おおきに」

ナナ、最後小声でつぶやいて、駆け出した。

三十六、思わず頬が緩む。誰の感謝が欲しかったか
といえば、チームを作った人のそれだった。

スタアナの、バカでかい地声が響き始める。

『……さあウォームアップも宴たけなわ、いよいよ始
まります、新生ミラクルズの大冒険、きょうが船出の
一戦です！ スターティングメンバー紹介に移りまし

よう、

ゴールキーパー！ 心の守護神！ 守口—————

ー……

ほらかラちゃんこつとんちゃん、コールコール！』

「あつ、はい！」 「おうすまん！」

『守口—————！』

「「しのぶ!!」」

『ナンバーワン！

ディフェンダー、右サイドバック！ 戦えお嬢様！

西九条—————……』

「「あすは!!」」

いつかどこかで、電光掲示板に出る顔写真と名前を
観ながら、観客席の大勢の、初めて観た人たちがコー
ル&レスポンスをしてくれる……ようなことも、ある
んだろうか。

それはまだわからない。

でも、目の前の華やかな絵を見ていると、できない
ことでもなさそうな、気もしてきた。

●二場 迷い・困り・怒る

上町大地は、迷っていた。

現実には厳しい。

さすがに新システム新メンバー、試合開始すぐ、練度不足が露呈する。

センターバックのもと、蘭の二人は、「並べ」と言われてそれを意識すると、どちらが相手FWへ突つか

かるかお見合いする。サイドバック、左の流乃はいままでウイングだった癖が抜けず、前がかって守備がおろそか。と思えば、右の明日葉は緊張からかべったり持ち場を動かず、ボール奪取にもボール回しにも参加できない。

中盤では、美緒が不安定なDFラインが気になって、中央の低い位置から動けず、持ち前のどこにでも顔を出す激しいモビリティが発揮できない。エレーナは真面目過ぎて、とにかくボールホルダーに突つかかっていつてはパスで翻弄され無駄走り。ありすはまだ、自分なりの攻撃パターンがまったく無く、パスが入って

も無理なドリブルを潰されるか、パス先を探しているうちにボールロスト。

頼りにならない中盤を見かねてFWの可憐が下がって、自らボールを奪う。しかしそれをどこへ出すかというところはない。胡桃は真ん中に張っているが、パスを当てるとその瞬間奪われた。ポストプレーと一口にいつても、今日言われて明日できるような簡単な仕事ではない。

そしてナナ。

右サイド高めの広大な仕事場を与えられたのはいいが、ただっぴろすぎて持て余す。ワイドに張ると、ボ

ールを貰つてもひとりで突進せねばならず、そうなる
と「相手はユース代表だ」と把握している敵陣が三
人・四人・五人と人手を繰り出して止めてくる。とい
つて、真ん中寄りに位置すると、空いた右サイドの空
間を敵に突つ走られ、守りを明日葉一人にまかせるわ
けにもいかなので守備に帰り、自陣に押し込められ
る。

ギャップを作られ、斜めに走られ、サイドを突かれ、
挙げ句の果てにはカウンターまで食らつて、またたく
まに4点を失つた。

本日いちばん可哀想なのはGKの忍で、てんやわんやと走り回るが、こういう時に限って日も悪い。どうにもならないノーチャンス・シュートが雨あられと降り注ぎ、さながらGK練習のよう。逆にまあよくも4点ですんでいる。忍でなければもう倍ほど取られていてもおかしくない。

なんだか巨大なチームバスは来るわ、派手なピンクの最新新品ユニをまとうわ、監督は美男子だわ、全国行きチームだわ、ユース代表は二人も居るわ……でビッツた敵陣が、いまやのびのびとプレーしている。

対するこちらは、どんどん元気が無くなっていく。

前のあれは、フロックだったのかなあ……

いつものやり方に戻して欲しい……

なにをどうやったらいいのかわかりませーん……

ベンチではなこと、マキがキレた。

「……ちよつとコーチ！　なにか策ないの!？」

「アタシ出して!」

もちろん大地は意に介さない。硬い表情を崩さないまま、腕組み、仁王立ちで戦況を見つめている。

〈……さすがにムチャか〉

この試合、大地が意識して観察していたのは、例のカウンターかポゼッションか、の部分である。

カウンターは強固な守備が無ければ始まらない。しかしこのチームはどうも意識の底に「耐える」「我慢する」が無い。あるいはそういうものを美德であったり長所と捉えたりすることさえ、無いのかもしれない。そういうえば普段の振る舞いからそうだ。

楽しいは正義。

ガマン？　なにそれ南国の通貨？

ピッチに入ったら性格が真逆になる、なんてことは
そうそうは無い。

つまりあまりカウンター向きではない。ということとは、
さらにその先、「カウンターとポゼッションの融合」
などという高邁な理想を抱くのは、ムチャに過ぎる。

しかし、といってポゼッションで自分たちの意図を
ガンガン押し付ける、というタイプでも明らかにない。

〈……なんなんだこのチームは、いったい〉

……とりあえずその疑問はさておく。いまの状況を
打開せねば。

これだけいい選手が揃っていて、ここまでボロボロ
になるのはちよつと想定外だった。

いま、何がいかんのか。

サッカーは攻守が一体である。攻撃がキレてると守
りも楽だし、守りがビシツとしてると攻めもバラエテ
ィや遊び心に富む。つまり4点取られたのはディフェ
ンスだけの責任ではなく、

〈……攻めか〉

攻撃は自分の意図を押し付ける作業である。であるから、さすがにある程度の指針、方向性がないと、みんなで何をどうしたらいいのか、共通理解が持てない。それこそ、

「ボールを持ったら可憐を探してパスを出せ」でもいい。「戦術誰それ」というやり方で、プロ、ビツグクラブだつて煮詰まったらやってる。

〈……最悪、それでも、いいのだ、が〉

あまりにやぶれかぶれすぎる。

それならまだ、慣れ親しんだシステムとメンツに戻して、とにかく試合を作った方がマシだ。4点は追いつくに厳しいが、とにかくにもサッカーにはなるだろう。いまベンチでクサクサしてる四人も、出せば納得するはず。

もちろん、今日は修練の一環と割りきって、このままツッパるのもアリだ。連携は実戦でしか深まらない。部員が少なく紅白戦でフルメンバー同士の戦えない我々は、特にそうだ。ただしこのままだと追加点も取られそうだし、得点の気配もない。おそろしくつまら

ない一日になる。

ちらりと時計を見た。前半が、終わろうとしている。
上町大地は、迷っていた。

§

難波鳴海は、困っていた。

新しい仕事場は広すぎて、まるで目配り気配りが効いて身体にフィットする2LDKから、学校の体育館

に引つ越したような気分だ。

広い、というのは選手同士の距離感が悪いということ。

中盤ダイヤモンド型4―4―2右サイドハーフのナ
ナの隣には、

- ・ 斜め前にFW胡桃
- ・ 横にトップ下あります
- ・ 斜め後方にボランチ美緒
- ・ 後ろにDF明日葉

の四人が居る。ところがこの四人が、それぞれも不慣
れとナナへの遠慮からか、右サイドに出てこない。と、

広大なスペースにぽつねん、と独り取り残されることになる。

といって自分が中央寄りに場所を移すと、そこには交通渋滞が起きており、攻めも守りもやりにくい。その上、空いた右側を相手に使われる。

〈……うーん〉

中盤ダイヤモンド型4―4―2なら十分経験があるので、過去の事例を思い出す。やはり中盤選手四人の活きの良さ、ダイナミズムがモノを言う。さらにでき

れば両サイドバックもどんどん前へ走り、両FWもウイングばりにサイドに張り出してボールを受けて貰え
ると、そこを起点にいろんなアイデアが湧く。

現にこの不慣れな我がチームでも、左サイドでは前
へ前へと暴走する流乃と、左タッチライン際まで開い
てボールを受けようとする可憐が居るので、エレーナ
は甲斐甲斐しく二人のサポートに走り回っている。完
全に死んでる右よりはずっと活気がある。あれだ。

といつてももちろん、右でそこに対応する明日葉と
胡桃を責めるわけではない。違う役割を与えられてい
るのだから。

〈……アシンメは、難しいのとちやうかなあ……〉

アシンメトリ、左右非対称。左右でアタック・ディフェンスの形が違うシステムで、選手の個性を活かす、といえは聞こえはいいが、話は二倍複雑になる。

特に一点、どこが不満かといえは、可憐が遠いことだ。

間に胡桃が挟まっているので、グラウンダー・パスを出すにも角度が無いし、ショートパスを繋ぐチャン

スも無いし、浮き球を送るにも遠い。

言うてはなんだが、このチームは少なくとも攻撃に
関して言えば、ウチと可憐のチームや。なんでそのホ
ットラインを繋がりにくくするのか。

しかし上町大地はド素人な、サッカー経験が無いが
成り行きで部活顧問になった教育大学出たてのハンサ
ム先生ではない。よくよくわかつて、こうしている
わけである。

だからなおのこと、解せん。

特にありすを見ると、可憐や流乃をあまりにも

活かせておらず、「いいから替われ」と怒鳴りたくなる。

そや。ウチがあそこにいるだけでも、少なくとも攻撃はこんなヘナチヨコやなかったで。

しかしそれも言ったりやったりするのは憚られる。

大地がこのチームを掌握しようとしているのだ、ウチのできることは、彼の意にそった形で、チームを活性化することだろう。ウチがウチが、と言い出せば去年に逆戻りで、それでは、成長は見込めない。

「……ナナッ！」

「おう！」

珍しくキャプテンからボールが入った。ええいままよ、テキサスの砂漠のように荒涼たる右サイドを、アテもなくドリブるライカ・ローリン・ストーン。

得たり、とばかりにワラワラと、ゾンビ射撃ゲームのように敵が湧いてきて、捌いて、捌いて、捌ききれずに、潰された。

……やっぱり独りでは、無理やん。

「デифフェーローンス!!」

言わでもの指示を叫んで美緒が後退グツシュするのを転がったまま観ながら、あいつあエライなあ、と他人事のように思った。一年生にいま何をするかを教えてあげているのだ。

キャプテンというのはああいう、常になんでも我が事のように思える人間でなければならぬ。ウチや向いてへん。

などといま考えなくてもいいことを考えながら、ゆつくりと立ち上がる。

〈……どないしたもんか。だれをどう使うか……〉

難波鳴海は、困っていた。

§

空堀三十六は、怒っていた。

なんだこれは。

前の試合で見た生命の爆発のようなイキイキネスはすっかり影を潜め、一人はギク・シャクとまるで

集団ロボットダンスを繰り広げている。いやむしろ最近のAIとネットワークで武装したロボットの方が流麗かもしれない。

原因は簡単だ。おたがい、気を遣いすぎている。

新しいシステムだ、新しいチームだ、新しいコーチだ、ということ、頭の中がいつぱいになって、敵ではなく頭の中のイメージと闘い、ボールではなく頭の中のイメージを取り扱っている。当然、現実とのギャップが生じて、そのたびごとに身体が止まる。

攻守切り替えが一点、ボールを奪った・奪われた、その瞬間に切り替わるサッカーというスポーツにとつ

てはこれは致命的だ。

もつと獲物を狙う野獣のように、本能でボールを追わねばならん。

そんなこた生まれてこの方インドア派、の俺でもわかる。

しかし当事者になるとむしろ見えないのか、あるいは見えてもなにかを我慢しているのか、大地は動かない。

そうそう、ベンチもダメだ。おとなしすぎる。届く届かないは別にして、喚き散らした方がいい。檄を飛

ばす、叱る、攻撃や守備のサジェスチョン、叫べることはいろいろあろう、特に今日は。

ああそうか千里を除く四人はレギュラーだったんだ。まさか調子が悪い方が出番が回ってくる、と考える性格の悪いのは居まいが（確証はない）、逆に自分がプレーしているかのごとく試合に入り込んでしまつて、客観的な目で観られていないのかもしれない。

こういう時こそ俺がですね。

無理ですね。

なんといつても実績がない。素人の方がわかる真理もあるが、それを玄人が聞いてくれるとは限らない。話を聞いてくれそうな玄人といえは……ナナ。

そうだ、あいつだ。

あいつが悪い。

なにを思っているのか考えているのか、今日のあいつはまさに「右往左往」という言葉をゼスチャー・ゲームで表現するように、ヨロヨロヨタヨタと歩いているだけだ。たまにボールを持つても自信のないドリブ

ルで簡単に潰されている。その他のアイデアも無い。
なんであんなに。

あいつが今日の象徴で、他はまさにあいつに引きずられるようにああなっているんだ。

……思ったより「氣い遣いい」なんかな。

ホントは言いたいこともやりたいこともあるけど、
これは新しいチームなんで。

んなことあるかあ！
サッカーやってんねんやろ！

戦え！　アホ！

……などというと、喉輪で絞め殺されかねない、の
で。

こつとんあたりに代わりに言ってもら、いや、あい
つも立ち回りが異様に巧いからな、そんなカタキ役は
やってくれんやろう。やはり白い目で観られても俺が

……

〈……しかし〉

と、三十六はふと冷静になつて、思う。

へ……サッカーてのは、いやサッカーに限らへんけど人間つてなあ、ふしぎなもんやねえ……

同じ一人なのに、あまりに鮮やかで衝撃的で、いっぺんで惚れ込んだ、あのチームとは、まったく真逆のチームだ。

こんなチームなら俺だつて、一生懸命サポートしようなんて思わなかっただろう。サポーターみたいな人たちがまだできてなくてよかった、こんなチームは見

せられない。

あ、マズイ、これ西九条さんご覧になるんか。

うわあ……サッカー詳しくないといいなあ……いや
スポーツ好きやったらわかつちやうかなあ……いや人
生経験が抱負やったらバレちやうかなあ……孫バカで
あることを祈ろう。いや祈らなくてもそうなんだけど。

では、あのチームと何が違うのか。

おそらくは、というより、同じ人間で時間がそん
な経ってないのだから合理的に導かれるその理由は、
「気持ちの持ち方」。

ただひとつである。

〈……リーダーが要るね〉

もちろん上町コーチがそうなのだが、ピッチの中にも必要だ。

美緒キャプテンはピッチの中ではむしろリアクションがとても上手な人で、自分の意図を無理に押し付けたりしない。しかしスポーツなんでも、特にオフエンスの場合は、

「これでどやあ！」

という裂帛の気合いとリスクを恐れぬ蛮勇が……

そりややつぱり、この中では、「どや」という人しか居まい。

あのでかいケツを、
うわあらためて見るとホンマにでかいな。低重心は
ええこつちやけども。

ケツを叩くのは……

へ……遅い！ いやこんなこと言うたらアカンねんけど、遅い！

空堀三十六は、怒っていた。

●三場　ハーフタイム

ピーツ……

『……さあ前半終了ー！　4点を奪われた我らがミラクルズですが、試合はここからです！　サッカーは一五秒あれば1点入る競技！　一分あれば十分逆転できます！

『イスタンブールの奇跡』という歴史的な大逆転勝利もあります！　さあミラクルズ、その名の通り、奇跡を

起こせるか！』

どこからツツコンだものやら。

まず一五秒で確かに1点入るがその一連の決定的プレーに持っていくために時間が掛かるわけで、だからこそそのロースコア競技である。

一分は一五掛ける四の六〇秒で、4点では逆転にならない。

さらにUEFAチャンピオンズリーグ04―05決勝、リヴァプール対ACミラン、ハーフタイムまで0―3とリードされたリヴァプールが後半に追いつきPK戦

まで持ち込んで逆転したのが「イスタンブールの奇跡」だが、差は3点である。

かなり元気なく引き上げる選手たち。古都が飲み物とタオル、保冷剤を配って回る。三十六も手伝った。敷物のブルーシートはダレる選手で埋まり、まるで魚市場のマグロ競り。

「……ごめんねーシート狭くてー！　こんどはもつと持ってくるー！」

努めて明るく振る舞う三十六だが、「うえーい」というような疲れ切った返事しか帰ってこなかった。まだ「狭い」と叱られる方がマシか。

登校前のベッドの中のようにハーフタイム一五分のうち一〇分が瞬く間に過ぎ、大地が集合を掛けた。ヨロヨロに立ち上がる選手たち。

と、ナナがそつと、三十六に寄ってきた。

「……あんまりカッコエエとこ見せられへんで、ごめん」

「……」

軽く頭を下げられて言われて、面食らう。
でもそれで、カチツ、と火が点いた。

「……なにを、アホなことを、おっしやる」

「え？」

「これから、5点獲って、逆転して、くれるんでしよう？」

「……いや、相手そこそこ強」

「するよな!？」

「……」

カチン、と音がした。

「……するよしたらあ、言われんでもやるわいな！」

「おう！ ほなやつてくれや！」

「やるつちゅーてんねんやろしつこいなあ！」

「そらすんませんね。しつこー言わんとわかってもらえん気がして」

「ウチが一番わかつとるつちゅーねん」

「せやな。日本一になるおひとやからな」

「……やかましわ!!」

ホンマどんなん男やで！ 黙ってそこで見と

き！」

「へえへえ、そうさせてもらいますー」

プイツ、と踵を返してズカズカとガニ股で去る。
入れ替わりに古都。

「……憎まれ役カッコイイー」

「はたきますよ。こういうのもマネージャーさんがやつてくれないーんじゃないスカねえ」

「マネージャーは、気分よくやつてもらうことに専念

した方がいいと思いマース」

「ズルっ」

——大地はとりあえず、stay tune に決めた。

丁寧具体的にいま足りない点を指摘し、やるべきアクションを端的に説明する。神妙に聞いていた面々も、「こうしなさい」が降ってきて、いくぶん元氣がでてきた。

軌道修正が効けば、ある程度戦えるかもしれない。ダメなら選手とシステムを変えて、いかにも「テストです」的な雰囲気を出してごまかそう。

後年はどんな戦いでも必勝の気合いで臨んだ大地だが、このあたりはまだまだヌルかった。ひよつとする
とこの戦いでここまで追い込まれた、いや、追い込ま
れたとすら理解してないぐらいピンチに陥ったのは、
新米コーチ・上町大地のせいかもしれない。

大地の言葉が終わると、はなこが一言、

「出てない人の分まで、がんばって！」

といかにも委員長つぽいセリフを吐いた。「あーい」
とやる気があるんだかないんだか微妙な頃合いの声が
三々五々あがつて、ナナ。

「……ちよいええみんな？　円陣組まん？」

おおそうだ忘れていた。ユニ着替えて慌ててたから、
試合前にそれを。

「うん。いいね。じゃあ音頭は」
「ウチにやらせて」

美緒は気づいた、ナナの声が低くこわばっていることに。

怒ってる？ 不甲斐ないチームに、自分に？

ふと見回すと、居た。なんか今日はよくナナちゃんがヒソヒソやってる噂の彼氏が。目が合うと、手刀を前に「すんません」。

いえいえ、とんでもない。

私の方こそ、火が点けられなくて。

自然と微笑みが出た。

ナナちゃんみたいな目標向かって飛んでくような弾

丸娘が、心掻き乱される相手か。よほど相性が、いいのか、悪いのか。

……青春だねえ。

全員揃って、大地と古都も輪に入る。三十六は両手を振って断った。ここがたぶん、境界線だろう。

「……たいへんピンチになりましたが」

肩を組み、額を寄せ合い、本音を言う。

「どんな試合でも、勝とうと思って、戦わなければ、なにものも、得られません。」

こんなに点差が開いたので、勝てるかどうかはわかりません。

でも……」

すう、とひとつ息を吸って、全部吐く。

「勝つで!!」

「「……はい!!」」

「Never Give Up!

Go Ahead!

and!

DO!

「『MIRACLES!』」

ナナらしい、気合いの塊、いや気合いそのものと言った音頭だった。

それは簡単に、伝染する。

というよりも、その声が気魄が、それぞれの中にあるスイッチを、パチリ、と入れた。

跳ねるようにピッチに駆け入る選手たち、両手を叩

き、ピッチを睨んで声を出しながらベンチに下がる選手たち。古都でさえ背筋が伸びた気がして、そして大將。

〈……まったくおつしやるとおりだ〉

これを、むしろこれだけを、言わねばならなかったのに。

僕が。

〈反省〉

ミスは一瞬、
学びは一生。

●四場 エンジン始動

——後半開始早々、生まれ変わったミラクルズが、敵陣に襲いかかる。激しい出足で敵のボールを奪い、二人目、三人目がそれを追い越していく、素早いルックアップでコースを探し、あるはパス、あるはドリブル。押しこむ、押しこむ、押しこむ。

実況の声も弾む。

『さあ左サイド、流乃のダッシュに可憐が開いて待ち

受ける、パス、そして追い越す、リターン、可憐はゴール前へ斬り込む――――……クロスウ!!』

パス交換でフリーを作った流乃、ゴール前可憐へキレイなクロス。いい球だったが、慌てて帰った敵CBに弾き返されて、クリア。

『……届きませんでしたがいいい攻撃でした! ミラクルズの長槍と絶対エースの共演! 左サイド活性化!』

前半の経験と、大地のデイトール修正も効いた。

「これは見込みがある」と感じられると、エネルギーも湧いてくる。

左だ、流乃だ、可憐だ、それをエレナとありますがサポートに走る。そこへさんざんボールを供給しておいて、美緒。

性格が、こういう時は、とても悪い。

顔・身体、どう考えてもまたも高速突破を図ろうとする流乃へロング・パスを送るふりをして、

右。

ズバッ、と音を立ててDFラインの裏側、誰もいな

いゾーンにパスを出す。もちろん拾うのはこの人、難波鳴海。

『……と見せてこんどは右だあーーーーっ！
難波鳴海のドリブル突破ーーーーー！』

すでに全員の名前とポジションと得意芸を（三十六のメモを元に）頭に叩き込んだ高安が、テンションを
かち上げる。

その絶叫に乗るように独り無人の荒野を突き進んだ
ナナ、チラリ、左を見る。

ハーフタイムひとことだけ、胡桃に伝えておいた。

「ウチと可憐を結ぶ線に入らないでくれ」

邪魔だと言いたいわけではなく、パスコースが二つ欲しいと。無言で頷いた胡桃だが、いままきに見ると、可憐の姿が隠れるほどに、ライン上。

ままよ、と思う。さしものクーちゃんでも、FWは慣れてない。いきなり完璧は求められない。よし構わん、クーちゃんでも脚に当ててくれ。

低く鋭くパスを出す。

PA（ペナルティ・エリア）外側をえぐりきつたところからのマイナスのグラウンダー、もちろんDFは

ついていけない。

『えぐった！ マイナス！ クロス！！』

……スルーツ！！』

ボールが来るや胡桃、その長くて細い右足をふい、と上げて、ボールはその下を通る。そして、愛する可憐の元へ。

『……ドン！』

……ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!
』

可憐が勢いそのままにネットまで駆けてボールをG
Kより先に拾い上げ、ダッシュでセンターサークルに
戻る。さあここからだ。

ナナも駆けながら、右拳を握って上げて、胡桃に叫
ぶ。

「ナイツスルー!!」

「ん」

今日のはじめて胡桃が口角を上げた。彼女はネコみた
いに笑う。

『ミラクルズ、1点返しました！　これで1対4！

左、左と使って敵の意識を寄せていきなりの右、どうですか解説の空堀さん！』

「はい？　私ですか？

あ、えー、さすがキャプテン、黒いです」

ベンチから爆笑が起きた。正確に言うと、爆笑してはいけないうと表情や感情を抑えようとして抑えきれず噴出する水蒸気爆発みたいなのが起きた。

「マエストロと呼びましょう。シェフの方がいいかな？」

『必殺料理人ですね！　そして難波選手の見事なドリブル！』

「踊るような躍動感。『ドリブルダンサー』の称号を贈りたい！」

『森之宮選手のナイス・スルーに此花選手のパーフェクト・シュート！』

「はい。どちらも完璧でした。
タカちゃん、見たわかるよ」
『ラジオの前のみなさまに！』

「それは失礼しました。

とにかく完璧です！　これが！　これが、ミラクル

ズです！」

『今後の展望は！』

「勝つでしょう！」

『シンプルにありますがとうございます！

キーマンは？　やはりキャプテンMIO？　エース

可憐？』

「全員がキーマンですが、ひとり上げるなら……難波鳴海です。彼女が前半は楽屋に忘れていた、攻撃のタクトを取り戻しました！」

『なるほど！

ところで空堀さん、最近ちよつと難波さんといいかんじだと風の噂に』

「ガセです。」

「さあ試合試合！」

『おおーつとそうこうバカ言ってるうちにまた繰り出されるローンダロー！ズルいほど飛び道具、和泉流乃が、走る、走る、走る、そうまさに、駆け抜ける喜びーーーーー！』

1点取ると、変わるものである。

もう一発アレやるぞ、とイメージが全員に共有されて、先ほどよりスムーズに迫力を増して、左サイド攻略が進められる。

もちろん相手は同じことをやらせるか、と反省を元にさつきより半歩先・半手先に動いてる……つもりだが、チョーシに乗るとそんなものではどうにもならないのが、流乃の脚。

天性の武器には、どうやっただってかなわない。

ヨユーでコーナーフラッグギリいっぱいまで攻め込んで、ガスツ、と土煙上げて真ん中へのクロス。こんどは胡桃、これは私の仕事、と空を飛んだ。

空を、「飛んだ」。

相手DFから頭一つどころか、上半身まるごと出る勢いで高度を上げると、そのショートカットを振ってボールを捉え、優しく落とす。落とした先もちろん、可憐……

に、GKが勇敢にも飛び込んで、事なきを得た。

「コエーッ！」

ベンチで千里が、言葉裏腹の笑顔、GK目線で叫んだ。

あんなもん繰り返されたら為す術がない。脚でブチ

抜かれて、高さでフリーで撃たれる。パスを選択せず
ヘディングシュートだったら、あるいはパスでも可憐
を信賴して叩きつけるような勢いのあるものなら、フ
ツーに1点だった。

「これ繰り返せば自動的に勝てるんじゃない？」
はなこが半笑いで呟いた。

「……そうはいかん」

ようやくベンチに帰ってきた大地が、腰掛け長い脚
を組んで言った。

「流乃の脚はそう連続使用が効くわけではないので、
あれはここ一番でしか使えない必殺技だ。むしろあれ

をどこで繰り出すか、その戦略が重要」

「なるほど」

いま美緒は、とりあえずモメンタムを引き寄せるために必殺技を二発使った。

さあ次は。

『キックオフボール、簡単に天満蘭が跳ね返す！

そのボールを拾って構えるはまたもキャプテン、さあまた左・流乃か、あるいは右・ナナを斬り込ませるか、あなたのご注文は、DOTCH！』

どちらでもない。

ふつ、とボールを足元に置いたまま、コンマ何秒かの時間を使って状況の変化を見計らって、そうそれはまるで野菜炒めのオイスターソースを最後に入れる瞬間を見極めるように、パス。

真正面。

誰の意識からも消えていた、ありすだ。

ありす受け取ると、さつき大地に言われたことを思い出す。

『いまはとにかく、自分がなんとかしようと思わずに、可憐とナナがどこにいるかいつも把握しておいて、出せる方へ出しなさい』

それならなんとかなりそうだった。

頭の中それだけ考えてて、ボールが来た。

身体が反応する。

背中から来たボールを、右足アウトサイドで、ひよい、とワンタッチ・ノールックパスを、右サイドに放り込む。

『ありす、フリック！

ナナだ！　ナナだ！　ナナだーーーーっ！』

もちろんその先にはナナが突っ込んできており、ボールをトラップするや、ペナルティ・エリアに侵入する。前回と違ってDFは配置されていたが、ありすによつて歪められた時間に彼女はパニックになる。たまらず手を出しナナの胴体に抱きつき、引き倒す。

ズザーーーーッ……

と派手に土埃が舞い上がって、審判をしていた相手の顧問先生、苦笑いしながら笛を吹いて、ペナルティ・スポットを指した。PKゲット。

ナナ、ニコリともせずに取り上がって、倒れているDFを引き上げてやった。

「すみません……」

と謝るのはおのれのファウル。

「ええで」

と一言返すが、むしろ謝りたいのは自分の方。派手に倒れたが実のところこのぐらいの抱きつきなら、振り払って突進する力も経験もナナにはある。それをした

あと角度のないところからシュートをねじ込める可能性と、倒れてPKを取ってもらえる可能性とを、天秤に掛けたままでだ。

へ……ナナ、蹴る？

とキャプテンが口真似で気を遣ってくれるが、遠慮した。

わずかながら良心の呵責があるのと、PKは職人にまかせた方がよからう、と。

『……さあペナルティ・キックのチャンスです！

蹴るのはもちろんこの人、ミラクル・カピタン長居美緒！

さあ追撃の一発を決められるでしょうか！

どうでしょう解説の、三十六兄さん！』

「キャプテンですよ？

どうやって外すんですか。ほらあすこを御覧なさい、キーパーはすでに、ヘビに睨まれたカエルちゃんゲコゲコです」

『おおまさに、アナコンダの前の哀しい実験動物ヌードマウス！』

「カエルや、言うてるやろ」

〈……実況・解説って、うるさいなあ〉

と美緒は思いつつ、でも間違ってる。

ペナルティはね、威圧したり、ねじり込んでやると
気負ったりしては、ダメ。

まるで特売のトマトの、いちばん状態のいいのをさ
りげなく買い物かごに入れるように、そーつと……
ぽい。

『……ゴオオオオオオオオオオオオオオオ！

決めたのは！ 長居美緒！ @ペナルティ・キツ

ク！』

「さすがキャプテン！ 肝っ玉が服を着て歩いていま
す！」

『おんなは度胸！ おところは愛嬌！ 修学旅行は渡月
橋！

これで2対4！ あと2点！

ミラクルズ、アゲアゲで相手の背中を追います！』

「……」

「愛ちゃん笑いすぎ。実況、楽しいけど、スポーツ実況じゃないわね」

「……バラエティ……」

これもド真面目なユミ姉が、顔を覆って笑う愛と実況席にツツコんだ。

いや楽しいから、いいんだけど。

「でもあのパス凄かったナー」

マキがため息をつく。ありすのアレ、一見簡単なフリックに見えるが、角度やパスのキレ、自分が同じことをできるかといえ、相当怪しい。

なるほど、新構成の攻撃陣四人、なかなかやるではないか。

要するに、最後は可憐とナナなのだ。

ただし、そこへ至るまでの手順にバリエーションがないと、びっちりマークされて攻め手が無くなる。そこで高いのとパスセンスあるのを混ぜて、中盤・守備から入ってくるボールを、いろんな形で可憐とナナに供給する。

これがこのシステムの狙いか。

これじゃアタシもウカウカしてると、本当にポジシ

ヨンを失ってしまう。

ガンバラナイト。

大地はこみ上げてくる笑いをかなり必死で噛み殺していた。

のは、漫才実況のせいではない。

こうも巧く行くものか、と。

予想以上どころか、想像もしてなかったほどうまく回り出した。

運命の輪というのはどうやらフライホイール（はずみ車）のように、回し始めるとどこまでも勝手に、恐

ろしい勢いで回るものらしい。

しかし、ふしぎなものだ。

同じメンバーで、同じ相手で。

ちよろちよろつとなんか言っただけで、空気も現実も一八〇度変わる。

逆に言う……

背筋がブルブルツ、とした。

現役の時ですえ来たことのないもの、それは、武者震い。

〈……おそろしいポジションだな、ここは〉

コーチというのは。サッカーの場合。

チームの力を半分にもできるし、おそらくは、倍にもできる。

キリツ、と顔を作って、腕を組み直した。

なにせまだ2点を、追っている。

●五場 締められる

——しかし敵もさるもの。

「まずい、怒らせた」とでも感じたのか、「まず守備から」に切り替える。フォーメーションまで変えてきた。いわゆる「ゴール前にバスを並べる」というやつで、4―4―2の後ろ四人二列をベツタリゴール前に張り付かせて、スペースを与えない。

特にキレのいいドリブルで泡をふかされたナナには、ほぼツーマンセル（二人単位）。可憐にもマンマーカ

ーがへばりつく。

個人技のある有名選手のいるチームに対するシミュレーション……と、そんなところか。

こうなるとちよつと打つ手が無い。『テイキ・タ

カ』のような遅攻で相手を崩すには、チーム全体にボール扱いの上手い選手が揃っている必要があり、速さ（流乃）、高さ（胡桃）、強さ（蘭）といったそれ以外の能力で選ばれている選手の多いミラクルズには、難しい。

余談だがこの「引きこもる相手を崩せない」はそも

そも本質的にそれに弱い「（隠れ）カウンターチー
ム」として大地が設計したミラクルズに、延々と（あ
る段階まで）つきまとう問題だった。いかに想定内の
こととはいえ、彼は毎戦のようにこれへの対応に苦慮
することになる。

一瞬で2点奪ったあたりまでは「このまま一気に逆
転か」と思わせたが、膠着して、させられて、時間ば
かりが過ぎていく。

『……さあキャプテンがボールを持って出しどころを

探す、探す、探す、しかしどこにもスペースが無い！
相手も前に出てこない！これは困った、どうするキ
ャプテン……おーつとミドルシュートー！……ヤケ
クソ気味！』

引きこもられたらミドルシュートで前に出てこさせ
ろ、は定番だが、これにも無理に前に出ずにシュート
コースを塞ぐ形で対応する。セーフティ・ファースト。
むろんそれを縫うようにコースを狙ったシュートは、
G Kに防がれた。

〈……うまいなあ……〉

大地。さすがに強豪校は、こういう「こうしなさい」で練習を重ねられるようなアクションはすこぶる巧い。ウチも守備ではある程度見習わないと。

〈……と言ってる場合じゃない〉

打つ手と言えば選手交代だ。トリツキーなマキを入れて崩す。スタミナ自慢のユミ姉を入れて掻き回す。うーん、決め手に欠ける。

「コーチ！ おらつちいつでもイキますぜ！」

第二G Kの千里がスクワットしながら元気よく言つた。

「いやG Kは暇そうじゃん」

「FWで、です！」

ほら、カラちゃん先輩にふつーユニも作って貰っちゃつてるんで！」

「えーっ！」

はなこにニコニコ見せる、フィールドプレイヤーと

同じピンクの「20」。ちなみに今着てるG Kユニは、白地に水色の三角形が袖や襟ぐり、胴体に入っている。新選組の法被を想像していただきたい。黒一色の忍のG Kユニと違って、恐ろしく派手である。小柄な千里が自分を大きく見せたいと注文したら、こうなった。

さつき貰ったばかりだが、たいへん気に入っている。

「ちよつと、FWならアタシが行くヨ」

「ぷ」

本職のマキと愛がぶーたれた。しかし先輩を差し置

いてでもなんとかしたいという心意気は、買える。

〈……心意気か〉

確かに千里で意表をつくものもありかもな。

「……もうすこし、見てみよう」

もう一度ステイチューン。

指揮官でいちばんむずかしいのはこの、「ガマン」らしい。

しかし時計の針は後半三〇分を指そうとしている。
残り一五分で2点いや3点は、なかなか難事業である。

——ピッチでは、ナナが若干苛立っていた。

元来が攻めダルマ、「ベツタ引き」という相手の戦術が基本的に好きではない。それもワールドカップ予選で突破が掛かって1点リード残り一〇分、とかそんな状況ならともかく、練習試合で、2点リードだ。

こんなところからそんなことをして、なんになる。
サッカーは、楽しくやらな、あかんやろ。

「うおりゃあ！」

と一声吼えて、鬱憤ばらしの突進。

目の前にササツと現れてスクリーンになる四人とG
K。相手左サイドは「7番は全員で潰せ」と指示が出
てるかのようなうだ。吉岡一門を相手にした宮本武蔵はこ
んな気分だったのだろうか。一対一ならなんとでもな
るが……

結局囲まれて、もぎ取られた。

〈……ほとんどイジメやないか〉

デیفエンスでも、美学つてもんがあるう。

美しくとまではいかないが、取られた方が納得してしまうような、クリーンなボール奪取が。力づくは、美しくない。

へ……もつとのめり込んだところで構えて、キャップかもーさんに遠くから入れてもらうか〜

美緒、もも、二人ともフィードは巧い。また左に意識を集中させて、そーつと右の最奥にでもこつそり待

ち伏せを掛ければ……いや。

目の前のDF、MFが「離さないぞ」とばかりにこちらばかり見ている。

……人気モンは辛いねえ。

であるならば囧か。むしろムリクリ気味に突進して、バックパスから逆サイドで打開。

あるいはありすだ。さっきのは非常によかった。さすがウチからトップ下を奪った女。逆にウチからのボールを巧くりフレクションして可憐に通してもらえば、チャンスになろう。

……が、すこしでもいい位置でボールを受けようとすると、相手選手が痴漢電車のようにくつついてくる。それも複数だ。ああキシヨク悪い。

〈……ああ、もう！〉

ガマンにガマンを重ねていた。

ユース代表で強豪・格上と戦った経験の多いナナは、見た目よりガマンは得意だった。

明けぬ夜はない。晴れぬ雨はない。

——三十六はもうすつかり、忘れていた。

タカちゃんとの実況ブースが楽しすぎて、というわけではないが、そろそろ試合後の段取りが頭をよぎる。「戦勝会」と言い切りたいところだが「打ち上げ」の頼れるこつとんは……さすがに試合終わってからがいかが。よし、あとちよいしたら、あの運転手さんに交渉しよう。

あらためてピッチを見る。

どん詰まり感がすごい。

ピンクが一生懸命ボールを回しては、黒い壁にぽー

ん・ぽーんと跳ね返されている。

なんだか村上春樹先生の、エルサレム賞演説を思い出した。

壁と卵。

私はいつでも卵の側に立ちたい。

それでも、前半のどんより気分比べれば、ボールを支配して相手を押し込んでいるのだ。立派なもんじやないか。勝ち負けは時の運、また明日があるさ……

「……あのう、空堀さん」

「はい!？」

……あ!!」

唐突に。

待っていた「三つめ」が、来た。

「……お忙しいところ、お邪魔しにまいりました」

「いえとんでもない!　ようこそ、まいちゃん!」

「……」

はにかみながら、でもあの日よりずっと柔らかい表情で、おばあちゃんに手を引いてもらってるまいちゃん、小さく頷いてくれた。

「こちらこそお忙しいところわざわざすみません、時間、ご都合悪かったようでしたら無理して来られなくてもよろしかったのですが」

「いいえ、あの、おじやまになつてはいけないと思ひまして、試合の終わった後に……」

「なにをおっしゃいますやらあ！」

腰が抜けるようだった。おばあさま、変な気を遣わんでください……

しかし、いま居てくれるのは、事実。

ピッチ方面振り返って、どういふ声の掛け方をしよ

うか一瞬だけ迷って、
こう。

「……ナナッ!!」

呼ばれたナナ、振り返る。

またなんかややこしいことを言おうとしてんやろか

……

「どやどや」という顔の三十六が、両手を身体の左側でヒラヒラさせている。まさにその下には、おお、ち

いさく手を振る女の子。

〈……来て、くれたんかあ……〉

一瞬ほっこり、そして次の瞬間、
電撃に撃たれた。

彼女は、おかあさんの姿を求めて、可能性はゼロと
わかつていても、たったひとりで、電車に乗って遠い
街に来た。

しかるにあんたはなんや。

誰を使う、何をしてもらう、そんなことばかりや。
お前は、ウチは……

〈……アホやあ!!〉

溢れ出てくる目の水を、汗を拭くフリをして真っ白
なりストバンドで拭った。まだ乾いているそれは、口
クに汗もかいてない証拠。

キツ、と唇を結んで、駆け寄る、主将。

「まいちゃん来てくれたの。よかったねえ」

「ん。」

みーちゃん、次カウンターになったら早めにウチの足元へ一本ちょうだい」

「OK」

ナナの真剣な、というか見たことのあるまり無い表情に驚く美緒。

これはまかせるしかあるまい。

流乃と蘭に声を掛けてピッチサイドを指した。ニヤリ笑ったり、拳を握ったり。

ベンチでも。

「「出して!!」」

「よし」

はなこと愛。大地も即答した。

壁をブチ破るには、新しい推進力が必要だろう。これはいいいキツカケだ。

替えは……

と、三十六が飛んできた。大地の肩に腕を回して、耳元に囁きかける。

「……大ちゃんこんなこと言うて怒らんといてな、もしよかったら、あ戦術上無理やったらええねんで、もしできんねんやったら、やけど、明日葉ちゃんは置いといて欲しい」

「……大丈夫」

大地○・五秒考えて決断した。

本当は、はなこを入れるなら、明日葉に替えて右サイドバックが適当だ。新ポジションのツボを掴みつつあるナナと、攻め上がれるはなことのシナジーも観てみたい。

「ホンマすまん！ センキュー！」

「いや」

しかしいまここに、「天の声」が降ってきた。

スポンサー絡みとはいえ、こういう「流れ」とか「運命」を大地はかなり信じていてる。そして相当、大切にしている。

と、いうよりも、人智や作為の及ぶ限界が、人々が想像しているよりも、はるかに低いところにしかない、というのを、心で身体で思い知っている。

それらは無駄でも無意味でもない。しかし、それ以上遥かに大きな力の、流れが、渦が、この世界には巻いている。

事実ここで明日葉をそのままにしたことが、後にナ
ナのスーパープレイを生んだ。

「……古都、交替札。

14 胡桃に替えて11 愛、 8 エレーナに替えて2 はな
こ」

「はいっ！」

「中盤？　明日葉のところじゃなくて？」

「ナナがキレてるのでその近く弄りたくない。流乃と可憐をガッツリサポートして、ベンチで見るエレのお手本になってやってほしい」

「了解」

理屈と膏葉はどこへでもつく。

「愛は得意の囹普れー。ナナと可憐の使えるスペースを作ってくれ」

「はい」

むしろこちら、胡桃の高さを失う方が惜しかったが、しかしナナと絡むのは愛は去年一年やってるわけで、プラスもあるう。

「勝つぞ」

「まかせて！」 「はい」

やる気十二分、フレッシュな二人を送り出す。

●六場　ウチは浪花の

これが効いた。

愛は麗しい見た目に反して泥臭いプレースタイルのFWであり、相手DFがボールを持てばところかまわずチエイスを掛けた。はなこもボデイの強さや身体能力ではなく、突っ込みの切れ味で勝負するタイプのDFであり、負けじと相手中盤のボールに遮二無二突っかかっていく。後半途中、もうそろそろ走るのも億劫になってきていた敵陣を、翻弄し始める。

『……はなこだ！

替わったばかりの美原、カミソリ・タツクルで足元を刈る！』

基本D Fの彼女、普段なら入れ替わってすり抜けられるような無茶なタツクルはご法度だが、いまは違う。敵、たまらずバツクパス。

『あつとバツクパス、すかさず愛がアタック！ 躍動している！ ここで拾えば1点だあ!!』

ここでこぼしてくれればそのままシュートへ持ち込める。

FWはどんな形だろうと点を獲れば勝ちだ。可憐のような圧倒的な技術やセンスや身体能力は無くとも、「点を獲った」という事実には、消えない。

『おーつとセーフティ・ファースト！　大きく大きくクリアー！』

プレーがアバウトになってないかあ!？
もちろん簡単にもみが拾う！

『あーつと意表をつくハーフエーからのロング・フィード！ いやロング・シュートか!?!』

愛がニア（ボールから近い方のゴールポスト）に走る。彼女はこのチームでの、特にナナと絡む時の「自分の活かし方」がよくわかつている。

相手DFが二人、三人、寄る。さっきのあの高い高いFWがフラッシュバックする。なんとしても潰さねば。GKもさっきの落としをイメージして、身構える。

『ああーっ!?!』

実況には絶叫する時間しかない。

しかしその一言で十分、観ているものの代弁になった。

速く高く宙を飛んだボールは、感覚的には、愛の真上あたりで、

ぎゅおっ

と下へ、左へ、ドライブして、スライスした。愛の

いる方ではない方、ファーサイドへ降り注ぐ。そしてドンピシャリ、そこに飛び込む、背番号9。

右足つま先、合わせるだけ。

ゴール上面へ、突き刺さる。

『……グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ル！

難波鳴海の！ スーパー・クロスだ！ ワンダー・
クロスだ！ ミラクル・クロスだああああ！ GK、
DF見てるだけ！ 一歩も、動けな———い！』

見てるだけ、はその場のほぼ全員だった。むしろ反
応した愛と可憐が偉すぎる。

「なんだありやあ!？」　　こう、ぎゅいいんっ、って、ぐ
おわあっ、って!」

千里が興奮して喚き散らす。

自分にできるかといえば絶対にできないし、やれる
ようになれるかと聞かれたら、無理と即答する。

〈……聞きしに勝る、というか〉

大地こころで苦笑い。

思い出して欲しい、敵にこの攻撃を防ぐチャンスがあつたかどうかを。この弾道ミサイルの発射点はハーフウェーからすこしだけ入り込んだ地点であり、まだまだ激しいプレスを掛けなくても叱られない位置だ。放たれたそれは予測不可能な軌道を描いて誰も予期しない位置に着弾し、唯一その地点を予見できる熟練技術者によつてのみ、ゴールへと軌道修正が行われる。

「これ繰り返してたら勝てるんじゃないノ!？」

はなこの代わりにマキが叫んだ。

それはおそらく、そうだろう。

もちろんこれがあると意識されるとなにか防ぎようもあるので、いまみたいの不意打ちと組み合わせれば、だが。

『目が覚めるようなクロス！ 息の止まるようなシュート！

これ・が・ミラクルズ・です！

3対4！ あと1点で、同点！』

ハイタッチをするぐらいの余裕は出た選手たち、ナ
ナは何やらありすに耳打ちして、まいちゃんの方を見
る。

……あれ？ 反応薄いな。

横の三十六が、若干怖い顔をして手招きしている。
ま、ええか行ってみるか。

……頭ごなし。はたかれる勢いで。

「アホかお前！」

「え、ア、アホお!？」

「いまのパスがええパスとかそんなんサッカーのプロやないとわからんやろが！ まいちゃん見てみほら。ポカーンしてるやろ！」

「ハ、ハア!? ちゃ、このぐらいの子どもの方が、物事の本質をやなあ！」

「グデグデ言わんと自分で決めれ自分で！」

「……き、き……」

キーツ、と喚きたくるなるのを必死で堪えた。教育上よくないと。

な、何を言うんや、点は誰かが獲ればいいのであつて、そこに参加したというのが重要で、そもそもプロとか言わんでもホラ見てみい、ここにおるもん全員ウチのクロスをポカーンと見てただけやったやろが、そもそもなんやねん「お前」て、「お前」呼ばわりされるような義理がなんであんなアホにあんねん……

と、ポジションに戻りながら悪態をつきながら、しかし、言われるように、確かにまいちゃんは、にこにこはしていたが、ウチがヒロインだとは、理解していなかったようだ。

五歳児には、難しかったか。

ぬぬぬぬぬ……

試合再開。

リードが減ってしまった相手、ますます殻に閉じこもる。そしてナナと可憐へのチェックも、さらに厳しくなった。当たり前だろう、放置すれば防ぎようのない形で二人で点を獲られてしまうわけである。

しかしそうなる。

『……今度は左サイド！ 久しぶりに流乃の突破！

しかし食いつかれる！ はなこに戻す！

はなこが切れ込んで、楔のパス！ 愛だ！

しかし振り向けない、ゴール方向振り向けない！

戻す！ ナナ！

さあここからどうする！ 目の前には壁！』

どうもしない、という選択をした。

誰かが前に突っかかってくれば、できたそのわずかな隙を突いてありすを走らせるつもりだった。が、ピツチり動かない。

ので、その場でボールに足を掛けて、遊ぶように転

がした。

見ようによつては挑発にも見える。

さすがにそこまでされると、人間には自尊心というものがあつて。

『ディフェンスが出る！　ひとり、獲れない、ふたり、まだ獲れない、さんにん、囲まれる……そこ!!』

三人引きつけて、ゴール真正面わずかなスペースへ鋭いパス。

目論見どおりありますが飛びついて、あつ、と声の出

そんなスムーズなターンを見せた。前を向く。シュー
ト、可憐へパス、どちらでも思いのまま。

〈……時間を操る能力だ〉

大地、ようやく今まで感じていたものを言葉で表現
できて、安堵する。

ありすの動きを一目見た瞬間から、「これはおかし
い」と思っていた。もちろん本人にそんな自覚は無か
ろうが、身体の変な動きで身体の変な場所で、そして
変なタイミングでボールを扱うので、周りが極めて混

乱する。ナナや可憐がこれに付き合えるのは、鍛えに鍛え上げた肉体が、身体的に反応するからである。目で見て・判断して・体を動かす、という手順を踏んでいる並のプレーヤーでは、むしろそういう訓練を積んでいれば積んでいるほど、この「歪んだ時間」に翻弄されることになる。

ところがありすは、その時間をただ空費した。

ハッ、と我に返ったDF陣が体勢を整えなおし、身構えてから、ようやくおとり、と真正面にドリブルを始めた。

当然、わーつと襲いかかれて、潰される……
過剰に。

ピーツ……

棒倒し競技のように、華奢でちいさなありすの身体が屈強なDF・MFガールズ四人の身体の下敷きになったのを見て、たまらず審判、教諭の顔になって笛を吹いた。

『……これは酷い！　いくらなんでも強引です！』

また助けだされたありすのユニが顔が手足が、土埃まみれになっているのが痛々しい。罪悪感を、掻き立てる。

ナナは呆れた。

想像以上のタレントだ。

自分の特徴をすでによく理解していて、それをしかも逆張りで使うことで、このチャンスを演出した。あれそのままシュート撃つても可憐に通しても、間違はなく1点である。わざわざ、潰されたのだ。

見つめていると、目が合った。

にこつ。

天使か。

〈……あとで奢らなあかん〉

『直接FK、フリーキックです！

もちろん蹴るのはこの人、プレースキックの鬼！

難波鳴海！』

ボールをセットすると、寄ってきたキャプテンが、囁くように訊く。

「……サインプレーは？」

「直接ねじ込む」

「フェイクは？」

「要らん」

「決めてね」

「決めていいか」

『……さあゴール前真正面距離約二〇mちよつと、壁は右側に六枚！ 距離はいいですが真正面近め、若干撃ちににくい場所か。キッカーはナナひとり、ミラクル

ズは左右に分かれます！ サインプレーか、直接か！』

笛が鳴る。

後ずさる。

ゴール前そこかしこでもみ合う。ピンクとブラック。

短い助走、ボールにつく、振り上げる脚、

壁が跳ぶ、

身体を倒して、タイミングを外して、右脚を、振り抜く。

『直接だー！ーっ！』

ボールは降下を始めた壁の上を通って、キーパーの右、キーパーから見て左の上を襲う。しかしこの距離、壁の上を通るボールなら相当緩くないと、ゴールバーの上を越えるはず。見よ、事実ボールは、

『落ちるう!!』

え、と思う間もなく、
鋭角に曲がつたボールは、

滝のように落ちてきて、

ゴール右上隅に、吸い込まれた。

『……ンゴウオオオオオオオ！ ゴルゴルゴルゴル
ゴルゴルゴル、ゴーーーーーー！

同点！ 4対4！ 同点っ！ ですっ！』

ようやく喜びを爆発させられるピンクの選手たちが、
ナナに次々に覆いかぶさった。

『決めたのは！ 難波鳴海すなわちナナ！

背番号もーッ！』

「『ナナあ!!』」

ベンチも実況に合わせた。全員立ち上がっておおはしやぎ。

「コーチ！ やりましたよ、こおち!!」

「ん」

感極まった（見かけによらずよく感極まる）古都にバンバン肩のあたりをどつかれながら、大地はわずかに微笑んだ。

まさに「必殺」という言葉がこれほど似合う武器もあるまい。

FKの名手・中村俊輔選手が日本代表の中軸に居た頃、「FWは点を獲らなくても、いい場所でファウルを貰ってくれればいい」などと無茶苦茶を言われたが、それに匹敵する。

確かにセットプレーはサッカーで大きな得点源であり、統計によつては得点の六割がセットプレー絡みという。これこそ、「これを繰り返せば勝てる」という必殺の、防ぎようのない武器だ。

いいぞいいぞ。

左の長槍、右から弾道弾、戦術可憐に、空戦のF—
14、時間の国のアリス、そしてFKでドン。

武器があり余るぐらいある。

これは……これで強くできなければ、僕があまりに
スカタンってことになる。

……がんばろう。

ひとしきり祝福を受けてナナ、まいちゃんの元へ。
横にいるアホは無視。

「……でやった？ お姉ちゃんカッコ良かったか？」
「うん!!」

子どもの笑顔というのは、なんてすばらしいものだろう。

ああ、ウチもできたら、できたらでええんやけど、
こんな子どもがほしいなあ……
こんなこと初めて思たけど。

「……もう1点！」
「は？」

「ナナちゃん、もう、1点!!」

「ぐっ」

笑顔全開で言われて、むせる。

これは……アホの仕込みか。横を見上げる。アホは明後日の方向を見て、口笛を吹く真似をしている。あとでクロス。

「わ、わかったおねえちゃん、がんばってみるわ!」

「うん!

がんば・れーーっ!」

「お、おう!!」

無邪気な笑顔で両手をぶんぶん振られると、力強く
うなづく以外の選択肢はない。

目的のためならちっちゃい子どもも利用する、
あの男は悪魔か。

……ま、まあせやけど確かに、ナナちゃんの、ちよ
つとええところ観てみたい、もう一回、つちゅーのも、
まいのすけの素直な気持ちやろ……たぶん。

自分を奮いたたせる、しかし得意のプレーコールは……裏抜けしてマイナスの折り返し、ペナエリアでごちよごちよしてPKガッツ、長クロス、直接FK……よし。まだアレがある。

「……みーちゃん」

「次はなに？」

「人左へ寄せて。いま！言うたらボールちようだい」
「おつけー。」

「なにするの？」

「それは見てのおたのしみや」

「ふふ」

いちばんむずかしいのを、やろう。

失敗しても得られるものがあるのは、限界を越えようとした時だけだ。

——笛が鳴る。

残り時間は一桁分。

『……さあ試合は振り出しに戻りました！ この時間からだ！ 次に1点獲った方が試合を制するでしょう！』

解説の空堀さん、どちらが有利でしょう！』

「もちろん追いついたミラクルズです。次の1点も我々が獲るでしょう！」

『ズバリ得点者の予想は！』

「この流れで他の名前が上がりますか？」

……ユミ姉さんです！」

『出ても無いやないかい！』

「……」

「くー、笑いすぎ」

お役御免の胡桃にとつては、観戦しててこんなにお

もしろい試合も無い。外で観ているとすごくよくわかる。胡桃はバスケット経験が長いからか、スタメンや途中交代にさほどこだわりがない。むしろピッチサイドで現況を把握できるので、これはこれで勉強になる。横のユミに、ポツリ。

「……右、空いてる」

「ん？ そうね、もうこうなったらナナ、ナナで行くのかと思ったけど」

左サイドで、流乃、はなこ、可憐がパス交換で崩そうとしている。もちろん敵も必死の守りで、そうはさ

せない。

攻めあぐね、かなり左に寄ったももまでボールが返ってきて、やり直し。

「一回キーパー！」

美緒の指示にしたがつて、忍まで戻す。忍は足元で軽く転がして、様子を伺う。隙がない。相手はもう、このまま試合を閉じるつもりだ。

出てこい、と言わんばかりにボールをキープして、すこしずつ、前に出る。ももと蘭が、忍との距離を詰めてようと下がる。美緒もそれに従って、下がる。流乃が最終ラインに帰陣したので、真ん中寄りだった明日

葉が右サイドに戻った。忍はゆっくり、その明日葉にボールを渡す。

その少し前、ずいぶん低い位置に、ナナがいる。

敵は誤解した、妙に落ち着いて構え直したミラクルズを見て、相手も試合を締めて、このまま同点で終わるつもりなのかと。

人間はピンチの時ほど、自分に都合のいい解釈を採用しがちである。

ピッチ全体におたがいがバラバラとバラけ、気持ちがほんの少し、ゆるんだ瞬間、

ナナが手を挙げた。

「明日葉！ パス！ ステイ！」

美緒が叫ぶ。

明日葉、弾かれたように強いパスを出す。ボール、美緒の足元。ワンタッチ、斜め前の、

「ナナッ！」

ズバン！とパスを出す。

「Movin' on！」

お膳立ては、これでいい？

ナナ、ゴールに背を向けそれを受け取る。

M Fが二人、寄って来る。普通この場合右サイドバツクつまり明日葉、が駆け上がっていくので一人ずつ付くのだが、明日葉は来ない。ので、二人でどちらがナナを見るか、お見合いのようになる。

混乱する二人をまるで輪舞曲に誘うように、ナナはくる、くると身体を回して、ボールを回して、その二人も回して、できた隙間から、

突破。

一人、二人。

いつもの磁石でも付いてるのかという、右脚に吸い付くようなドリブルではなく、ポーンポーンと前に弾くように運んで、自身も一気にトップスピードに乗る。実況が静かに名を呼んだ。

『難波鳴海』

キャプテンの指示も飛ぶ。

「愛！ あー！ 左ワイドオープン！ スペース！」

右ではない、左へ行けということは、サポートしろ
という意味ではない。

黙って見てろ、ということである。

敵右サイドバック、待ち構える。迫り来るナナ。わずかに重心を左に寄せた、左を抜かれる、と判断して自らも重心を左に傾けた瞬間、右に切り返されて、ブチ抜かれる。

三人。

『難波鳴海！』

お次はC B。このタイミングで取れる、と準備動作を起こした瞬間、ギアを一枚上げて、加速してそのボール奪取予定ゾーンを突き抜ける。

四人。

『難波鳴海ッ！』

たまらずG Kが飛び出した。その足元めがけて身体を投げ出す。しかし無謀、ナナにとってはそんな直線的で読める技の方がかわしやすい。ひらり、とばかり

に左に避けて、ボールを失わない。

五人。

『なんばなるみ、キターーーーッ!!』

あとは、無人のゴールに、流しこむ、だけ。
はたく。

直後に後ろから脚をかけられてバランスを崩すが、
もう関係ない。

すると一直線に吸い込まれていくボールを、た
だ敵も味方も、見送った。

『難波鳴海—————ッ
!!!
』

ワーツ、と絶叫が上がった。

その場に居た全員が立ち上がり、叫んで、腕を振り、手を叩いた。

敵のベンチからでさえ、拍手が沸く。

吼えるナナ、またも群がるミラクルズ。

ひとしきり団子になってグシヤグシヤやったあと、早く伝えたくてしょうがないナナ、まっしぐらに、ま

いちゃんのもとへ。

「やったでおねえちゃん！」

「うん！」

「カッコ良かったか!？」

「うん！」

「……鳴海師匠」

気がつけばアホが片膝を立てて、そこを叩いた。
なるほどこれはアレか。

どっかり、遠慮無くスパイクを載せた。痛くはない

程度に。

アホは、今日は持っていたハンカチを両手に、その靴を磨く。

「キュキュキュ、つと。

……おみごと!!」

見上げて笑った。

エエ顔やった。

いつつもこんな顔してたら、エエ男やのにな。あんな変な、斜めな顔せんと。

「……あたりまえや、つちゅーねん。

惚れてええで」

「もう惚れとる」

「マジか。」

ほな惚れ直しいな」

「そうするわ」

「よっしゃ！　ほんだら」

スーパープレイも飛び出したし逆転もしたし、普通
はここで緩むものだが、そうはいかないのが難波鳴海。

そりやどんなことでも、日本一だの世界一だのを狙うような人は、ちよつと変わつて無ければならない。そう、マラドーナのように。

「……もっぱつ、決めたるわ!!

見ててや、まいちゃん! ……さとり!」

「あ、いやもう試合閉じた方が」

「最後の一秒まで、攻める姿勢を忘れたら、あかん!!」

せやろか。

まいちゃんは大喜びで手を叩いている。

ま、ええか。

「……ユーミイ、ナナどーしていちいち空堀クンのところ行くんだろネ？」

「さあ？ なにか作戦でも貰ってるんじゃないかしら？ ほら空堀君いろいろ物知りだから」

「きつとそうデス！ スゴイですネ、三十六兄様」

「……」

「胡桃先輩笑いすぎ。」

マキさん意外にあんな感じですね。エレちゃん

は見たままですけど」

「……ユミが、ひどい……」

「可愛いところも一つはないと」

「こつとんも、ひどい……」

——試合が再開された。

敵はもうすっかりやる気なし。なんだか詐欺に遭ったか、交通事故に遭ったかのような気分だ。

なんだ、強いんじゃない。最初から。私達ぐらい簡単にノせるぐらいに。最初は弱いかな、と見せかけて食いつかせてあとでガッポリ身ぐるみ丸剥がし。賭場の

博打打ちか、あんなら。

相手が厭戦気分だからって遠慮も会釈も無いのが、ミラクルズのいいところ。このチームその構成員、「空気を読む」という日本人と日本社会に必須のスキルが、まるで身についていない。

相手が脱力してるなら、さらに得点するまでよ。

すっかりキツカケづくりが板についた左サイド、また流乃がグリグリ決って、時間を使う。はなこが寄る。流乃、敵の何本もの脚をうまくいなしてかわして、はなこに出す。

はなこ、一瞬考える。

このまま愛の頭に放り込んでも、いいのだが。
つまんない。

せつかく入れてもらったんだから、私も小粋なプレ
ーのひとつやふたつ。

あ、見て、ナナが突っ込んでくる。
ようし。

はなこも正確なフィードには定評があった。ちよつ
とプレッシャーが掛かると崩れ易かったが、今のよう

にノープレスなら、かなり正確なパスを出せる。

狙いすまして、ゴール前、愛の頭を飛ばして、その後ろ、

突進してきたナナの、頭、めがけて、

フライボール。

ふわーり、と優しく送られたロビング・ボールは、ちやうど撃ちごろ撃たれごろ。

これは本日のヒロイン、難波鳴海がフリーのヘディング・シュートでもう1点だ、と誰もがそう予測した。ナナが跳ぶ。

あれ？

あんまり高くない？

もともとがあまり高さは無い上に上背も無い。胡桃の絶対制空権が目には焼きつき過ぎてて、パサーのはなこも目算を誤っていた。

いかん、このまま頭上を越してそのままゴールラインを割って……

でもまいいよねもう笛鳴るし。

と、思いきや。

するするする、と頭では無いものが伸びて、そのボールを、弾いた。

ぽーん……

これがまた綺麗な弧を描いて、あのなぜかファウル
やオフサイドの笛が鳴ったあとのシュートは美しいよ
うに、ゴール左上隅へ、静かに吸い込まれていった。

ピーーツ!!

その笛の音は、得点を告げるものではなく、ファウルを告げるもの。

そのカードは、もう試合が終わるから、教諭の茶目
つ気だったのだろうか。

「故意のハンド、非紳士的行為。

……退場！」

赤紙が高々と掲げられた、ナナの頭上。

「……へーっ!?」

ナナの炭酸の抜けた声が、沈黙を破った。敵味方問わず、今度は爆笑が巻き起こった。腹を抱えて、涙を流して、ゲラゲラ笑う。まいちゃんもおばあちゃんも、

みんなが笑っているから、つられて笑っていた。

笑ってないのは、三人。

本人。

我が事のように共感して顔から火が出る、三十六。
そして指揮官。

〈……まさか本番でやらんだろうな……〉

「五人抜き」をやりたいと思うサッカー選手はゴマンと居るだろうが、「神の手」をやりたがるサッカー選手はそうは居まい。

というかその人、サッカーに向いてない。

高性能車はじゃじゃ馬は、取り扱いが難しい。

三十六が居てくれて、よかった。

……その三十六は、気を取り直して、ナナと漫才を始めていた。こんどは今までと逆、嫁がボケ、旦那がツツコミ。

「アホかお前は！ 何をしてけっかんねん！」

「いやちようどええボールがつーと来ましてね」

「る、と手に止まったんか。

つー、と来て、るー、ああなるほどそれで『つる』。

アホー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

「アホアホ言わんといてえなあ。ウチはアホちやうで、
ウチは、ウチは」

「なんやねん」

「ウチは浪花のマラドーナ」

「マラドーナはちゃんとわからんように手に入れるん
です！」

「うわーん、せやから次はちゃんとわからんようにす
るー」

「しなさんなー!」

「うえーん」

コンビ名はそうね、7 + 36 で『43』なんてどう？

笑顔の渦の中、ナナの大活躍で、「ミラクルズ」の
(フルタイムの) 初陣は、グデグデのまま終わった。
色でいえばそうピンク色、灼熱の赤よりは、すこし
ゆるい。

ユニフォームにこの色を選んだのは、正解だった。
いや。

「それはそのようになる」もので、つまりこのチームは、どうやったってピンク色のユニを身にまとう運命にあつたのだらう。

ほらご覧、みんなもう、ずつとこのユニを着てたみたいに、馴染んでる。

本日の試合結果、5―4で勝利。

得点者、此花可憐、長居美緒(P)、此花可憐、難波鳴海、難波鳴海。

退場者、難波鳴海。

■第五幕

●一場 宴

——無事「戦勝会」と銘打てた打ち上げは、もちろん『山嵐』へ。

「ラーメンん!？」とはなこあたりが声を出したが、他には特に異論がないのがうれしいところ。前戦後のピクニックでの乱れ食いつぷりをみた三十六、これはイ

ける、むしろこういうところでないとは叱られる、と思つてのセレクション、当たり前。

残念、まいちゃんとおばあちゃんは今夜おかあさんとのビデオ通話があるというので帰っていった。最後はチーム全員と大地、古都、高安、そして三十六で並んで手を振った。今日は間違いなく、彼女こそが勝利の女神。

大きく手を振り返す、まいちゃんの顔は、最初に遭った時とは別人のよう。

チームバス（ともう言っちゃえ）を乗り付け、ドヤ

ドヤと二〇人が雪崩れ込むと、大将が目を剥いた。もちろん予約はそう取ったのだが、なんせ華のある若い女子がそんな集団で襲撃してくることなど当店始まって以来のことです……

「……へー、悪くないね」

「はな、その思ったことすぐ口に出すのやめなつて。前から言ってるけど」

流乃がたしなめる、しかしオサレにうるさいはなこでも、たたずまいは合格、と。

し字型のお店の片翼を占拠して、それぞれが肩寄せ
てメニューを覗いてわいのわいの。店入り口に近い方
の四人テーブルから、奥・手前で、

大地・美緒／ナナ・三十六。

蘭・愛／はなこ・流乃。

胡桃・マキ／もも・ユミ姉。

エレナ・ありす／明日葉・古都。

カウンターには忍・千里・可憐・高安、はもちろん
司会、基本は立ったまま。

「さ！ みなさんお集まりいただきましてありがとうございます

「ございます！」

「ずっと集まってるー」

「はいどんどんツツコんでくださいね、宴はライブ！
これよりミラクルズ戦勝会、賑々しく始めたいと思います、はい皆様拍手くくく!!」

わーーーっ……

二人の店員さんでは間に合わず、大将もホールに出て用意してあったオードブルやサラダを配り始める。すぐ立って手伝う三十六と古都、最初は「それはいか

ん」と固辞した大将も、

「次からは貸し切りにするよ」

と苦笑いで手を借りた。もう半ばヤケクソ、ジュースはペットボトルや紙パックをそのままテーブルに並べる。さてオーダー。これがまた大変だ。

「ウチは豚バラチャーシューの特大で！」

「早っ！ ナナさん早い、早いよ！」

「ちー、戦場では『早めし・早風呂・芸のうち』やで！ メシとシャワーは二秒で済みます。ほんですぐ練習や！」

「ええっ!? 今日はどういいじゃないッスかあ! あんな激闘のあとでえー!」

「あんた何もしとらんやろ。ガツコ帰って特訓」
「うそーん!!」

宴会部長と宴会課長が決まりつつある。

「いや。千里大活躍だったよ。ベンチで」

大地が思わず助け舟を出した。

「ですよね！ 盛り上げましたよね！」

「うん。」

よく声を出してたし明るくしてくれた。僕も助かったよ」

「ホラ！ ホラ！ 聞きましたナナさん!?!」

「大ちゃんそんな甘やかしたらあかんで」

「見てる！ 見てる人は見てるなあ！」

「ずっとベンチに居て欲しいぐらい」

「でしよう!?!」

「はい!?!」

みんなで大笑い。

大地は天然か狙っているかわからない。

「千里はあのバカみたいな衣装すごく似合ってた」

「バカとか衣装とか言うなー！」

「はなこ先輩思ったこと口に出すのやめなつて！」

「似合ってるって言つてんだから誉めてんでしょ」

「チー太やめといた方がええで。口喧嘩でおはなに勝てんのはプラトンぐらいや」

「またえらい大物が出てきますね」

「ちよーどいーじやんちーた、ユニの模様、怪獣みた

いだし」

「かいじゅう？ カレ何言つてんの」

「あれ、プラトンて怪獣じゃないの？ あのギザギザが歯なんですよ、ガブーツて噛みつく」

おばかちゃんだ。可憐だいぶおばかちゃんだ。

ま、このぐらいで無ければあんなシュートは撃てない。

「ちつがーうよあんたホントバカだな、プラトンつてのは、えーと、えらい、学者さん、だよ」

「あ、そなの？ 何発見した人？」

「えっ？ あ、いや、えー、プ、プ、プラトニック、ラヴ」

「へー。それって、なに？」

「プ、プラトニック・ラヴは、だな。」

「……あんたにやまだ早い」

「え、なにそれ、ラヴはラヴなんでしょ？ 興味あるよあたしだって年頃の女の子だもん」

人が悪いのは、わかってる連中がくつく笑いを堪えて黙ってることだ。FOXYカレンちゃんがアホ顔と

牙のような八重歯をむき出しにして迫る。

「えー教えて教えてちーた」

「いや、えー、あ、そだ！ あれですよあれ、
ナナさんと空堀先輩みたいなもんツスよ！」

ぶほあつ！

ナナが食べかけの唐揚げを盛大に嘔いた。

千里の言葉よりそのリアクションが正直すぎて、こ
らえきれない爆笑が起きる。

「なっ、ななななななななななななななななな、
なな、なにを言う、言うтонねんこのちーんちくりん、
アホ、ウチ、あんな人とはなんもない、っちゅーね
ん！」

「だってゴールするたんびに空堀先輩とこへ報告に行
つてたじゃないスカ」

「あ、あれはなんちゅーか、『おまえみたいなん、点
獲られへんやろー』て挑発されてたからやな、見てみ
い！」

「そんなことしてへん」

三十六が配膳を手伝いながら、笑う。夕ゲ逸しに成功した千里が追い打ち。

「着替えたあとだつてすぐ見せに行つてるし。

『でや？ 似合うかあ？』
「

変に巧いモノマネでまた沸いた。

「アアアアアホウ、ちよつ、これは言うとかなあか
ん、みんなな、そら時間押してる言うてもな、いちお

うこの人が駆けずり回って新しいこんなエエユニ作ってきてくれたんや。礼は言わなあかんやろ礼は」

「言つたよ」

「みんなひとりひとり言ってるって」

「ちやうつてえ！ もつとダイナミックに！ こう、オーヴァーに！ そう、歌舞伎のように！」

「別に要らないよ」

また三十六笑う。当然のことをしたまでだ。礼というのは、コスト、犠牲を払ってもらった時に言うもので。

「それより『この人』呼ばわりですわよ奥様。もうご結婚でもなされたのかしら」

「いやですわねー、披露宴にも呼んでくださらなくつて」

「ボク、親友だと思ってたのになあ」

「くすん」

「あんたらーーーーーーーー!!」

二年第二テーブルの連携弄りに噴火するナナ。

そうやって反応するからさらに炎上するのであつて。

そこへ配膳ワゴンを押す三十六と古都が割り込んだ。

「……はいラーメンどんどんあがつてきまーす！」
「やったー！」

色とりどりの麺類が、湯気とともにテーブルを彩る。それぞれのセクションがまさに性格を表していて、おもしろい。やっぱり横幅のある人がこつてり肉気が多く、細身の人にはあつさり野菜つけが多い。

「……エレーナちゃん。チャーシューいる？」

「あ、要らないのデスカ？　もちろんイタダキマス。

でもありすサン、そんな具のないラーメンで大丈夫デスカ？」

「だいじょうぶ。私麺類の具ってあんまり好きじゃなくて」

「変わってマスねー」

「そう？　パスタはアーリオ・オーリオがいちばん美味しいと思わない？」

「ベーコンを五枚ぐらい載せたカルボナーラデスね」

「うどんはかけで。せいぜいおネギをパラリ」

「鶏天味玉坦々カレーうどん麺二玉、鶏天三本追加

デ」

「さすがエレちゃんだなー。

……明日葉ちゃんも、その方向だね」

「わたしより全然凄いデス。

明日葉さん、ひよつとしてラーメン初めてデスカ？

このあいだのカラオケみたいに」

「は、はじめてなことなんかありませんー！

えつと、えと、三……二、一回め、ですー」

「初めてだね。それでそんなことに……」

「……ぎゃー！ カレ見ろ、またはっぱの山盛り病が

ー！」

「うわあ！　なんかやしが雪男みたいになってるじやんか！　こつとん、ちゃんと見張つてないと！」

「わたしお手伝い……おわー！」

「ちやつ、ちゃんと全部食べますー」

「明日葉ちゃん無理しないで、わたしがあとでヘルプするから！」

一年はこのように微笑ましい。

三年はももが超特大用の、中で蕎麦が打てそうな大きな井ごと噛み砕く勢いで食べ、さながら『西遊記』で猪八戒が村人にごちそうになるシーンを再現してい

る。

二年は、というと全員速い。みるみるテーブルの食糧が消えてゆく。ゆったりめなのは美緒ぐらいだが、彼女は「テーブルに残菜を残さないのが私の使命」と持たなくて良い使命感を抱いており、食事終わりがけになつて一気にスパートする。

ちなみにもちろんのように美緒と大地は同じものを食べている（さらにちなみに、湯麺）のだが、こちらは全員でスルーだ。なぜなら、大地に注文権はないので、必然的に同じものになるのである。それはこの地においては太陽が東から昇るぐらい、あたりまえのこ

とだ、とオババは言った。誰だそれ。

「……ささ、準備整いましたのでお食事いただきながら、今日の激戦を振り返りましょう！」

高安が手を叩く。先ほどのビデオカメラが小型プロジェクトに接続され、奥に白いスクリーン。もちろんそれらは高安のカメラを見た瞬間、三十六が連絡してお店に搬入しておいてもらった。西九条家万能伝説。

「おおっ！」

「高安君、前半は全飛ばしで！」

「なにを言ってるんですか、反省には前半こそをじっくりと見てもらわないと」

「反省は後でするからー！」

「美原さん今日はいいいポジね。前半ベンチで盛り上がってから出て」

「特に何もしてないけどね」

「るーそれはちよつと酷いよ、見たでしよ？ 最後の

ナナの幻の神の手の演出を」

「言うなあ！」

「解説はもちろん、我らがリーダー、偉大なる首領様、

上町大地！」

「あはは」

拍手に迎えられ、レーザーポインターを手に大地の熱弁が始まった。早送りを駆使してポイントだけを解説する。それがあまりに的確で、はなこから思わずツッコミが。

「コーチ、まるで練習してきたみたいに時間飛ばしてるけど、まさか覚えてるの？」

「ん？ ああもちろん」

「えーっ!?!　じゃ後半一五分に何があつたか、とか言える?」

「いちばん煮詰まつてた時間帯だね。流れがあるから『このプレー』とは言えないけど、後半では珍しく攻めこまれたところから、ももが奪つてフィードで一氣に胡桃の頭を狙つて、当てたまでは良かつたけど周りのサポートが追いつかなくて、胡桃の足元から奪われた……あたり?」

「高安君送つて送つて」

「えーっと試合開始と録画開始の差がこれぐらいだから、後半一五分は……」

出た。

そんなような場面だった。

感嘆の声が上がる。

「スッゲー！ さすがコーチ！」

「いや、将棋の棋譜と同じで、流れで覚えればどんなアクションがあつたかはすぐ思い出せるよ。時間感覚はまあ、慣れで」

いや将棋の棋譜が素人にはそもそも覚えられません。

このひとやつぱりスゴいんだな、という空気が充満する。

「……タカちゃんこのまま送って、愛・はなこ投入の
ところから行こか」

「ほいー」

「えっ、ちよっ、ウチの華麗な突破からの得点と、ウ
チの体を張ったPK奪取からの得点は!？」

「胡桃のスルーが見事でした。さすがの戦術眼。キツ
チリ撃てるポジションをキープした可憐の動きも完璧
です。あと美緒のPKは職人過ぎて噴きました。次か

「らも基本PKは美緒でいいね」

「ウチわあ!？」

わはははは……

「……ウチさんはこのあとと思う存分活躍してもらおうの
で」

「せやかて」

「さてここの交替意図ですが……」

——三〇分過ぎから試合終了まで、約一五分。

みんなで食い入るように見とれた。

高安も司会を忘れ、三十六も古都も、ついでに店員さんも大将も、手を止めて見入った。

なんて素晴らしい、チームなんだろう。

……ここだけ見れば。

終わった。

大きな拍手が沸いた。最後の赤紙さえ、いいデザートだった。

これは本当に、わたしたちだろうか。
そんな疑いさえ、すこし持った。

「……すばらしい！」

空堀君、決めた。ウチはこのチームを、ミラクルズをサポートするよ！」

「おおつ、ありがたい！」

みなさん、大将の、『山嵐』のサポート決定です
!!」

ワーツ……

「ということは、ウチのメンツはきたらみんなタダ！」

「それは無理だなあ」

わはははははは……

「一杯一〇〇円!?」

「五〇円引きかなあ」

「男でしょう!?!」

「よしわかった、半額!」

「餃子と唐揚げはタダで付けます!」

「うーん……ええい、よかろう!」

「よし!」

「あんたアホかあ!　なにが『よし』やあ!」

「は、はい!?　スポンサー様に、あんま無茶な要求は」

「大将！　白メシは無限！」

「無限！　無限は難しいな、わかった、電気釜が尽きるまで！」

「よっしやあ！」

……あ、あれなんでみんな反応薄いの」

「だから麺類食べる時に白ご飯食べるのナナだけなんだってば」

「なに、なにを言うてるのん、三十六もそうやんなあ！」

「おう、まあ、腹減ってる時はな」

「いつ二人でここへ来たの？」

ユミ姉必殺の死神のカマ。

「へっ!? いや、あ、えー、か、関西人やから、ですよ?」

「スポンサーといえは空堀君、ここで聞いていいことかどうかわからないんだけど」

さつと自分で話題を変えるのが、姉ちゃんらしさ。

「すごいユニフォームとか、大丈夫なの? バスまで

チャーターして、お金」

「まかせてください」

こればかりは胸を張る。

「出処は言えませんが、まあ伊達直人みたいなものだと思います、お金の件は、まっつっつたたく心配ありません」

「だてなおと？」

「正体がバレないように虎柄マスク被ってボランティアする人よ。」

まあ、空堀君がそういうなら……」

三十六、ちらり明日葉を見た。知らんふりをして……いや素かな、ラーメンの上にまだ山になってる、もやしやネギやキャベツやニラと格闘していた。

「えっ、ちよつと待って!？」

ももが立ち上がる。

「てことは、ひよつとして、これ、きょう、ここ……」

タダ!？」

「あ、ああ、そうですね、これ戦勝会なんで、経費から出しましょう」

おおーーーーーーっ!!

「それを、早く、言って!!

追加・おーーーーーーーーだーーーーーーーー

ーーーーー!!」

眼の色を変えたもみが、だけではないのだが、多く

の者が一斉にメニューに手を伸ばし、爛々と輝く瞳で隅から隅までスキャンし始めた。

……あんたらまだ喰うんか。

オードブル山盛りがテーブルごとにあつて、餃子と唐揚げとチャーハンがついてて、だいたいラーメンを大盛りだの特盛りだので頼んで……

まあ、成長期だしね。

いよいよカオティックになつていく宴、ふたたび忙しくなる厨房とホール、賑やかになる食卓。

と、千里とバカ笑いしてた可憐が思い出したように

カウンターから振り返って、そつと言う。

「……ナナさん」

「うい？」

口いっぱいに二杯目の豚バラチャーシューの塊を頬張りながら、顔を上げる。

「あたし、間違ってたんです」

「……まだわからんで」

「ううん。」

今日の試合、あたしサッカーやってきてて、いちばん、楽しかった」

「ほうか。そっちの方は、まあな。」

いや、ちやうで、可憐」

「はい」

「もつとオモロイ試合を、自分で作らな」

「……はい！」

顔をラーメンに戻すと、つと、涙が零れて、スーパの上に落ちた。

うちやアホみたいな幸せモンやな。

「……あれー？ ナナさん泣いてんのー!?」

それを見てた、精神がだいたい小学生の千里が、茶々る。

「あほお、ちやうわい、湯気が目に沁みんねん」

視線が集まる。

いまこの場を作ってくれたのは、ナナだ。

まるで田舎に親類縁者一同が集まった時に、彼らの

祖である大婆様を見るように。

「……さとり、ハンカチ」

「あ、すまん。さつき靴磨きに使つてもた」

「どんくさいなあホンマに」

「紙ナプキン使いいな。そこにあるやろ」

「あんたのハンカチで拭きたいんやがな」

「わがままやなあ。」

あ、ティッシュやつたらあんで。ほれ」

「またテレクラのやんか！ それも違うテレクラやし！」

「頼まれると嫌とは言えない優しい人に見えるから渡されるんやろうなあ」

「スケベ顔してブーツと歩いてるからや」
「プロデューサー」

美緒が助け舟を出した。

ナナはこういう時、案外、素直じゃないね。

「ん？ 僕？」

「そ。どう？」

「ん、んー、ええよ。」

そんなえらいことができるかどうか、わからんけど」

「……んぐ、そんなことないよ！」

またももが立ち上がる。

「こんなに美味しいご飯がおなかいっぱい食べられるのは、空堀プロデューサーの、おかげ!!」

「そうだそうだー！」

「いやまあ……なんですキャプテン」

「今日の、ご感想で、中締めをひとつ」

「ああ。……じゃ」

立つ、視線が集まる、考える。

思ったことや感じたことは、山とある。でもいまそういうのをコチヨコチヨ言っても、しょうがあるまい。で、らしくもなく、両拳を天高く突き挙げて、叫ぶ。

「優勝、するぞー！ー！！」

「なんのだー！！」

期待通り千里が瞬速でツツコんでくれて、みんな大

笑い。

三十六も、ニヤリ。

なんのでもいい。

自分の思う「優勝」で。

そして千里、期待以上に、余計なことも言う。

「……そこは

『ナナ、好きだー!』

じゃねーんスカ!？」

「ああ、じゃついでにそれも」

「はいドサクサ告白きまちたー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ワーーーーッ……

「ついでかい！

っていうか！

あんた、あんたなにを、言うтонねん！！」

勢いよく振り下ろした紙ナプキンが、三十六の頭に
降る。

ふあっさくさくさん。

「ま。観ました流乃さん、あの優しいツツコミ。さすがおしどりななんとかですわね」

「あたしたちでしたら手刀がめり込んでもすもんね、おはなさん。ああデリシヤス・デリーーシヤス」

わははははははははは……

本日いちばんの笑いの渦が起き、なかなか、収まらない。

守備の嫌いなナナは、真っ赤な顔をして、ラーメン

に向き直って、かぶりつく。

「ナナちゃん、お返事は？」

「しらん！」

「知らんは無いでしょう、『YES』でも『はい』でも、気持ちを伝えないと」

「ええよキャプテン、嫌われて無いだけで」

「ダメよ空P、そんな消極的なことじゃ。狙った獲物は四六時中しがみついてもゲット。これです」

「美緒さんに言われても説得力ないなあ」

「ぐはっ。ぶーめらんっ」

だはははははははははは……

横でにこにこ顔で話まるで聞いてないコーチとの対
比がまた、もう……

「……もおお、アホなことばかり言うてんと、あんな
たもはや食べえな。のびてるやんか美味しいラーメン
が」

「食べる食べる。ちゃんと食べるよ」

「もうあかん、そんな、美味しいラーメン食べなあか
ん。」

大將―！ これもひとつ作って―！」

「ええって」

「これはウチが食べるさかい」

「まだイケるの!？」

「まだまだ・まだ・まだ、やで。」

見ときや、ウチの本気を」

「別に見たくないツス」

「見とき、言うてんの！」

「ああはいはい、はい」

「あんたもう、ホンマその、真面目に生き――――」
!!」

「俺以上真面目に生きてる人間なんざ世の中に五〇%ぐらいしかおらんー！」

「平均以下やないのー！」

「俺はもう平凡な幸せを掴みたい……」

「あかん、そんなことやったらあかんで、日本や！」

「いや、世界や！　世界を、掴むんや！」

「サッカーの、ためなら、男を泣かすー」

「びえーん。」

「おかあちゃん、町内一ぐらいでええでー」

「アホーウ！　おとうちゃんはいつも夢がちいちやい！」

むしろ、むしろ宇宙一やーッ！」

これが関西人か。

打ち合わせ無しで流れるようなコントが繰り広げられるのを観て、その場の面々は戦慄した。

それはいいけど、もう、アレじゃん。完全に。

漫才とか、善哉とか、茶碗とか、そういうのの前に付く単語じゃん。

なんだいつのまに。

さすが……さすがナナ！ 仕事が、早い！

「なんやその辛気臭い顔は。

ラーメンやラーメンや、ラーメン持ってこーい！」

「せやからいま来るって！」

店舗を転がすような笑いの波は、引かなかつた。

しあわせは、どこかにあるものではない。

道すがら、感じるものである。

この日、ナナは、しあわせだった。

もちろん、三十六も。

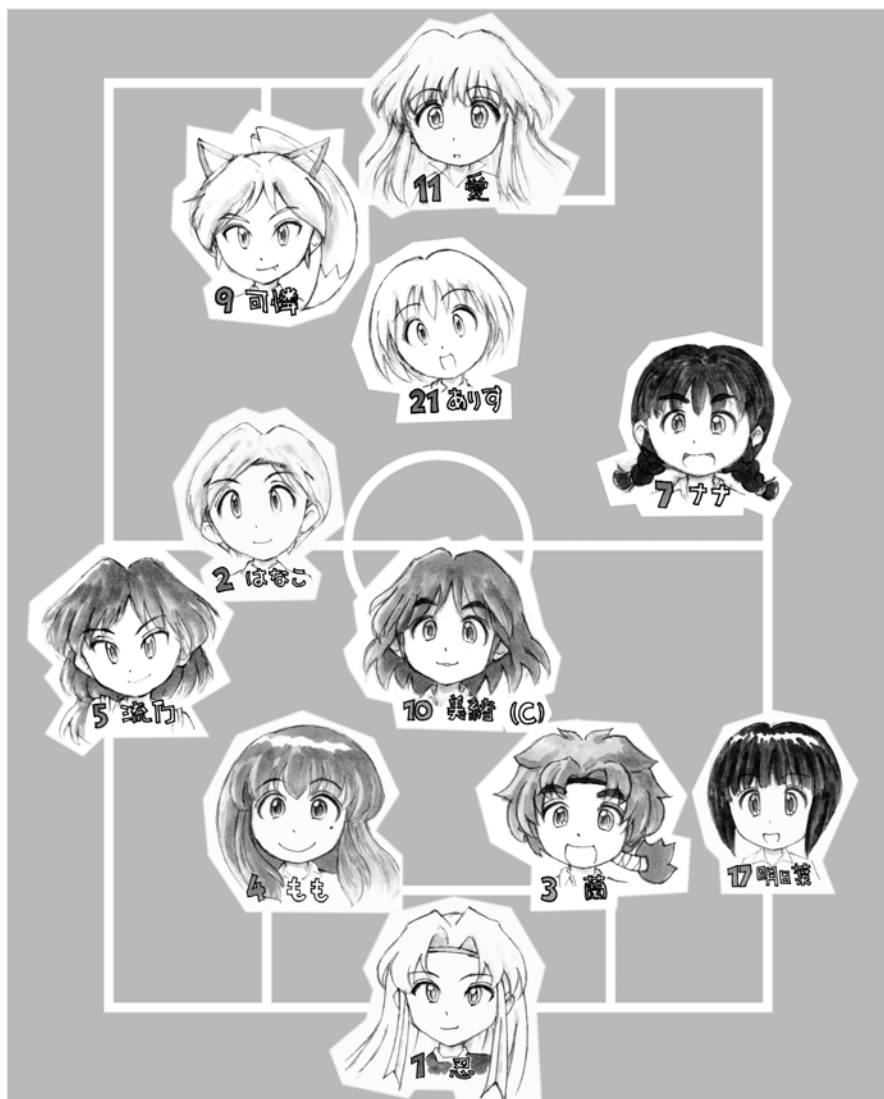
気持ちと言葉が裏腹なのは、なんてったってお年頃。
細かいことはどうでもええねん、ぶつかりや開く扉
もあるて。

抜けないDFいるものか、勝てない勝負があるもの
か。

ドリブルダンサー・難波鳴海が今日も行く。

Never Give Up, Go Ahead, and DO MIRACLES!
Miracles! Episode 7
"43"

(76min) 4-4-2 Dribble Dancer



Reserve

OUT

OUT



■あとがき

ありがとうございます、ながたかずひさです。
お楽しみいただけましたでしょうか。

まずは女子日本代表、W杯優勝おめでとうございます！
このお話を描き始めた 99 年頃には、アメリカは全く歯がたたない強敵でした。
（そんな感じのことをナナや可憐がたまに言います）
それをあの大一番で……いやはや、時は経つもの、状況は変わるもの。
どんな時でもまさに、ネバーギブアップゴーアヘッドアンドドウ・ミラクルズ！ですよ！

さてさて、初めて本格的なリメイクに挑戦してみました。
筋は同じですが、全書き換えです。
どうでしょう、姉さん可愛カッコよく描けてました？
大ちゃんは相変わらずヒドイ男ですねあれ（笑）

この巻が同人時代最後の作品で、当時随分難儀した記憶があります。
ある程度思う通り書けるようになってくると、
いいこと描こう、ドラマチックに描こう、って変な欲が出ちゃうんですね。
それを無理にまとめるから窮屈で……今回読み返してクラクラしました。
いやぁ面目ない。精進します。
またみんなの活躍を、手直ししたり、新しく描いたり、していきます。
楽しみにそして気長にお待ちいただければ。

お読み頂きまして、まことにありがとうございました。
貴方様に健康と笑顔のあらんことを。

■おくづけ

書名 Miracles! Episode 16(restart) -Fighter? Sister!-
作者 ながたかずひさ
発行 サークル PowerNetwork!!
発行日 2011 年 8 月 14 日
Web <http://rakken.net/>
twitterID KazuhisaNagata
Mail nagata@mti.biglobe.ne.jp

